

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

石川 禎 浩

はじめに

一 一九二〇年前後、北京におけるマルクス主義の伝播

1 『農報』副刊と陳溥賢のマルクス主義紹介

2 李大釗と日本の社会主義運動

二 上海共産主義グループのマルクス主義受容と建党活動

1 国民党系人士のマルクス主義研究

2 留日学生グループの役割と建党活動

3 ヴォイチンスキーの来華と共産党の組織化——新たな外来知の登場——

三 中国共産党創立時の知的状況

1 一全大会の争点と「綱領」、「決議」

2 党内理論家の登場——李漢俊、李達から蔡和森、瞿秋白へ——

結 語

付録 中国社会主義関連書籍解題

(一九一九—一九三三年)

付録 日中社会主義文献翻訳対照表

はじめに

九一九年は周知のように五四運動の勃発した年であったが、また中国における本格的マルクス主義研究が開始された年でも

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

あった。一九一九年を境とする社会主義関係文献の急激な流入は目を見張らせるものがあり、全国の主要な新聞、雑誌は社会主義思想の紹介に大きな紙面を割いていた。そして、大都市を中心に広まったマルクス主義はやがてソビエト・コミンテルンの強力なあと押しを得て、一九二一年には中国共産党誕生へと結実していくことになる。しかし、マルクス主義を受け入れた当時の知識人たちにとって、マルクス主義は同時代の多くの先進思想と同様に、まず文字、つまりは書物を通じて学ばれたものであったということは、中国のマルクス主義史を考えるうえで、充分な考察が加えられなければならないように思われる。たとえば、毛沢東思想研究において、かれが何時、どのような社会主義文献を目にしてマルクス主義者への転換をなしたとげたのかということが考察の対象になるゆえ⁽¹⁾も、共産主義運動においては知識の獲得が革命運動と不可分の関係にあることを示唆している。

社会主義研究の充分な蓄積のうえに開花したものでもなく、経済学説発展の帰結として到達されたものでもなく、ましてや労働運動からの体得を契機にするものでもないマルクス主義、言いかえれば、「学ばれた」ものとしてのマルクス主義受容という中国での受容史は、「学ぶ」という過程で現れてくる外来文化受容の側面において興味をそそるだけでなく、マルクス主義を「学んだ」ことが、その後のコミンテルン影響下の共産主義運動に、「知識と指導」という共産党独特の属性（各国の共産主義運動の指導者が、いずれも著作集や全集という形で革命の理論体系を持たされることを想起せよ）をもたらし、とも言い得るだけに充分な考察が加えられなければならない。その意味で、一九二〇年代以降の日本においても、マルクス主義の急速な流入ののちには、「知識としてのイデオロギーから出発した社会主義者」⁽²⁾が若者を中心に新しい左翼知識人を形成した、といわれることは同時期の中国を考える場合にも示唆的であるように思われる。

五四時期にマルクス主義の伝播にかかわり、共産党の創立メンバーとなった初期共産主義者においては、マルクス主義はいかにして学ばれたのか。かれらはマルクス主義を知ろうとして何を読んだのか。そして、その書物はどのようにして手にいれたのか。西洋の新思潮を摂取することが、言語の面でも、また文献、書籍の面でも、今日の状況とは比べものにならぬほど困難であった五四時期中国におけるマルクス主義をとりまくこれらの疑問は、今なお多くが解明されないままになっている。たとえば、

五四時期には、数多くの社会主義解説書が刊行されたことは確かだが、いつ、誰によって、どのようなものが翻訳、出版されたかについては、マルクス・エンゲルスの著作をのぞく大多数の書籍については、まとまった解題がいまだに見られない。⁽³⁾ 本稿はまず、中国共産党創立前後における社会主義学説の流入、紹介、翻訳、出版の諸状況を綿密に追うことを第一の課題とする。そして、当初、精神活動の準拠にすぎなかった社会主義の知識が、共産主義運動における指導力になっていく過程を跡づけていくことを第二の課題とする。

その意味では、本論文は国民革命期に顕著になるコミンテルンの中国共産党支配を可能にした初期共産党の精神状況を明らかにすることに、いま一つの意図を持つものであるともいえる。コミンテルンによる共産党支配は決して資金や武器の援助といった物的従属関係、あるいはソ連人顧問との人的従属関係からのみ派生したものではなかった。コミンテルンの革命理論をマルクス・レーニン主義と一体化せしめるような精神構造が中国の共産主義者に払拭しがたく定着していればこそ、コミンテルンによる指導は物心両面にわたって貫徹されたといえるだろう。その精神状況の端緒はすでにマルクス主義の受容と、それにひき続く共産党結成の中に見ることができよう。

一 一九二〇年前後、北京におけるマルクス主義の伝播

1 『晨报』副刊と陳溥賢のマルクス主義紹介

中国における先駆的マルクス主義者と称される李大釗は一九一九年夏、北京を逃れて滞在した郷里の昌黎で、かれの記念碑的論文「我的馬克思主義觀」(「私のマルクス主義觀」)を執筆した。⁽¹⁾ その中で、かれはマルクス主義の概要を紹介し、同時に批判的視点を含むかれのマルクス主義に対する見解を明らかにした。従来、五四時期中国におけるマルクス主義伝播を検討する際に

は李大釗のこの文章を取りあげるのが通例であるが、研究の進んだ今日においては、マルクス主義学説の紹介という点では、北京の『晨报』第七版、即ち「晨报副刊」や、上海の『時事新報』の副刊である「学燈」の記事がそれに先行するということが周知の事実になっている。

なかでも、「晨报副刊」の「マルクス研究」專欄は、早くも五四前夜にマルクス主義紹介の第一声をあげ、その紹介記事が間髪を置かず『民国日報』、『時事新報』、『新青年』等の進歩的有力新聞、雑誌に次々と転載され、五四時期におけるマルクス主義伝播の幕開けを告げたという意味で、マルクス主義伝播史上において重要な位置を占める。また、「晨报副刊」のマルクス主義研究は、次節で述べるように、先駆者李大釗のマルクス主義受容そのものに対しても少なからぬ関連を持つことになるのである。

さて、日刊紙『晨报』は北京において発行されていた研究系の新聞であり、毎日の発行部数は一九一九—二〇年時点でおおよそ五千—七千部を数え、北京では大手の新聞に属していた。五四時期の新聞界においては、いまだ全国紙は存在しておらず、『晨报』の流通もほぼ北京周辺に限定されていた。しかし、副刊を創設してのちには、当時中国各大都市に続々と設立されていた書社、書報販売部等の書籍仲介所を通じて定期購読者を獲得するに到っていた。たとえば、毛沢東らが湖南の長沙で、新文化を普及させる目的のもと、一九二〇年七月に設立した「文化書社」は定期購読新聞として、上海の『時事新報』とともに『晨报』を取扱い、毎日四五部の引き合いがあったという⁽³⁾。また新聞の直接の購読のほかにも、晨报副刊の記事はその新鮮さゆえに全国の主要地方紙、雑誌にも転載されており、その影響力は一地方紙の枠を超えるものであった。

その「晨报副刊」は、一九一九年二月より文化面にあたる副刊（第七版）の面目を、「自由論壇」、「訳叢」の二欄を加えることで一新し、さまざまな海外思潮の紹介を始める。そして、四月一日から淵泉訳「近世社会主義鼻祖馬克思之奮闘生涯」（河上肇「マルクスの『資本論』」、「社会問題管見」一九一八年刊所収の抄訳）を掲載し、マルクスの人となり、およびその生涯に対する紹介を行った。続いて五月五日には、マルクスの誕生日を記念する形で淵泉訳「馬克思的唯物史観」（原著は河上肇「マルクスの社会主義の理論的体系」、「社会問題研究」第二冊、一九一九年二月、および河上肇「マルクスの唯物史観」、「社会及国体研

究録』一卷一号、一九一九年四月）、次いで九日には食力訳「労働與資本」（原著はマルクス『賃労働と資本』であるが、食力訳は『社会問題研究』第四冊所収の河上肇訳「労働と資本」からの重訳である）が掲載され、六月にはいと、さらに淵泉訳「馬氏資本論釈義」（原著はカウツキー『カール・マルクスの経済学説』であるが、淵泉訳は高畠素之訳『マルクス資本論解説』一九一九年五月刊からの重訳である）の訳載が始まり、これは途中の中断を挟んで一月まで延々と連載された。同様に七月には訳者無署名「馬氏唯物史観概要」（原著は堺利彦『唯物史観概要』、『社会主義研究』創刊号、一九一九年四月、所収）を掲載しているが、訳文の社会科学関係の専門用語の訳語からこれも前述の淵泉の手にかかっていることが推定される。⁽⁴⁾このほかにも「晨报副刊」は七月に訳者無署名「馬氏唯物史観的批評」（原著は『改造』一九一九年七月号所収の賀川豊彦「唯心的経済史観の意義」）を掲載している。このように「晨报副刊」は一九一九年五月からほぼ連日マルクス主義紹介の翻訳記事を陸続と掲載し、五四時期のマルクス主義紹介の幕開けを告げたのだった。

上記「晨报副刊」連載の淵泉訳稿は、単に時期的にもっとも早かつただけでなく、「生産手段」、「社会意識形態」、「上部構造、下部構造」、「社会存在が人間の意識を決定する」といった当時の中国にはじめてお目見えする社会科学の用語に注釈を加えた点においても、一等拔き出た水準を持っており、ほどなく、絶大な影響力を有する『新青年』や『民国日報』、『時事新報』、⁽⁵⁾では遠く四川の『国民公報』にまで転載されることになる。とりわけ一九一九年六月から足かけ半年にわたって「晨报副刊」に連載されたカウツキーの「馬氏資本論釈義」は、そのドイツ語版や日本語版が当時の西欧及び日本において、マルクスの経済学説をうかがい知るのにもっとも平明かつ正確な著作であるとされていたものであった。たとえば、高畠素之の翻訳にかかる日本語版の『マルクス資本論解説』は、「何人が翻訳すると、恐らくこれ以上に理解し易くすることは、殆ど困難であらう。この訳文を読み理解し難いと思う者は、仮び独逸の原文を読むとも、同様の感を為すを免れぬであらう」と、河上肇や堺利彦によって絶賛されていたものである。残念ながら、中国語訳「馬氏資本論釈義」や、その単行本である『馬克斯経済学説』⁽⁷⁾は日本語版のような爆発的反響を呼びはしなかったが、マルクス主義経済学の紹介の皮切りとして同書が選ばれ、半年にもわたって

連載されたことは、『晨報副刊』編集者の見識の確かさをうかがわせるものだった。

五四時期に刊行された雑誌の総合的研究書である『五四時期期刊紹介』をはじめ、李大釗の年譜の類にも見られるように、この時期の『晨報副刊』の編集には李大釗が関与していた、といわれている⁽⁸⁾。またこれらマルクス主義紹介を指導したのが李大釗本人であったという説さえある。確かに李大釗は一九一六年時点では、『晨報』の前身である『晨鐘報』の編集主任を務めたことがあったが、同年九月に、就任以来わずか二〇日余りで、新聞の発行の後盾であった研究系政客湯化龍らと衝突して編集主任を辞し、『晨鐘報』を去っているのである⁽⁹⁾。その後、『晨鐘報』が『晨報』と改まって後も、李大釗はおりにふれて『晨報副刊』に寄稿をしているが、実は五四時期の『晨報副刊』の編集そのものに李大釗が直接に関与していたことを示す原資料は確認されていない⁽¹⁰⁾。とすれば、五四時期の『晨報副刊』紙上で積極的にマルクス主義紹介をリードしたのは李大釗ではなく、先述のいくつかの日本語社会主義文献を翻訳、紹介した「淵泉」であると考えなければなるまい。

『晨報副刊』に中国語訳の社会主義文献を次々に翻訳、発表したこの「淵泉」とは一体誰か。「淵泉」とは当時、『晨報』記者であった陳溥賢の筆名である⁽¹¹⁾。

陳溥賢、字は博生、福建省閩侯の人、一八九一年生まれ。一三歳の時、日本に留学、早稲田大学政治経済科卒業後さらに欧米に遊学し、ロンドン大学に学ぶ。一九一六年前後に帰国し、『晨報』の前身である『晨鐘報』に入り、のち『晨報』の主筆となる。一九一八年暮れ、『晨報』の特派員として来日、一九一九年一月より「黎明会」や日本社会主義思想の現状を精力的に取材する。五四運動以前には帰国し、四月より「淵泉」の筆名で日本の社会主義思潮の紹介、マルクス主義の紹介を積極的に展開する。一九一九年五月四日の時点では、『晨報』編集長の任にあつて、五四運動を積極的に支持する。一九二〇年暮れ、中国新聞界初のヨーロッパ特派員として渡英。後に、『民言報』主筆、東北边防軍司令官公署顧問等を歴任。三〇年、北平晨報社社長、のち国民党系の南京中央通訊社に加わり、三六年その東京特派員となる。三八―四八年、国民参政會議員、四〇―五〇年中央通訊社主筆、四八年以降国民政府立法委員、一九五七年八月、台湾において死去⁽¹²⁾。

この陳溥賢は五四時期のマルクス主義紹介の先導者としても充分に注目されなければならないが、かれの果たした歴史的役割は、一見してわかるように、かれの前半生が多くの点で李大釗のそれに重なっている点で一層重要である。陳溥賢と李大釗とは同じ時期（一九一五—一六年）に早稲田大学に在学し、留日時期にはともに袁世凱の帝制運動に徹底して反対し、留日学生総会や、その機関紙である『民彝』を舞台に活躍したのであった。留日学生総会の機関紙である『民彝』創刊号には留日学生総会文事委員会成立の記事が出ているが、李大釗、陳溥賢ともに委員として名を連ねている。また同号には一六年春に「中国經濟財政学会」が設立された記事も載っているが、その六名の責任委員にも李、陳の名が見える。二人は帰国後そろって『晨鐘報』の編集に参加しているように、一六年以降も同僚として、かなり親密な関係にあったと推測されるのである。これまでこの陳溥賢と李大釗の関係について触れている研究は全くなく、ごくわずかの回想録において両者の関係が曖昧に言及されているに過ぎないが、五四時期の李大釗のマルクス主義受容に関してはこの陳溥賢の存在を抜きにしては語れないので、まず現在目にしうる資料からうかがわれる陳溥賢の五四時期の活動をかいつまんで紹介しておこう。

先述のように、陳溥賢は一九一八年暮れから数カ月間、東京に『晨報』特派員として派遣されている。当初かれの主な関心は、きたるパリ講和会議に臨む日本の朝野の態度を探ることにあつた。かれが淵泉の署名で『晨報』に送った「日本之講和態度」（一九一九年一月一日）、「原内閣之第一次中日借款」（同一月二日）等はそのことを物語る。当然に中国の大多数の関心事であつた山東問題の帰趨がかれの念頭にもあつたのである。しかし、おりから日本の言論界に大きな波紋を投げかけていた吉野作造らの「黎明会」の活動がまたたく間にかれの注意を引きつけ始める。「日本之黎明運動」（一九一九年一月二八日）、「黎明運動之第一声」（同二月一四日）において、かれは満腔の期待をこめて黎明会を声援している。そして一旦新思潮に向いたかれの関心は、普通選挙運動から労働運動へと展開し、ついに、「冬の時代」をくぐり抜けて息を吹き返しつつあつた日本の社会主義者の動向へと向かつていったのだつた。かれは帰国の後、一カ月にわたって『晨報副刊』に連載した「東遊随感録」において、その第一八回を「日本の言論界」とし、その中に「社会主義研究の雑誌」の項を立て、河上肇の『社会問題研究』（発行部数二

万余りと紹介)、堺利彦、山川均らの『新社会』、『社会主義研究』(同じく七、八千部)を雑誌の性格とともに紹介していた。⁽¹⁴⁾そして続く第二七回を特に「日本の社会主義運動」と銘打ち、「東洋社会党」に始まる日本社会主義運動史を振り返る一方、現時の社会主義者を、堺利彦らの「純粹 Marxism」派と高島素之らの「National Socialism」派、および大杉栄らの「無政府共產主義」派の三派に分類していた。そして、欧州大戦以来一瀉千里の勢いにある日本社会主義運動が「障害に遭うことなく、順調に目的地に到達する」ことを願っていた。⁽¹⁵⁾

かれがそれら社会主義思潮の中でもとりわけマルクス主義思潮の動向に注目していたことは、帰国後の執筆にかかると思われる一九一九年三月二〇日付『晨报』の「日本之新潮流」や、同四月二四日の「日本之馬克思研究熱」という記事から⁽¹⁶⁾でも充分にうかがうことができる。「日本之馬克思研究熱」で日本のマルクス研究熱を「誠に学術界の一巨観なり」と嘆じたかれは、日本で社会主義運動、労働問題に触れたことが契機になったかのように、帰国後それら新思潮を大々的に紹介していったのである。

淵泉こと陳溥賢の日本についての考察の対象が、当初の軍部、政党、議会といった統治機構から次第に労働運動、社会運動へと推移していったことにはかれなりの必然性があつた。一九一九年、かれの最大の関心は当然のように山東權益をめぐる日中関係にあつたが、かれは日本の軍部、大政党、実業家の中国政策を通観したうえで、日中の「真の親善」は日本の労働階級が政治の主導権を握つたあとでなければ実現されないと断言するのである。かれはいう。

わたしの觀察によれば、中日両国がもし真の親善を増進し、互助の精神を發揚せんとするならば、軍閥の時代では絶望的であるし、資本家の時代でもさらに望みはない。日本の労働階級が台頭し、主人公となることができた時、はじめて中日両国の関係は我々が理想とする境地に達することができる。ゆえに我々は日本労働階級に無窮の期待を抱くのである。⁽¹⁷⁾

かれの言葉によれば、かれが日本の社会主義思潮に関心を寄せるのは、その学説もさることながら、それが日中関係の根本的変革をもたらし、究極的に中国の「改造」に資するところがあるからだつた。日本における社会主義運動の進展を日中問題解決

の大前提とみなし、日本の社会主義思潮に接近していった点は、次章でのべる戴季陶とも共通する興味深い認識である。

かれの社会主義にたいする親近感は当然のように、その延長線上にあったロシア革命や中国の労働問題に対しても及んでいた。陳溥賢は、革命後のボルシェヴィキ政権にかんしては、四月一三日に淵泉署名で「各国はレーニン政府を承認せんとしている」と題する論評を掲げ、欧米の一部列強に追従してボルシェヴィキ政権否認策をとる北京政権に疑問を呈し、きわめて積極的にボルシェヴィズムの研究、革命政権承認をしよう訴えていた。またかれは、一九一九年五月一日の晨报副刊を「労働節記念」号と銘打ち、自ら「人類三大基本権利」の一文を発表して、労働者としての人類が「生存権、労働権、労働全収権」を持つことを訴えた。そして、北京の北洋政府が無政府主義、社会主義を危険思想とみなして取り締まろうとすることに對しては、「資本階級が危険とみなす思想は、労働階級から見れば正当に防衛すべき権利なのだ」⁽¹⁸⁾と述べて反対するなど、言論弾圧の苛烈であった北京で、敢然と「危険思想」の紹介を続けていた。

かれの五四時期における活躍は、活字のうえでのマルクス主義紹介だけにとどまるものではなく、この時期に光芒を放つ日中學生、教授交流運動へも及んでいる。

五四運動直前の時期において、日本の吉野作造と北京の李大釗の間には、吉野ら「黎明会」の『黎明会講演録』や陳独秀、李大釗の主編になる『每週評論』の交換が行われていたことはいまや周知の事実に属していよう。⁽¹⁹⁾李大釗は黎明会を率いる吉野らの動向に大きな注意を払い、自らも吉野に倣って胡適らと中国版「黎明会」を組織し、頑迷思想に対する共同戦線たらしめようという意図を持っていた⁽²⁰⁾だったが、李大釗が黎明会について述べた数篇の文章を見ると、かれの黎明会に対する情報のほとんどが、陳溥賢の取材した記事に拠っていると思われるのである。⁽²¹⁾李大釗と吉野作造との五四時期の交流は、二〇年五月の中国教授、学生の日本訪問となつて結実したが、実は両者の間に立つてこの橋渡しに尽力したのも陳溥賢その人であった。

吉野は一九二〇年五月一日付『大阪毎日新聞』に談話を載せ、中国教授、学生訪日について、この計画には「北京大学側では必ず李大釗、陳啓修氏等の教授の外に晨报の有力なる記者陳溥賢氏等が大に斡旋しつゝ、あること、思ふ」と述べている。⁽²³⁾晨报特

派員として東京に滞在していたころ、黎明会をはじめとする日本の新思潮の状況をつぶさに観察し、吉野個人にも親しく接しており、⁽²⁴⁾一方北京にあつては李大釗とも旧知の間柄であつた陳溥賢はこの両者を仲介するには最適の人物であつた。この中国教授、学生訪日団が二〇年に日本に携えていった宮崎龍介宛の紹介状には差出人として、李大釗、陳溥賢、陳啓修の名前が書かれて⁽²⁵⁾いることから見ても、一九二〇年にかけての時期に李大釗、陳溥賢と吉野作造の間には緊密な関係があつたことは間違いないのである。

陳溥賢がとりしきつていた「晨报副刊」上のマルクス主義研究関係の記事が、すでに日本の雑誌、書籍からの翻訳で占められていたことからわかるように、五四時期のマルクス主義受容の問題は、同時代の日本のマルクス主義研究の動向を抜きにしては語ることができない。これが単に「晨报副刊」の陳溥賢のみに限られていたわけではなかつたことは、その後中国の雑誌に陸續と発表されたマルクス主義関係の論文の多くが日本のマルクス主義研究の成果を受けたものであることを確認すれば十分に明らかであろう（注末の付録「日中社会主義文献翻訳対照表」を参照）。五四時期の中国におけるマルクス主義の流入とは、後述する上海の状況からもわかるように、日本社会主義思潮の横溢であつたということさえ可能なのである。そしてその横溢とは、日中文化交流史上において二度目の横溢であつた。一度目の横溢とは、五四運動時期の十数年前、すなわち清末革命運動における社会主義思潮の流布である。

つまり、中国において最初に「社会主義」が喧伝された時期（一九〇〇年代）が、日本の「大逆事件」⁽²⁶⁾以前の社会主義思潮の時期と重なること、また幸徳秋水らの影響が清末社会主義の紹介に顕著に見られたのと同様に、五四時期中国の社会主義、マルクス主義の伝播も、大正デモクラシー期の日本社会主義運動の復活と五四時期中国との重なりあいの中で起きたのであつた。その間の事情に関しては、つとに馮自由が一九二〇年に次のように述べている。

「日本では」幸徳秋水が殺されてより、この種の危険な説をあえて唱道するものはいなくなった。中国の新学の書籍は大半が日本語から翻訳される。日本でこの種の印刷品がそもそも少なくなつたのだから、中国にどうして訳本が出てこようか。

……「そして今や、」わが国で社会主義を主張する者は、多くの日本語訳本という新たな味方を得て、各種の書籍、新聞を發行し、この種の主義の宣伝に全力をあげている。⁽²⁷⁾

三一運動、五四運動に見られる朝鮮、中国の反帝國主義運動の高まりは、まぎれもなく日本の自由主義者、社会主義者にとって、自らの内に巢食う帝國意識払拭のための試練、試金石であったが、その一方、日本における社会主義研究の發展は紛れもなく中国、朝鮮における社会主義運動勃興の不可欠の条件となったといえるのである。時に相矛盾する過程を含みつつも、日本の社会主義運動と中国、朝鮮の反帝國主義、社会主義運動は相互に影響を与えあいながら發展、深化していったダイナミックなうねりとして理解できるのである。たとえば、五四時期に中国において積極的に社会主義を受容した知識人にとって、社会革命による軍國主義日本の大改造があつてこそ、中国の軍閥支配打破が容易になるとの認識があつたように、日本の社会主義運動の進展は、単に日本一國の社会變革以上の意義を持つという熱い注目を浴びていたのである。

他方、文化受容史の視点から見ると、清末以降の中国において、西洋の思想を受容する場合、日本において翻訳、紹介されたものを選択的に中国語に重訳するということはしばしば起こつたことであり、清末における西洋起源のいわゆる文明用語の翻訳や、共和思想の紹介の際にもそれらの思想、語彙は日本経由で紹介されたものが優勢を占めた。中国において、マルクス主義研究の前身が、一部国民党系人士をのぞいて欠如していた歴史的背景の下では、五四時期の多くの中国知識人にとって「マルクス主義」は未知に近い代物であつた。またマルクス主義文献に頻出する社会科学に関する用語も、多くは接したことのないものであつてみれば、五四時期のマルクス主義の受容が日本の文献を通してなされ、それに付随する社会科学の用語が日本語を直輸入する形で採用、定着したことは極めて自然なことであつた。

ここで簡単に同時代の日本の社会主義研究の概観を述べておこう。一九一九年という年は日本のマルクス主義史の中でも特筆すべき年であつた。一九一〇年の大逆事件以来、日本の社会主義運動はいわゆる「冬の時代」を迎えることとなり、堺利彦らの日本国内の社会主義者は、「売文」をもつてかろうじて孤塁を守っていたが、ロシア革命の勃発、日本国内における社会問題の

深刻化を契機に、再び社会主義は多くの人々の関心をひき始めていた。堺利彦、高島素之らの雑誌『新社会』もマルクスに関する紹介記事を一九一八年頃から掲載し始めていた。そして、一九一九年になるとマルクス主義はいよいよ青年たちの熱い注目を集めるところとなった。マルクス『資本論』第一巻の的確な紹介書と言われたカウツキー著、高島素之訳『マルクス資本論解説』は一九年五月に出版されるや、初版の二万部が飛ぶように店頭から消え、たちまち十数版の増刷を数えていた。また、河上肇が一九年一月に創刊したマルクス主義解説の個人誌『社会問題研究』の第一冊が一二万部、第二冊が八万部という驚異的な売行きを示せば、堺利彦らの『新社会』も一九一九年には一万五千部以上を発行するようになっていたし、ついで創刊された山川均らの『社会主義研究』も堅実な売れ行きを示していた。⁽²⁸⁾さらに、革新的総合雑誌である『改造』、『解放』がともに一九年に創刊され、特に『改造』は一九年後半から社会問題、労働問題、社会主義思想を取り上げて急激に発行部数を伸ばすなど、⁽²⁹⁾日本には、「マルクスでさえあれば糞も味噌もゴチや混ぜにして、みな相当に歓迎されうと云ふ^マ実に恐ろしい世の中」⁽³⁰⁾と評される思想状況が現出していたのであった。

陳溥賢は東京特派員時期（かれは一九年初頭の他に、同年の七月から八月にかけて再び特派員として東京に赴いている）に、それら日本の社会主義思潮復活の息吹をいち早く捉え、日本でのそれらの出版の後、間髪を置かず「晨报副刊」紙上でその翻訳を行ったことになる。

『晨报』の編集長として、五四時期において最初にマルクス主義を中国に紹介した陳溥賢はその後、一九一九年後半に急進的青年たちの発足させた「工読互助団」⁽³²⁾運動の発起人に名を連ね、それを支持した。⁽³¹⁾また、かれは一九二〇年暮れに、中国新聞史上初の欧州特派員としてイギリスへ渡ったが、渡英後も共産主義運動に注意を払い、『晨报』紙上に「英国共産党大会記」や「第三国際共産党底組織」（「コミンテルンの組織」）等の記事を送って、なお国際共産主義運動に注意を払っている。しかし、かれが五四運動から国民革命の時期にかけて、工読互助団運動以外に、政治的に何らかの運動に参与した形跡は管見の限り見られず、したがって中国共産党の活動にかかわったという事実もない。略歴を追う限りでは、李大釗亡き後、かれが国民党との関

係を強めていることを確認できるのみである。しかし、かれが五四時期にマルクス主義の中国への紹介（とりわけ中国語として未消化の語句に注釈を加える等の学説を紹介するにあたって）の先駆者であったという事実は、当時のかれの李大釗との交流とともに尊重されなければなるまい。なぜなら、マルクス主義はまず解説の必要な学説としてかれによって中国にもたらされたのであり、そのうえにたつて革命の学説に転化していったからである。

2 李大釗と日本の社会主義運動

陳溥賢は、吉野作造ら日本知識人と李大釗とを結ぶ仲介役としての役割を果たしたが、その役割はそのまま李大釗のマルクス主義受容の過程においても見受けられる。

周知のように、李大釗は一九一九年夏から秋にかけて、かれの記念碑的論文とされる「我的馬克思主義觀」を執筆したが、その論文の前半は、すでに指摘されているように、ほぼ河上肇の論文の引き写しであった。⁽³³⁾そして、その河上論文「マルクスの社会主義の理論的体系」は、前述のように、陳溥賢が「淵泉」の筆名ですでに「晨報副刊」上で翻訳、紹介していた以上、また李大釗と『晨報』及び、陳溥賢とのつながりが濃厚な以上、李大釗がそれら「晨報副刊」上の記事を目にしていなかったとは考えられない。李大釗のマルクス主義受容にあたっては陳溥賢の資料上の、あるいはマルクス主義解釈上の幫助があったと見るのが正確であろう。

中国においては、社会主義に対する関心は高まりつつも、中国語の社会主義文献はいうに及ばず、外国語のマルクス主義関係文献さえほとんど入手が困難であったということを想起するならば、李大釗個人が一九一九年半ばという極めて早い時期にマルクス主義学説の紹介をなした背後には、李大釗自身のマルクス主義への興味という内発的要因の他に、陳溥賢のような日本の社会主義関係の最新の文献を提供してくれる支援者がいたという今ひとつの要因があったということは記憶されてしかるべきであろう。そして、陳溥賢の五四時期の積極的な著訳活動と李大釗の言論の陰に絶えず見え隠れするのが、中国マルクス主義の伝播

のための先行条件となった日本における社会主義思潮の勃興およびマルクス主義研究の進展なのである。

繰り返すまでもないことだが、五四時期のマルクス主義の紹介、受容という過程は決して李大釗ひとりの作業ではありえなかった。李大釗の受容した一九一九年のマルクス主義学説とは、ほぼ河上肇によって解釈され、そのうえで若干の疑問点を付けられ、そして陳溥賢によって李のもとにもたらされたものだったわけである。そして、「我的馬克思主義観」の中で、マルクス主義学説を批評するにあたって、李大釗はその河上の観点をほぼそのまま踏襲しているのである。⁽³⁴⁾ 当時の中国の知的状況のもとで、未知の、しかも難解極まるマルクス主義を理解しようとする時、それはほとんど不可避のことであり、李大釗の歩みを未熟、模倣と論断してしまうことは、容易なことではあるが何ら積極的意義を持つまい。それよりむしろ、李大釗のマルクス主義受容の過程で我々が注目しなければならないのは、一九一九年の中国でマルクス主義に接触するということが、必然的に日本におけるマルクス主義研究をとり巻く知的状況に何らかの形で巻き込まれることを意味した、という外来思想受容の構造の方である。これこそ、李大釗をはじめ、上海共産主義者グループ等の中国初期社会主義者に共通して見られるマルクス主義受容の形態なのである。その意味で、李大釗が同時代のマルクス主義研究を中国に紹介しえたということは、「内的契機」をしばし置くとすれば、多くの部分をかれが陳溥賢という友人を得て、日本の「知」に近いところに位置していたことに由来するということも可能であろう。マルクス主義受容にいたって、外来の「知」への距離の持つ重要性、そして外来の知識というものが李大釗に与えた衝撃力は今まで以上に大きくなっていったと言えよう。

一九一九年後半の「我的馬克思主義観」や、翌年一月の「由經濟上解釈中国近代思想變動的原因」では、なおマルクス主義の唯物史観や「經濟決定論」に対して疑問を感じていた李大釗ではあったが、一九二〇年を通して唯物史観への疑念を解消し、三月には北京大学の学生を中心とする「マルクス学説研究会」を発足させ、同年末までにはマルクス主義の基本的観点である階級闘争論、唯物史観、剰余価値論等を受け入れるに到っている。この時期には、河上肇のみでなく、堺利彦、山川菊栄らの雑誌や単行本も李大釗の手に渡るようになっていた。⁽³⁵⁾ マルクス主義受容の進展と歩調を合わせるかのように、李大釗と日本社会主義運

動のつながりはさらに強くなっていた。その例として、ここでは李の「日本社会主義同盟」加入を手がかりに、李大釗と北京在住日本人との結びつきを見ることにする。

一九二〇年一二月、東京において堺利彦、大杉栄らを中心にして社会主義者の大同団結を図る「日本社会主義同盟」が結成されたが、興味深いことに、この同盟には李大釗が加わっている。⁽³⁶⁾李大釗はついに積極的に日本社会主義運動の同志に加わったのである。今日残されている社会主義同盟名簿（故向坂逸郎氏旧蔵、現政法大学大原社会問題研究所所蔵）によると、中国人とみられる参加者は三、四名であるが、李大釗のほかには著名な人物はいない。李大釗は一体どのようにして社会主義同盟のことを知り、そしてどのようなついでで同盟に名を連ねるようになったのだろうか。その疑問は、同盟名簿に李大釗とともに北京在住者として名前が載っている丸山幸一郎の経歴を調べると氷解する。丸山幸一郎とは、五四時期において北京の日本語新聞『日刊新支那』、同週刊誌『週刊新支那』の記者（筆名は丸山昏迷、昏迷、昏迷生）であった。⁽³⁸⁾当時、日本組合教会から北京に派遣されていた清水安三は後年、丸山に触れて次のような述懐を残している。

北京の思想家や文士達に最初に近づいた者は、実に丸山昏迷君であって、多くの日本からの来遊の思想家や文士達を、あるいは周作人さん、或いは李大釗先生の家々へ案内した者は、実に丸山昏迷君であった。実を言うと、かく言う私自身も、同君の同道で周作人や李大釗を訪ねたのであった。⁽³⁹⁾

かれは五四時期から、北京在住の中国の知識人を足繁く訪れていたらしい。その後、一九二二年、藤原鎌兄にしたがって北京の極東通信社に移り、日本語週刊誌『北京週報』の編集者になったあとも、丸山は李大釗とたびたび交遊していた。のち一九二七年四月に李大釗が張作霖の手にかかって殺害された時、清水安三は「李大釗の思想及び人物」という一文を載せ、その中で次のように述べている。

「李大釗は」民国五年早稲田大学を出て北京に帰り、白堅武氏と共に、『晨鐘報』という小っぱな新聞を出し自ら編輯主任となっていた。のち当時の北京大学文科学長陳独秀の斡旋で図書館主任となった。その頃、私は丸山昏迷君や、鈴木長次

郎兄と共に、よく彼を訪れたのであるが、北京で訪れて一番、愉快なる家の一つであった。鈴木兄はまもなく東京に去ったが、兄の如きは李君の思想を左行せしめるに、預かつて貢献のある方だから……（以下省略⁽⁴⁰⁾）。

丸山とともに李大釗の思想を「左行」せしめたという鈴木長次郎がいかなる人物であったのかについては不明であるが、五四運動の前後に、李大釗が、丸山をはじめとする北京の進歩的日本人と交流していたことがうかがい知れる。

丸山が編集に携わっていた『北京週報』は、たびたび李大釗の談話や論文に紙面を提供していた。主なものでも「支那労働運動の帰趨」（第八号、一九二二年三月二二日）、「宗教は進歩を妨ぐ」（第二二号、一九二二年四月九日）、「支那統一方策と孫呉両氏の意見」（第三三三号、一九二二年九月一七日）、「實際的改造の中心勢力」（第六六号、一九二三年五月二七日）等を挙げることができる。そして、「李大釗氏」なる紹介記事（第三三三号、一九二二年九月一七日）で、丸山は李大釗を、「マルキスト」にして「労働運動の真の理解者」と呼び、「此新思想家で且つ新運動のリーダーである氏の言動は新らしい支那の将来に可なり大きな刺激と影響とを與へるやうに思ふ故に将来何んな思想を持ち何んは運動を起すかを僕等は多大な興味を持って見つめたい」とエールを送っていた。これらの記事からしても、上記の李大釗談話を取材し、かれの論文掲載に便をはかっていたのは、北京での李大釗の支援者にして理解者であった丸山にはかならない、とほぼ断定できるのである。

丸山昏迷、本名は丸山幸一郎。内務省の要視察人一覧名簿によれば明治二八年（一八九五年）長野県生まれ、一九一六年暮れに上京し、中央大学英語科夜間部に通う傍ら、大杉栄や堺利彦ら「主義者と交遊し」、要視察人の乙号に指定されるに至っている⁽⁴¹⁾。かれが中国に渡った時期は明らかではないが、かれが中国に渡って後も日本の社会主義運動と連絡を保っていたことは、前述日本社会主義同盟の機関紙『社会主義』第三号（一九二〇年十二月）に「支那社会主義に就いて」という通信を送り、自身の経験によつて知った中国の社会主義運動の党派分類を『社会主義』編集部に送っている（すなわち北京にあつても日本から『社会主義』を取り寄せ購読していた）ことから十分にかがわれる。

李大釗の日本社会主義同盟加入の手引きをしたのはこの丸山であると言つてほぼ間違ひなからう。また、李大釗が一九一九年

一二月に発表した「物質変動與道德変動」は、堺利彦の『唯物史観の立場から』（一九一九年八月）に収められている三つの翻訳、論文からの引用であり、⁽⁴²⁾堺と李大釗との間に丸山の存在を想定することは必ずしも無理ではあるまい。李大釗は、丸山という友人を得て、日本における社会主義運動の主流であった堺利彦ら「マルクス主義派」の活動をあと追い、それに加わることができたのである。

李大釗が日本の社会主義運動の実際に、これ以上の関わりを持ったということは確認されていないが、日本の社会主義運動に単なる知的関心以上のものを持っていたことはうかがわれる。「日本社会主義同盟」への参加に顕著に見られるように、李大釗においても社会主義研究、マルクス主義研究に関しては、日本と中国とはとりたてて分けて考えられていたわけではないのである。これは当時のインターナショナルな雰囲気（「世界はみな光明だ！ 人類はみな同胞だ！ わが全アジアの青年が努力せんことを願う！」）⁽⁴³⁾もさることながら、中国のマルクス主義研究が日本のマルクス主義研究なしには考えられなかったことを考え合わせるならば至極当然のことであった。

李大釗の社会主義思潮、マルクス主義学説に対する興味は、一九一九年以降、その周辺ともいうべき女性解放問題についての階級的視点の導入や、労働問題についての観察へとひろがっていく。しかし、ここにも日本の影響が見てとれるのである。たとえば婦人問題の根本的解決を社会主義革命に求めていることに李大釗の思想の発展があると言われている「戦後之婦人問題」⁽⁴⁴⁾は、ほぼ山川菊栄の「一九一八年と世界の婦人」〔中外〕一九一九年二月号所収）の翻訳からなり、労働運動への着目である「五月一日 May Day 運動史」⁽⁴⁵⁾も、山川菊栄「五月祭と八時間労働の話」〔解放〕創刊号所収、一九一九年六月）、新妻伊都子「不真面目なる労働論者へ」〔改造〕一九一九年九月号所収）、及び同号の山川菊栄「新妻氏に答ふ」を参照にしているように、その面でも日本の「知」が占める役割はいよいよ大きかった。

このほかにも、書籍と社会主義研究にまつわる話はいかの周囲に事欠かない。李大釗の指導の下に、一九二〇年三月に北京大学内で結成された「マルクス学説研究会」⁽⁴⁶⁾（のち中国共産党の北京グループの母体となる）もそのひとつである。「マルクス学説

研究会」の設立の趣旨は、まず第一に社会主義関係の書籍の収集とされていたのである。⁽⁴⁷⁾同会は収集した書籍を閲覧に供し、それについて討論する場所として「亢慕義齋」(Kommunismus室)なる図書室さえ開設していた。一九二二年時点での蔵書一覽⁽⁴⁸⁾を見ると、社会主義文献がいかに渴望されていたかがわかるし、同時にこれから会員が書籍収集にかけた熱意が伝わってくる。このことは当時のマルクス主義研究を取り巻く状況の厳しさを示す反面、その文献の欠如という状況下において獲得された李大釗のマルクス主義に関する知識が当時いかに先進的なものであったかをより一層浮かび上がらせてくれる。

李大釗は、一九二〇年から活動が本格化した北京の共產主義グループの中心的存在として、上海の陳独秀と連絡を取りながら、マルクス主義の学習会や労働者向けの通俗雑誌『労働音』の発行、長辛店の京漢鉄道の労働者に対する労働補習学校の開設等の活動を陰から支えることになる。北京においては、中国で「最初にマルクス主義を紹介した」李大釗の声望は高く、マルクス主義の研究会で講演したり、学生たちにマルクス主義学説の指導をしたりすることによって、北京の学生たちの間では尊敬を集めていた。そして北京のマルクス主義研究、共產主義運動の中で李大釗が占める権威はかれの人望だけではなく、おりに触れて発表されたかれのマルクス主義に対する知識によってより堅固なものになった。その情景の一部は北京の共產主義グループの一員であった朱務善の回想からうかがうことができる。社会主義に関する公開討論会に際して、李大釗がその審査員となった時の模様である。

今でもおぼえているのは、審査員「李大釗のこと」が、河上肇のよく使う比喻を用いてこの点を説明したことであった。つまり、ニワトリの雛は孵化する以前は卵の殻の中にとどまるが、その孵化が成熟してしていくに及ぶや、雛は必ず卵を破って出てくる、これは必然の理である、ということだった。李大釗同志は最後に言った、賛成派「社会主義についての賛成派」がもし唯物史観の観点をもってこの問題に答えていたら更に説得力があったでしょう。……李大釗同志は話す声も大きくなく、落ち着いていて、かれの一種なみはずれた自信と堅固さを表し、最も聴衆の注意を引きつけ、人を心服させるのだ⁽⁴⁹⁾った。

共産主義運動における指導者は理論家でもあらねばならなかったが、すでに見てきたように李大釗のマルクス主義に対する知識は、多くを日本のマルクス主義研究の成果に負っていた。この討論会の李大釗の発言も、かれが河上肇の著作を随意に引用できることによってより説得力を高めたという点で、五四時期のマルクス主義受容をとりまく知的状況をよく物語っている。

科学的社会主義研究の歴史が、またさらに広く言うならば、社会科学研究の基盤がかなり欠落していた中国にあっては、一九一九年においてマルクス主義を紹介する力量のあったのは、自称社会主義者である江亢虎らや、最高学府で経済学の教鞭を執る経済学者よりもむしろ、ロシア革命をはじめとする世界規模での社会変動や、日本での社会主義思想流行といった外国の新思潮の動向に常に注意をはらい、それを中国語の訳語にできる語彙と活字媒体を持っていた李大釗や、陳溥賢、邵飄萍⁽⁵⁰⁾といった新聞記者、そして一部の留学生であった。ゆえにマルクス主義の受容、紹介とは日本でのマルクス主義研究の翻訳と不可分の関係にあったのだった。

しかし、我々は李大釗の初期思想からマルクス主義受容に到るまでの過程に散見される日本の影を、単に「日本からの影響を受けた」という事実の指摘のみで済ますことはできない。なぜなら、五四時期において日本の思潮の影響を受けたのは李大釗にとどまらないし、五四時期の知識人で日本を含む海外思潮の影響を受けなかった者などなかったからである。その点で李大釗は決して特殊ではない。むしろ我々が注意すべきは、そのマルクス主義も含め、海外思潮の受容そのものが中国の外来文化受容の構造と、その中における外来知の役割をどう変えたのか、にまで考察の地平を広げることであろう。

この視点に立つ時、李大釗の初期思想、マルクス主義受容の過程において顕在化していくのは、外来知の受容、理解が最初は論壇において、次いで文化活動において、そして実際の運動において、その正当性を裏打ちする準拠になっていく一連の経過であることがわかる。とりわけ、マルクス主義は後にあらわれる中国共産主義運動や中国共産党のアプリオリに依拠すべき指針となっただけに、李大釗のマルクス主義が外来知として準拠化されたものであったことは、かれのマルクス主義への接触の具体的

状況とならんで重視されなければならないだろう。「思想の準拠化」、一九一九年から一九二一年の共産党成立にかけて、中国において進行した外来思想の受容形態の変容は、そう名付けてもおかしくないほどに、新思想を受け入れた先進知識人たちの思考を強く規定していったのである。あるいは、外来思想が依るべきものとして確信された、そう言い換えてもよいだろう。

二 上海共産主義グループのマルクス主義受容と建党活動

一九一九年から一九二一年までの期間、北京と並んでマルクス主義が盛んに紹介された一つの都市は上海である。一九二〇年初頭に中国知識界の急進派の筆頭である陳独秀が北京を逃れて上海に居を移し、北京の『晨报』の陳溥賢が一九二〇年暮れに欧州特派員として中国を離れての⁽¹⁾ちは、むしろ上海がマルクス主義紹介、及び初期共産主義運動の中心となっていくのである。また、上海においては社会主義出版物に⁽²⁾かんする言論弾圧が、北洋政府のお膝元である北京に比べ、やや緩かったこともその背景にある。

本章においては、北京と同様に上海においても、マルクス主義の紹介、受容は外来の「知」と密接なつながりがあることを主に検証していこう。そして、その「外来知」の優位性が、中国共産党誕生の地である上海では、ヴォイチンスキー (Voitsinsky) の来訪と初期共産主義者へのはたらきかけ、共産党発起組の設立をへて、いかなる転位を遂げるのか。それが本章の関心である。

1 国民党系人士のマルクス主義研究

一九一九年後半において、上海で社会主義学説の紹介に最も積極的だったのは国民党系の知識人であり、報刊でいえば『民国日報』、『星期評論』、『建設』にまず指を屈することになろう。その代表的人物としては、戴季陶、沈玄廬、胡漢民、邵力子、朱執信、廖仲愷らの名を挙げることができる。⁽³⁾ 首領孫文の掲げる民生主義が社会主義学説の流れを汲むものであれば、これを科学

的に裏付けるために、かれらがマルクス主義の研究に取り組む姿勢を見せたのも当然だった。また、つとに清末革命運動の時期に、『民報』を以て梁啓超ら保皇派の『新民叢報』との間に、革命か改良かの論争を展開する中で、マルクス主義を含む西洋社会主義の思想を紹介した経験のある国民党系の理論家にしてみれば、五四運動という未曾有の大衆運動が高揚を見せたこの時期に、再び社会主義思想に注目したことは故なきことではなかった。

北京での「晨报副刊」のマルクス主義紹介に刺激されたかのように、上海で出版されていた『建設』、『星期評論』、『民国日報』副刊「覚悟」といった国民党系の期刊は一九一九年の夏頃から積極的に社会主義諸学説の紹介を始めた。上海の社会主義思潮で興味深いのが、日本留学中に社会主義学説に触れ、帰国後に孫文や戴季陶のもとに出入りしていた李漢俊、あるいはつとに土地問題に研究を重ね、孫文三民主義の民生主義に対する理解者であった胡漢民や廖仲愷が、当初社会主義の理念を中国の伝統の中に見いだそうとしたり、唯物史観にもとづく所有制の歴史を中国の経書のなかに求めたりしたことだった。一高から東京帝大に進み、留学時代から日本における社会主義研究に触れていた李漢俊でさえ、社会の全面改造を人に語る場合には、孔子を否定するものとして墨子の「兼愛」に理念を求めなければならなかった⁽⁴⁾し、胡漢民や廖仲愷は『孟子』に見える古代土地制度の理想「井田制」の存在を主張し、私有制にさきだつ共有制の一形態を中国古代の制度のなかに見いだそうと試みていた⁽⁵⁾。清末、辛亥時期にみられた、井田制Ⅱ社会主義の理想Ⅱ中国の伝統という単純な図式⁽⁶⁾はこの時期にはもはや克服され、一步すすんで、唯物史観による中国古代史の解釈が図られてはいるが、やはりなお、かれらの旧来の知識体系が社会主義理解の上に反映されていたのである。

このことは、社会主義学説の中国での受容が、旧来の思想的枠組みに組み込まれかねないこと、裏を返せば、「社会主義」という概念が定着する以前の段階では、その社会主義のイメージ、理念を中国古来の伝統の中に投影することでその理解を容易にしようとする異文化理解が、留学生や海外思潮に比較的深い造詣を持つ国民党系の知識人にすら避け難いことを示していた。まこと「社会主義」という西洋起源の概念の即自的摂取は容易ではなかった。墨子の「兼愛」や孟子の「井田制」の存在へのこだ

わりは、社会主義に関する豊富な情報がはいつて来るにしたがつて遞減していく。しかし、かつて中国での社会主義紹介の皮切りをつとめた孫文周辺の知識人でさえ、社会主義という概念の理解はともかく、それを他者に伝えようとする場合にいたっては、何らかの媒介なしにはその紹介が困難だったことをこの事実は暗黙のうちに示している。さればこそ、同時代の日本での社会主義研究の成果が、ここ上海においても、片言から大著まであらゆる回路を通じて奔流の如く流れ込んでくるのである。

これから国民党系知識人が日本の論壇の動向に注意を払い、とりわけ社会主義思潮の趨勢に関しては日本の読者の如くに精通していたことを、雑誌『建設』一卷六号に掲載されている「通訊」欄のやりとりは示してくれる。すなわち、商務印書館の出している『東方雑誌』が日本の北吟吉の「社会主義の検討」なる論文を訳載したが、この誤謬だらけの社会主義反対論をいまさら中国で紹介する必要があるのだろうか、という一読者劉鳳鳴の質問に答えて、『建設』の同人である「民意」は、北論文をめぐる日本の論壇の反響を詳細に述べているのである。いわく、『中外』一九一八年八月号に掲載された北吟吉の論文については河上肇、山川均、茅原華山、高島素之がそれぞれ『中外』、『新社会』等の雑誌で痛烈なる批判を加え、ために北氏は『中央公論』に「懺悔——代筆事件の告白」なる謝罪文を發表した。かくて、日本においては北論文が一文にも値しないことが公然の事実になっている云々と。あたかも、社会主義の当否に関する議論は日本において決着済みであるから中国において繰り返す必要はまったくない、といわんばかりの自信である。「民意」なる筆名は、この時期においては朱執信のものではないかと考えられる。⁽⁷⁾ いずれにせよ『建設』の編集陣が日本の論壇、とりわけ河上、山川、高島ら社会主義派の執筆したものを細かく追っていたことは容易に見えてとれよう。

これらの雑誌に参集した国民党系人士のうち、五四時期の上海で社会主義学説紹介の中心に位置したのは、かつて清末革命運動の中で社会主義学説の紹介に熱意を示した胡漢民や朱執信よりも、むしろ戴季陶であった。戴季陶は、上海での六月八日以来の三罷闘争の威力を目のあたりにして、中国における社会問題、労働問題を真剣に解決するための方策を探索する必要性を感じていた。そして、国民党内きつての理論家として、雑誌『星期評論』、『建設』を舞台に、社会主義学説研究の必要性を訴え、自ら

も広く海外の社会主義文献を収集し、すすんでその紹介を行ったのだった。⁽⁸⁾一九二〇年前後において、上海で最もマルクス主義学説、とくに日本の社会主義研究の動向に通暁していたのは、この戴季陶、および中国語版『共産党宣言』の校訂をした李漢俊であった。そして、一九二〇年初頭に上海に移った陳独秀にマルクス主義の豊富な知識を伝え、かれとともに上海共産主義グループの中心的メンバーとして、上海におけるマルクス主義研究組織の設立に尽力したのは、とりわけこの戴季陶である。⁽⁹⁾

戴季陶は一九一九年夏より革命ロシアの状況や、マルクス主義学説の紹介を始めるが、そのマルクス主義学説理解の水準は同時代の他の先進知識人をはるかに凌駕していたということさえ可能である。その一例としてここでは、一九一九年以来中国の進歩的青年の熱い注目を浴び、陳独秀、李大釗、胡適、および先述の陳溥賢らの支援を受けながら、一九二〇年三月に失敗、解散した北京工読互助団の活動に対する戴季陶の観点を、李大釗や陳独秀と比較して論じてみよう。

工読互助団運動とは一九一九年八月以来、主に王光祈らによって提起され、李大釗や陳独秀らの支持を得た青年を中心とした運動で、トルストイ的汎労働主義思想や無政府主義的互助思想、空想社会主義的「新しい村」運動等の影響を受け、「働きながら学ぶ共同生活」を実行せんとして発起されたものであった。しかし、最初に組織された北京の工読互助団は一九二〇年三月には経済的にも、人間関係の面でも破綻し、解散へ追い込まれていた。この工読互助団運動に対して、自らも資金援助をし、社会改革への第一歩として期待をかけていた李大釗は失敗の主な原因を、「都市での工読団が共同生産の組織を取ったこと」と考えていた。なぜなら、都市では「土地や家賃がかくも高く」、「資本家が労働者に与える賃金とささやかな商売のあがりに頼っては、半日学習半日仕事の生活を維持することは」とても不可能であるからだだった。したがって李大釗が考える打開策とは、まず胡適が主張するように、「純粹の工読主義を採り」、そして「田舎で廉価な土地を買い、まず農作から手をつける」ことであつた。⁽¹⁰⁾資本家、労働者、といった言葉は出てくるものの、かれは工読互助団のそもその失敗原因を、都市の持つ非人間性に求めている。ゆえに、かれの考える打開策とは、都市の運動では失敗は不可避ゆえ、農村へ向かうべし、というものであった。

一方、陳独秀は、基本的に工読互助団の失敗が、参加した青年の堅固な意志、労働の習慣、生産技能の三者の欠如による、と

考え、組織の問題というよりもむしろ人の問題であると述べていた。そして北京以外で工読互助団を発足させようとしている青年に対して、その轍を踏まぬよう訴えていた。⁽¹¹⁾五四時期にあつても一貫して中国人の怠惰、無気力の気質を批判していた陳独秀にしてみれば、この批評は当然かもしれないが、社会経済的な面からの考察はほとんどなされていない。前年の一二月に「告北京労働界」を執筆し、その中で「無産的労働階級」の存在について触れ、「中国の産業界には純粹の資本の作用がないとは言えないし、中国の社会経済の組織が資本制度でないとは決していえない」と述べて、社会科学の領域に対する関心を示した陳独秀ではあつたが、この時期には人心改造の第一歩としての工読互助団運動や、中国訪問中のデューイの民治論（民主的自治論）を中国に応用することに関心が強く、⁽¹³⁾それに比較して、まだマルクス主義に対する関心は低かつたといわざるを得ない。

それに対して、同じ時期の戴季陶はどう考えていたのだろうか。かれは『星期評論』四二号（一九二〇年三月）に「我對於工読互助団の一考察」の一文を発表し、その中で次のように述べていた。

政府とは有産階級の擁護を受け、同時にまた有産階級を保護する機関である。……このような生産制度の下でわずか一部分の人の能力を使って生産の仕事をし、同時に学問をする目的に到達しようということとは、實際できないことである。さらに、不熟練の仕事能力と、不完全なる幼稚な生産機関で、資本家生産制が侵蝕した「剰余労働時間」を独力で取りもどそうとしても、それはなおさらできないことではない。

そしてかれの掲げる打開策は「一切の『独善』の観念を捨てて、……普遍救済の目的をしつかりと持つて、資本家生産制下の工場へ投ぜよ」をいう極めて理知的かつ扇動的なものであつた。

先述の李大釗の文章の中に、かれの農村、農民への指向の萌芽を認めることは自由であるが、工読互助団の失敗の必然性を当時の社会経済から照射する戴季陶の水準が、マルクス主義の面からいえば、はるかに李大釗を凌いでいることは明瞭であろう。陳独秀は「戴季陶のマルクス主義に対する信念は強く、かつ相当の研究をしている」という意のことを述べていた、⁽¹⁴⁾というし、一九二〇年夏、アナーキズムからマルクス主義への模索をしていた施存統も「戴季陶の感化を最も多く受け、近來の思想はほと

んど、どこもかしこもかれの影響を受けてい」たが⁽¹⁵⁾、上記の戴季陶の理論展開を見るならば、それらの言の妥当性がわかるだろう。

先の陳溥賢同様、戴季陶もマルクス主義研究の恰好の入門書であったカウツキーの『カール＝マルクスの経済学説』（邦訳書名『マルクス資本論解説』）を一九一九年一月から『民国日報』副刊「覚悟」と『建設』に、それぞれ未完ながら日本の高島素之訳から重訳していた。このことはかれのマルクス主義に対する関心が、やはり日本社会主義を経由するものだったことを推測させる。一九二〇年一月に戴季陶が堺利彦に宛ててしたための書簡は、その推測が妥当なものであることを教えてくれる。日本語の水準の高さをうかがわせるその書簡において、戴季陶は堺に次のように述べている（かれの日本語の水準の高さを示すため、若干不自然な日本語の言い回しにはいちいちママと注記しない）。

日本は東洋における先進国である。Political Revolution に於いて誘導者先駆者であった日本は Social Revolution に於いても依然誘導者先駆者であらねばならぬと信じて疑はないのであります。而して此の大改造事業は世界の平民と共に協力するのみ完成せられる事であり、特に東洋に於ける此の大改造事業は軍国主義的の日本をば撤廃して後、始めて完成せられる事であると信ずる故、日本に於ける諸同志の活動は実に世界に対し東洋に対して大なる援助になるのである信じ且祝福して止まぬのであります。

今や吾々の夙に奉じてきた「三民主義」——民族、民権、民生——の終局的目的たる「民生主義」Socialism に基く世界的改造期が熟してきたと信じ昨年から微力ながら、同志を糾合して此れが宣伝事業に尽くしてきました。文化程度の至って低い民族間に於ける宣伝は頗る困難を感じるけれども黎明期に際しての我々の宣伝は各方面に強く反響を引越して居ります。

（中略）

終りに臨んで特に御願ひ致すのは先生等の熱力の結晶たる著作と雑誌等の目録御紹介であります。それから御翻訳であった Karl Kausky の『社会主義倫理学』（友人李君佩氏が尊訳本を翻訳致して居りますが同氏は相等に筆力のある人です）

から、大なる誤訳がなからんかと思ひます。何卒予め御允許を得ない事を御宥恕下さい）の英訳本が御手元に御座いますれば御翻訳本の削除した部分の対照として一週間でも結構で御座いますから御貸し被下さることが出来れば大いに有難仕合であります。若し東京の本屋で売本にでもありますれば本屋の名だけでも御教え被下さい。⁽¹⁶⁾

この書簡でまず注目すべきは、かれが日本の社会主義運動に関心をよせるのは、中国を含めた東洋の大改造事業において、日本の同志の活躍が不可欠であるという認識によるものだったということである。前述の陳溥賢同様に、この戴季陶も日本の社会革命と中国の社会革命とが相互的に進展してこそ、真の中日親善の前提となると考えていたことは、かれの「資本主義下面的中日関係」の次の言葉からも明白である。かれによれば、両国の親善と結合を妨げているのは単なる「官僚、軍人、商人」たちではなく、「近代のこれら種々の罪惡をなす資本主義」であり、「中日両国の革命——生産、交換、分配の制度を変える革命——がもし成功しなければ」、両国の人の親善と結合は「まったく望みがない」⁽¹⁷⁾のであった。かれにおいても、日本と中国の革命は相互に深く関連しあうものとしてとらえられていたのである。またこの書簡により、戴季陶が Socialism を「民生主義」に対応するものとして考えていたこともわかる。

しかし、それ以上に興味深いのは、この書簡が当時の戴季陶の社会主義研究をとり巻く資料状況の一端を示している点である。この手紙の文面を見るかぎり、戴季陶は堺や山川夫妻とは直接の面識はないようであったが、日本における社会主義運動の中心であった堺に対して、戴季陶が最も望むことは何にもまして、まず日本での社会主義書籍、雑誌の紹介、そしてその書籍を手に入れる際のつてを示してくれることであつた。その背景にはマルクス主義を学ぶにあつたての書籍の欠如があり、これが中国国内では解決困難な問題であつたことは想像に難くない。

当時、中国に洋書を扱う書店はなかったのだろうか。戴季陶が東京の本屋の名前だけでも教えてほしい、と懇求せねばならないほど上海の外国書事情は寥々としたものだったのだろうか。いささかエピソードめくが、同時代人である胡適はそうした戴季陶の気持ちを代弁している。中国の代表的洋書取扱い書店である伊文思書館や商務印書館に並んでいる洋書が世界の思想潮流か

らはなほだしく懸隔していることを嘆いてかれは言う。

私はここまで書いてきて、たちまち東京の丸善書店の英書目録を思い出した。そこにはおよそイギリス、アメリカの一年以前に出版された新しい書籍は、大抵掲載されていた。私は、この目録と商務印書館及び伊文思書館の書目を比べてみて、ほとんど恥ずかしさに死ななばかりだった。⁽¹⁸⁾

胡適の求める哲学、文学関係の書籍にしてかくのごとき惨状であれば、社会主義関係書籍は推して知るべきであった。戴季陶の書中での懇求に見られるように、上海での社会主義研究の第一人者たるかれにして、なお社会主義関係の書籍は意の如くには集めることができなかった。また中国でもっとも海外に開かれていた上海でさえこのありさまなのだから、地方都市においては西洋書社会主義文献を求めるなど、そもそも不可能であつたらう。逆に言えば、五四時期に中国各地において大量の社会主義文献の紹介がなされたこと自体が驚異的であつたともいえるのである。そして、それを可能にしたのは外的条件としての同時代の日本での社会主義ブームであつたことを戴季陶の書簡は暗示しているのである。

堺が社会主義関係の資料を求める戴季陶の要請に対して、いかなる援助を行ったのかはわからないが、堺本人がこの書簡を雑誌に掲載しているところから見ると、恐らく戴季陶の望む目録をはじめとする関係文献を送つたと見られる。戴季陶が日本の出版社から直接に社会主義関係書籍を送つてもらつていたことは、一九二〇年暮れに書かれたと見られるもう一通の書簡からもあきらかである。日本語版『資本論』（高畠素之訳）を寄贈してもらつたことに感謝してかれは言う。

貴訳の慎重なるに加へて、更に著名学者の校閲を経たるは又た能く人をして未だ之れを通読せざるに先ちて、信頼すべきものなることを覚えしめます。我が国の青年にして能く日語に通じ英仏訳書を手にして、通読し易からざるものも、此の訳本によつてマルクス学説の真相を窺ふことを得るに至るであらうと存じます。⁽¹⁹⁾

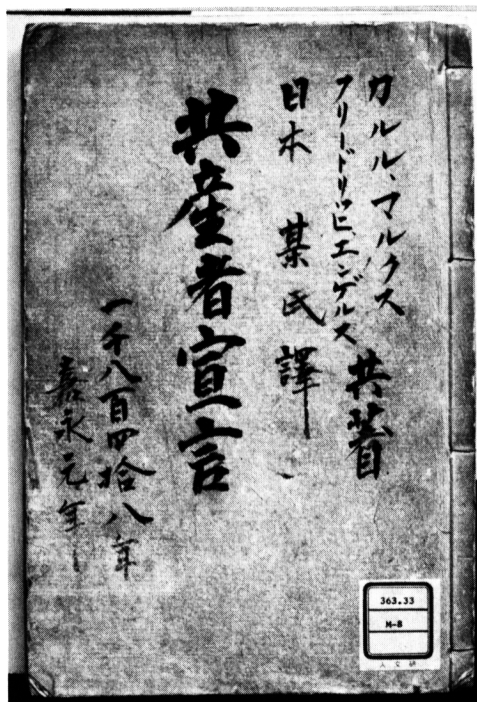
中国語訳『資本論』全巻の刊行を、一九三八年まで待たなければならなかつた上海の知識人にとって、外来知の、とりわけ日本社会主義の知の重みは、北京の李大釗の場合と同様に圧倒的なものがあつた。このことは戴が主編していた『星期評論』所載の社

会主義関係の文章を一瞥するならばより一層明瞭になる。そこには『新社会』、『批評』、『社会主義研究』、『大阪毎日新聞』、『大阪朝日新聞』、『デモクラシイ』、『改造』、『東洋経済新報』、『経済論叢』等の日本語雑誌、新聞を参考にした記事、論文があふれかえっていた。また上海の戴季陶、李漢俊のもとには社会主義志向を持った東京帝大の「新人会」会員、宮崎龍介、平貞蔵らが訪れていた⁽²⁰⁾ように、かれらは日本の新思潮にもっとも近い位置にあったのだった。こうしてみると、中国初のマルクス・エンゲルス著作の完訳たる陳望道訳『共産党宣言』のテキストとなった同書の日本語版を提供したのが戴季陶であったことは何ら異とするに足りず、むしろ当然のなりゆきであったとさえ言えるだろう。

なお、中国最初の全訳本である陳望道訳『共産党宣言』（以下、陳訳本と略称）のテキストとなった日本語版『共産党宣言』の考証はいまだなされていない。ここで初歩的な考察をくわえ、それによって戴季陶の中国マルクス主義史へのかかわりを照射することは必ずしも無駄ではあるまい。

陳訳本が日本語版『共産党宣言』からの重訳であったことは陳望道自身がのべていることであるが、当時（一九二〇年）、日本においては『共産党宣言』は公刊を許されていなかった。ただし、堺利彦らの周辺には日本語訳の手抄本が密かに回覧、筆写されていたらしい⁽²²⁾。一九一九年から一九二〇年にかけて、日本において目にし得るもっとも一般的な『共産党宣言』は、幸徳秋水、堺利彦合訳「共産党宣言」（『社会主義研究』第一号、一九〇六年三月、所収）であるが、北京図書館蔵の陳訳本と比較すると、両者の体裁や文体の相似（たとえば翻訳語として未定着のものに欧綴を付けている箇所）はあきらかであり、おそらく陳訳本のテキストとなったのは、基本的に『社会主義研究』所収の日本語版であったろう。ただ、陳訳本には幸徳、堺訳に付けられているエンゲルスの「英語版への序」がない、という問題がある。しかし、日本においても一九二〇年前後に出版していた手抄本や謄写本（たとえば、日本某氏訳『共産者宣言』——幸徳、堺訳を基礎にしたもの、謄写本、出版年未詳、ただし裏表紙に「大正九年」の書き付けあり、京都大学人文科学研究所蔵、図1参照）にはその序が省かれているものも散見されるから、陳望道が意図的に日本語版にあったエンゲルスの序を翻訳のうでで省いた可能性のほかに、かれが手にした日本語版そのものに序

図1



マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

がついていなかったことも考えられる。またいくつかの訳語に差異（たとえば Bourgeois [幸徳、堺訳：紳士、陳訳本：有産者]、Proletariat [幸徳、堺訳：平民、陳訳本：無産者]）が見られるが、それら「紳士」「平民」という明治の訳語は、一九二〇年前後には河上肇らによってそれぞれ「有産者」「無産者」という訳語に代替させられており（前掲『共産者宣言』でも「有産者」「無産者」、また堺が一九二一年ごろに改訂した訳（未刊稿、現法政大学大原社会問題研究所蔵）でも、Bourgeois は「ブルジョア」あるいは「有産者」に、Proletariat は「プロレタリア」や「無産者」等に置き換えられている。一九二〇年前後に流布していた日本語訳本が明治期の幸徳、堺訳のものを基礎としながら、若干の語句について改訂を加えていったものであることは間違いない。

以上のことをまとめると次のように結論できよう。つまり、陳望道が翻訳にあたって参照したテキストは、明治の『社会主義研究』に掲載された日本語訳を基礎として改訂されながら、一九一九年から一九二〇年にかけて日本社会主義者たちの間に流布していた秘密発行本であることはまちがいない、かれは翻訳のうえで河上らの訳語を参考にしながら全訳を成し遂げたのであろう、と。いずれにせよ、発禁状態におかれていた日本語版『共産党宣言』を手にいれ、翻訳のためのテキストに供するということとは、当時の中国においては、堺利彦と書籍のやりとりをしていた戴季陶がもつとも可能な位置にあったのだった。

さて、その戴季陶は、上海の共産主義者のグループが陳独秀を中心にして共産党の設立へ動き出していた一九二〇年秋以降、自分が秘書をしていた孫文の反対もあり、共産主義グループの活動から遠ざかる。また、五四時期に発表された戴季陶の論文

の意図するところから見てもわかるように、戴季陶をはじめとして、胡漢民、沈玄廬らの言論活動は、中国における社会問題の発生、階級闘争の激化をあらかじめ防止しようという意図から出たマルクス主義学説の紹介であつた。⁽²³⁾つまり、唯物史観や剰余価値説といったマルクス主義学説を、中国の社会問題の平和的解決や孫文三民主義の補強のために紹介したのである。

周知のように、戴季陶は後に反共に転じ、中国共産党のソ連・コミンテルン追従を激しく批判するが、共産主義運動を批判する場合にも、マルクス主義の理論を踏まえた批判を行つたこと⁽²⁴⁾にもうかがわれるように、かれのマルクス主義理解およびその批判は決して浅薄なものではなかつた。それだけに、中国におけるマルクス主義受容を考察する場合には、かれが果たした役割というものを看過することはできないのである。戴季陶が上海共産主義グループの運動の初期において指導的役割を演じたことの原因は何よりもかれが当時においてマルクス主義の理解がほかの活動家のそれをはるかに上回っていたからにほかならなかつた。戴季陶の念頭には、いずれ中国にも起こるであろう階級闘争を、それが激化する以前に防止しようとする意図があつたこと、そして、かれが孫文三民主義の中の民生主義学説の科学的根拠のひとつとして、マルクス主義学説を考えていたことは疑いない。しかし、マルクス主義を革命の理論にしようとしたものにとつて、マルクス主義が知識人の間で当時持っていた吸引力（かのロシア革命やドイツ革命を指導した思想である）と、実際にその学説を学ぶことの至難とのあいだの溝は、海外思潮に深き洞察を持つ戴季陶によつて埋められるほかなかつたのである。

2 留日学生グループの役割と建党活動

戴季陶以外の上海の共産主義グループと日本の社会主義者との関係もまた考察される必要があるだろう。上海の共産主義グループのメンバーの大半が日本留学の経験者、あるいは留日学生であつた（初期の主要メンバーである李漢俊、陳望道、李達、周佛海、施存統、戴季陶等すべて長期の日本留学・滞留経験あり）ことから容易に察せられるように、かれらと日本の社会主義研究との間には緊密な関係があつたのである。

上海共産主義グループの構成員は、いずれも当時の中国のマルクス主義受容と日本の社会主義研究との関連を認めている。たとえば、邵力子は次のように述べている。

マルクス主義研究会が始まった頃は翻訳や文章を書いてマルクス主義を宣伝するだけだった。李漢俊、李達、陳望道の三人がわりと多く書き、のちに周佛海も少し書いたが、かれらはみな日本留学生であった。当時、マルクス主義書籍は主に日本からはいつてきた。⁽²⁵⁾

またその中心の一人であり、中国共産党第一回大会で宣伝主任に推された李達も次のような回想を残している。

当時マルクス、エンゲルスの著作はほとんど翻訳されておらず、我々は日本語からその一端を知るのみで、中国のマルクス主義受容において日本から得た助けは大きかった。それは中国には翻訳する人がおらず、ブルジョア学者は全然翻訳せず、我々の側の人間も翻訳しきれなかったからである。⁽²⁶⁾

この時期、日本留学を経て、日本語を媒介に社会主義学説およびマルクス主義にふれ、初期共産党の理論家的存在となったものを挙げるとすれば、まず張国燾が「我々の中の理論家」⁽²⁷⁾として挙げる李漢俊に指を屈するべきだろう。

李漢俊、本名は李書詩、字は人傑、又は仁傑、号は漢俊、筆名は海鏡、厂晶、汗、均、人杰、先進等。湖北省潜江人、一八九〇年生まれ。一九〇二年日本に留学、東京の暁星中学に学び、のち東京帝大工科に進むが、次第に社会科学に興味を持つ。一九一八年暮れに帰国し、戴季陶らと雑誌『星期評論』を主編し、陳独秀、李達とともに「上海共産主義小組」の中核として主に言論活動を通して建党活動に寄与する。中国共産党第一回全国代表大会の上海代表となったが、のちに離党。国民党の重鎮である李書城は実兄である。

かれが上海共産主義グループの理論的先駆者の一人であったことは、包惠僧の「中共が結成された当初、李漢俊の党内での地位は陳独秀に次ぐものだった」⁽²⁸⁾という言葉からもうかがえる。日本語のほかに、英、独、仏の諸語にも通じていたかれであったが、かれの主要な理論の来源はやはり日本の社会主義文献であった。それは張東蓀への反論の形で書かれた「渾朴的社会主義者

底特別的労働運動意見」(『星期評論』第五〇号、一九二〇年五月一六日)におびたしく引かれている日本語文献(北沢新次郎『労働者問題』、窪田文三『欧米労働問題』)からもうかがえるし、またかれの翻訳にかかる『馬格斯資本論入門』(原著はMary, E. Marcy, *Shop Talks on Economics*)が、英語版原著からではなく、日本語版(遠藤無水訳『通俗マルクス資本論』欧米社会主義研究叢書第一編、一九一九年、文泉堂)から行われていることからあきらかである。そして、かれがとりわけ堺利彦、山川均、河上肇らマルクス主義研究者の動向を逐次追っていたことは、かれが几帳面にも論文のあとに付す参考図書目録に明瞭に表れている。たとえば唯物史観に対するさまざまな誤解に答える「唯物史観不是什麼?」(『民国日報』「覚悟」一九二二年一月二三日)には「経済学批判」「空想的與科学的社会主义」「唯物史観解説」といった原典、中訳本のほかに、堺利彦『恐怖・闘争・歡喜』、同じく『唯物史観の立場から』、河上肇『唯物史観研究』、高島素之『社会主義的諸研究』が挙げられている。また、マルクス主義の体系を述べた「研究馬克斯學說的必要及我們現在入手的方法」(『民国日報』「覚悟」一九二二年六月六日)では、マルクス主義を支える三大要素として「唯物史観説」「経済学説」「社会民主主義」を挙げ、それを貫く一本の「金線」として「階級闘争」を想定しているが、それは前述の李大釗と同様に、河上肇の見解(前掲「マルクスの社会主義の理論体系」)をそのまま踏襲したものであった。

また、かれが中国のマルクス主義初学者にむけて「マルクス社会主義について語ったり、マルクス社会主義に通じようとする人はマルクス社会主義の三つの經典(共産党宣言、空想より科学へ、資本論)を詳細に読まなければならない」と述べ、あるいはマルクス主義研究のための読書の順序を示したあとで「このように二、三遍反復して読み、体得すれば大したもので、以後書を読むのもきつと容易になるだろうし、あるいは選ぶまでもなく自由に読んでも差し支えないだろう」⁽³⁰⁾なる高言を発し、マルクス主義関係の書目を列挙しえたのも、「これも、この一、二年來の日本の言論界の状況をわずかなりとも知りさえすれば、理解できることである」⁽³¹⁾と断言できるほど日本の社会主義思潮を把握していた自信からくるものであった。

前記の李達という日本から得た助けとは、単に日本語雑誌、書籍の翻訳だけを指すのではなかった。上海グループの陳望道、

施存統らはすでに日本留学時に堺利彦や山川均と接触していた⁽³²⁾というし、李達や李漢俊も留学中に日本の社会主義思潮に共鳴し、中国に帰国する際に多くの日本の社会主義文献を持ち帰ったという。そしてついには沈沢民や張聞天のように、社会主義関係の文献を求めることを第一の目的に、日本に留学する青年さえ現れるにいたるのである。⁽³³⁾かれらにとつては、日本語を習得することと社会主義学説の研究とはほとんど同義であった。そして、前述の戴季陶から堺利彦への書簡や堺からの上海グループへの書簡の存在からうかがわれるような上海グループと堺一派との交流は、戴季陶が共産主義グループを離れたのちも李達や陳望道を窓口⁽³⁴⁾に続けられ、のちに雑誌『新青年』のために山川均が論文を執筆するほどにまで深まっていたのである。

『新青年』九卷一号（一九二一年五月）に訳載された「科学の社会主義から行動の社会主義へ」という山川の論文は、その訳者付記によれば『新青年』同人、つまり上海の共産主義グループの要請に応じて書きおろされたものであるという。⁽³⁵⁾そこには山川の略歴と代表的著作も紹介されており、病弱なからだに鞭打って社会主義運動に奔走する山川の声望が中国にまで及んでいたことが推測される。また日本留学の経験をもつ施存統は、山川が東京で編集していた『社会主義研究』を紹介する「紹介『社会主義研究』」なる一文を『民国日報』の副刊「覚悟」に載せ、「解放」、「改造」(ともに日本の革新的総合雑誌)を買うより、これを買う方がよい」という推薦の辞とともに、既刊号の目次、購読の際の連絡先、価格等を掲げていた。⁽³⁶⁾

これら外来の社会主義学説に対する注目、翻訳は単に文字の上のこととして看過されてはならない。なぜなら、一九二〇年より上海では共産主義グループによる共産党結成のための活動が開始されていたが、その活動の第一がそれら社会主義、マルクス主義の紹介、翻訳、及びサークルによる学習会であり、実際に共産主義グループの活動の中心となったのが外国の文献を通してマルクス主義学説に通じていると目されていた人たちであったからである。一方に社会主義学説研究の空白、そして他方には実行以前に研究すべき主義、学説を持つ革命運動の新しい形態の流入、この二つが中国の初期共産主義運動における外来知とその外来知を理解することのできる知識人の役割を極めて大きなものにしていったといえるだろう。中国における初期共産主義運動の中心であった上海共産主義グループの中心が陳独秀、李漢俊、李達、陳望道ら外来知の紹介者、解釈者であったことは決して

偶然ではなかったのである。とりわけ、新思潮のるつぽであった五四時期の中国においては、董必武にとつて、「無政府主義、社会主義、日本の合作運動等々があつて、頭の中で喧嘩をしていた」時に、李漢俊がかれの頭を整理して、マルクス主義へ導いてくれたように、思想の水先案内人が要請されていたのである。

3 ヴォイチンスキーの来華と共産党の組織化——新たな外来知の登場——

一九二〇年三月（一説に四月）、ロシア共産党極東局から派遣されたヴォイチンスキーが北京を訪れ、北京大学でロシア語を教授していたポレヴォイ（Polovoy）を通じて李大釗や李の影響下にあつた急進的学生と会見し、北京に「マルクス学説研究会」を設立させる契機を作つた。⁽³⁸⁾そして、ヴォイチンスキーは四月には李大釗の紹介状を持つて上海を訪れ、陳独秀を中心とする上海の共産主義グループと接触し、同地に後に「マルクス主義研究会」と呼ばれることになるサークルを設立させるに到つて⁽³⁹⁾いる。このサークルが後に共産党設立の中核となることは周知の事実である。ヴォイチンスキー来華以降、中国において急激な共産主義運動の進展があつたことは確かである。事実、ヴォイチンスキーは大量の社会主義関連の文献を北京や上海の共産主義グループに供給し、⁽⁴⁰⁾ために上海の陳独秀を中心とするいわゆる『新青年』グループの言論活動は一変したのである。では、ヴォイチンスキーが持ち込んだ外来知とはいったいどのようなもので、それは上海の知的状況にどのような変化を与えたのだろうか。まず『新青年』の変化から説明しよう。

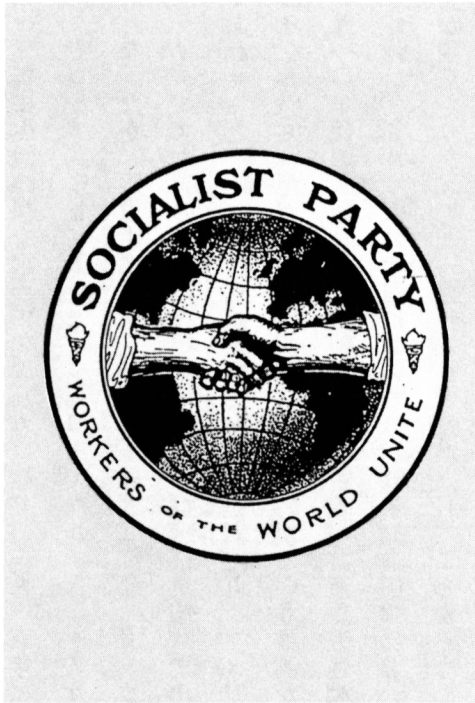
陳独秀は一九二〇年初頭に上海へ移つて以来、ヴォイチンスキーの上海到着以前に、上海の戴季陶、李漢俊（一九一八年暮れに日本留学を終えて帰国）、張東蓀、陳望道（一九一九年六月、日本留学を終えて帰国）らの人士と交際し、その中でマルクス主義への理解と、確信を次第に深めていったと考えられる。そして、ヴォイチンスキーとの接触の後、同年九月に陳独秀を中心とする上海共産党発起組は、五月以来停刊していた雑誌『新青年』を復刊第一号である八巻一号から組織の機関誌として再刊した。同号には陳独秀のマルクス主義への転換宣言ともいえる「談政治」をはじめ、革命ロシアの紹介である「ロシア研究」專欄

図 2



中華民権部特務局特小冊號認爲新聞紙類

図 3



マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

が設けられるなど、雑誌の性格は鮮明に変化した。⁽⁴¹⁾

その変化を視覚的に示したものが復刊後の『新青年』の表紙であった。雑誌の性格につれて表紙もこの八巻一号から変化し、矛盾のことを借りれば、「この期の表紙には小さな図案が載っていて、それは一つは東から、一つは西から二つの大きな手が出ていて地球のうえですっかりと互いに握手しているもの」⁽⁴²⁾になった(図2参照)。あまりにも有名なあの図である。その図案は、「中国の革命人民と十月革命後のソヴィエト・ロシアとはしっかりと団結せねばならない」ということと、「全世界のプロレタリアートよ、団結せよ、ということを示唆していた」⁽⁴³⁾というが、実はこの図案はアメリカ社会党の党章であった⁽⁴⁴⁾(図3参照)。アメリカ社会党関連の影響は後述のように、この図案のみに限られるわけではない。アメリカ社会党(さらに言えばアメリカの共産主義運動)と上海の共産主義グループを結んだのはいったい誰だったのだろう。

この謎を解く鍵はいうまでもなくヴォイチンスキーにある。まず来華以前のヴォイチンスキーの経歴を概観しておこう。ヴォイチンスキーは一八九三年にロシアのヴィチエフスク県ネーヴェル市に生まれたが、植字工や事務会計等の職を経たのち、

一九一三年に生活の糧を求めてアメリカに渡り、一九一五年にアメリカ社会党に入党している。一九一八年に帰国し、ウラジオストクでロシア共産党に入党し、シベリアでコルチャックのオムスク反革命政権に対する闘争に従事し、捕らえられ、サハリン流刑となったが、服役中に反乱を起こし、一九二〇年一月にウラジオストクに戻り、コミンテルンの活動に参加する⁽⁴⁵⁾。

ヴォイチンスキーの来華以後、米国（および一部英国）で出版された社会主義文献が突然急速に翻訳、紹介されていくことを考えあわせると、それらの文献を中国に持ち込んだり、アメリカ社会党系の書籍購入に便宜を図ったのは、かつてアメリカ社会党に身をおいていたヴォイチンスキーではないかという推測がなりたつのである。

一九一〇年代のアメリカ合衆国では社会主義、共産主義運動が活況を呈し、それに伴って社会主義関係書籍、雑誌の発行が隆盛していた。アメリカ合衆国においては、欧米先進国中においてとりわけ早くにロシア革命の影響を受けて共産党と共産主義労働党が創立された（一九一九年八月、及び九月）ことからわかるように、ロシア革命への関心が強く、またそれら共産主義政党の母体となったアメリカ社会党も社会主義関係の文献を取り扱う出版社を早くから整備していたのである。一九一〇—二〇年代の日本においても、社会主義者たちは英語の文献を主にアメリカ社会党の出版を担当していたシカゴのチャールズ・H・カー出版社（Charles H. Kerr & Company）から購入していた⁽⁴⁶⁾。

アメリカ社会党の党章は同党の機関誌であった『インターナショナル・ソーシャリスト・レビュー』（*International Socialist Review*）等に挿絵のように掲載されることはあったが、一九一七年に同機関誌が発禁処分をうけて以来はチャールズ・H・カー出版社のごく一部のパンフレットの表紙に使われるにすぎなかった。一九二〇年前後の時点で入手可能なパンフレットでは、カーの『社会主義とは何か』⁽⁴⁷⁾（*What socialism is?*）が表紙に社会党の党章を使っていたので、恐らく上海の陳独秀一派はヴォイチンスキーが持ってきたか、あるいはかれがアメリカから取り寄せるにさいして便宜を図ってくれたそれらパンフレットを参考にしたのだろう。また陳独秀は一九二〇年に武漢の惲代英にカウツキーの『階級争闘』⁽⁴⁸⁾（*The Class Struggle [Erfurt Program]*）——チャールズ・H・カー出版社が一般的）を送り、その翻訳を依頼したという（中国語訳の出版は翌二一年一月）が、それも恐ら

図4左



図4右



くヴォイチンスキーの来華以後に米国から取り寄せたものであったろうと推測される。

また、上海グループが非公開の党内理論誌として一九二〇年一月に創刊した月刊の『共産党』にもアメリカ、およびイギリスの共産主義運動の影響がはっきりと表れている。まず、その雑誌の体裁がイギリス共産党の機関誌であった『コミュニスト』(The Communist [London]) の模倣なのである(図4参照)⁽⁴⁹⁾。また、『新青年』に登場した『ロシア研究』上のソ連国内の模様や革命指導者の動静は、アメリカで出版されていた『ソビエトロシア』(Soviet Russia) からの翻訳で紹介されたのだし、『共産党』月刊所載のレーニンの「国家と革命」第一章や、アメリカ共産党綱領にしても、アメリカ共産主義運動の機関誌『クラス・ストラゲル』(The Class Struggle) や『コミュニスト』(The Communist [Chicago]) からの翻訳であることが明白である。⁽⁵⁰⁾ヴォイチンスキー来華以降の社会主義論壇に、従来の日本に加え、英語文献が急速に登場することは疑問の余地のないところである。この時期のヴォイチンスキーの影響とは、つきつめればコミンテルンの意思の紹介ということになろうが、より正確にいうならば、アメリカ共産主義運動を経由したソ

連・コミンテルンの思潮の流入であったということになる。ロシア系移民が多く、ロシア革命に関する情報、知識をいち早く獲得していたアメリカの共産主義運動からロシア革命の情勢や、ボルシェビキ指導者の思想をうかがう方が、言語のうえでも容易であったし、確実であった。

以上の断片的な事実から推測できることは何か。雑誌の表紙、体裁の模倣が端的に示すように、上海の共産主義グループはヴォイチンスキーの支援の下、いまだ中国国内では誰も手をつけたことのなかった共産主義、あるいは共産主義運動のイメージを外国の共産党（ここではアメリカ共産党）の中に求めていた、ということは当然なことではあるが、注意されてもよいことだろう。事実、ボルシェビズムの影響をいち早く受け、「プロレタリア独裁」「政治運動」を強調するにいたったアメリカ共産党の綱領、宣言の精神は、翻訳を通じ、上海の共産主義運動をマルクス学説の研究から、レーニンの運動論、組織論の摂取へと変えていったのである。

その典型というべきは陳独秀だろう。表紙の変わった前記『新青年』八巻一号に、かれは自分がマルクス主義者としてふたたび政治を語ることが宣言した「談政治」を発表したが、そこでは、マルクス主義がいかなるものか説明されないまま、「レーニンの労働独裁」が承認され、「階級戦争」と「政治的法律的強権」でブルジョアジーの古き政治を打ち壊すことが主張されている。そして、アナーキズムとともに、中国にはまだ実体もなかった社会民主主義勢力が、マルクスの意思を歪めたものとして、厳しい批判にさらされているのである。⁽⁵¹⁾ また一九二一年一月におこなわれたかれの演説「社会主義批評」でも、中国がなすべき選択はロシア共産党か、ドイツ社会民主党か（陳はもちろんロシア共産党の道をサポート）の間にしぼられていた。⁽⁵²⁾ いうなれば、陳独秀はアメリカ社会主義運動が一九一九年に紆余曲折をへたのちに到達したところから出発しているのである。つまり、階級闘争、プロレタリア独裁、直接行動を強調する陳独秀の「談政治」、「社会主義批評」が示すのは、陳独秀にあつてはかれの受容したマルクス主義が最初の第一歩からレーニンのマルクス主義であった、ということになる。

共産主義運動は国境を越えた運動であったというならば、中国の共産主義運動はその第一歩である社会主義学説の受容や、ロ

シア革命、革命指導者に対する情報、そして共産主義運動のイメージにいたるまで、世界の社会主義思潮と世界的な共産主義運動に大きく巻き込まれていた、といえるだろう。共産主義運動のテキストの転換に明白に表れているように、ヴォイチンスキーの来華の後、従来の日本経由のマルクス主義研究に加えて、アメリカの共産主義運動を経由したコミンテルンの影響が次第に中国の共産主義運動を理論的に支えることになっていくのである。臆断を恐れずにいえば、日本を経由して世界の新思潮に接していた中国の初期社会主義者は、ここにソ連・コミンテルンを通して世界を見るに至ったといえよう。

最後に、ヴォイチンスキーの来華が中国の共産主義運動を大きく活性化させ、進展させたいまひとつの原因として、かれが、当時ようやくその内容が中国国内で報道された「カラハン宣言」に見られる革命ロシアの光明を一身に体现するものとして中国の青年に迎えられたということがあることを付言せねばならない。一九一九年七月に出された第一次カラハン宣言が中国の新聞、雑誌に一齐に報道されたのは、一九二〇年四月になってからだった。『新青年』は同年五月に出版された七卷六号で、中国各団体、雑誌、新聞の「カラハン宣言」に対する熱狂的な論評を集成し、この新ロシアの精神を歓迎していた。「カラハン宣言」が全中国を熱狂させた時期はちょうどヴォイチンスキーが北京を訪れた時期に重なるのである。そのタイミングが絶好であったことは当時上海にいた李達の回想でも、北京にいた張国燾の回想でも触れられている。李達の回想を借りよう。

ソビエト・ロシア政府の第一次対華宣言（ツァーロシヤ政府が中国と結んだ不平等条約を廃棄するというもの）がちょうど中国に伝わったばかりで、中国の多くの社会団体が熱烈な歓迎をしていたので、ソ連の人が北京に来たと聞くだけで、皆かれ「が来たこと」に対してとても喜んでいた。⁽⁵³⁾

ロシア革命の具体的状況がなかなか伝わらなかった中国において、少なくともロシア革命に関心を抱く知識人にとっては、「カラハン宣言」はロシア革命の精神と同一であると見なされたのだし、またさらにヴォイチンスキーら一行が「カラハン宣言」の「正義、人道」⁽⁵⁴⁾、「自由平等互助」⁽⁵⁵⁾、「空前の美拳」⁽⁵⁶⁾、「清潔高尚の道德」⁽⁵⁶⁾の精神と同等のものとして学生、青年らの眼に映ったことは確かであった。かれが中国のマルクス主義受容に寄与したことによって、マルクス主義と革命ロシア（そしてコミンテ

ルン）とは不可分のものになったのである。以後、ソ連、あるいはコミンテルン経由のマルクス主義解釈、組織論・革命論としてのレーニン主義が中国の共産主義運動において決定的な重みを持つていくことは次章において明らかになるだろう。

三 中国共産党創立時の知的状況

中国共産党の第一回全国代表大会（以後一全大会と略す）が開催された一九二一年七月までには、マルクス主義や、ソ連の状況が雑誌、書籍を通じてかなり紹介されていたことは確かである。では当時の中国国内においてはいったいいかなる書籍が目撃可能であつたのだろうか。雑誌所載の紹介記事を見捨てることはもちろんできないが、中国語訳の単行書でその状況の一斑をうかがつておこう。一九一九年から二一年七月までの状況は次の通りである。マルクス主義関係は

一九二〇年

『社会主義與中国』馮自由著 社会主義研究所

『共産党宣言』マルクス・エンゲルス共著、陳望道訳、社会主義研究社

『科学的社会主义』エンゲルス著、鄭次川編訳、上海群益書社

『馬克斯経済学説』カウツキー著、陳溥賢訳、商務印書館

『馬格斯資本論入門』マーシー著、李漢俊訳、社会主義研究社

『社会主義史』カーカップ著、李季訳、新青年社

『社会主義總論』鄭摩漢著、華星印書社

一九二一年

『階級争闘』カウツキー著、惲代英訳、新青年社

『唯物史観解説』ゴルテル著、李達訳、中華書局

『共産主義與智識階級』田誠著、漢口（出版社未詳）

ソビエト・ロシアにかんしては

『労農政府與中国』張冥飛輯訳、漢口新文化共進社、一九二〇年

『新俄国之研究』邵飄萍著、泰東圖書局、一九二〇年

『過激党真相』孫範訳、泰東圖書局、一九二一年

『布爾什維主義底心理』スパーゴ著、陳国渠訳、商務印書館、一九二一年

以上のほかにも、社会問題、労働者問題、各国社会主義運動等の解説書が翻訳本を中心に十数冊ほど刊行されていた（それぞれにかんしては、付録の「中国社会主義関連書籍解題（一九一九—一九三三年）」参照）。レーニンの著作あるいはコミンテルン文献は雑誌においてその断片が紹介されていたのみで、単行本の形ではいまだその姿をあらわしてはいなかったが、初期共産主義者の努力で相当の知識が紹介されている。とはいえ、難解きわまるマルクス主義の神髄は、「字はみなわかったが、多くの用語がわからなかった」と評される知的状況の中では必ずしも十分に消化されていたわけではない。中国各地の共産主義グループも「マルクス主義学説研究会」の水準を出ていなかったのが実際の情況であった。ソ連・コミンテルン側の資料が一大大会を「さらに的確にいうならば、自称中国共産主義者の代表大会（傍点部引用者）」と呼ぶゆえである。また、その一大大会にしても同年六月に上海に到着したマーリン（Maring）の督促を受けて、李達が各地の共産主義グループに参集の通知を送ったものであった。⁽³⁾ 共産党の一大大会召集についてはコミンテルンの強力な後押しがあったと考えてまちがいはなからう。

一九二一年七月末に中国共産党の一大大会が上海で開かれ、ここに中国共産党が創立されたが、その大会については、そこで採択された最初の綱領と呼ばれるものと、最初の決議と呼ばれるものの資料が残されているだけで、その大会においてどのような

な論議が行われたのかについては、後年の共産党党史に関する報告や参加者の回想に頼らざるを得ないのが実情である。

党の綱領や、決議に関しては、それを作成、起草するにあたってマルクス主義の知識や、ソビエトを含めた他の国の共産党の綱領等を援用する必要が当然に生じた。大会での議論には当然に、参加者のマルクス主義の水準が披瀝されたはずである。種々の回想によれば、コミンテルンから派遣されたマーリンは演説をしたのみで、その間ほとんど発言せず、またマルクス主義の知識が比較的不十分であった毛沢東、何叔衡、董必武、陳潭秋らもほとんど発言をしていない⁽⁵⁾。大会において積極的に討論に参加したのはマルクス主義に関する研究が進んでいた北京、上海の代表である張国燾、劉仁静、李漢俊、李達、そして東京から参加した周仏海らであったといわれている。そしてこれらの議論は後述するように大会で採択された綱領、決議に反映されたといえる。知識としてのマルクス主義はここにおいて、ついに党という政治組織の中へみずからを具体化せしめたのである。

1 一全大会の争点と「綱領」、「決議」

一全大会参加者の回想を総合すると、大会で中心的論点となつたのは以下の数点であった。

- ・「綱領」第二項、コミンテルンとの関係をいかに規定するか⁽⁶⁾。
- ・同第一四項、共産党員が国会議員を含め、官吏になることができるか否か⁽⁷⁾。
- ・「決議」第一項、党の活動を当面マルクス主義宣伝、研究に限定すべきか、実際の労働運動をはじめとする實際行動にまで拡大すべきか⁽⁸⁾。

- ・「綱領」第三、四項、他の政治勢力との連合、協力を一切拒絶すべきか⁽⁹⁾。

大まかな見取図を示すと、李漢俊が大会中は一貫して温和な方向へ綱領を誘導しようとしたのに対し、劉仁静が「教条的」言辞を振りかざして戦闘的な綱領を実現させようとした、ということができるだろう。上記の論点について言えば、前者二点に関しては妥協が図られ、コミンテルンとの関係では単に「連合する」という表現にとどめられ、「職員」という形であれば公職に

就くことが許された。他方、後者一点に関しては、劉仁静、張国燾らの意見が通り、労働運動を積極的に組織し、また、「その他類似の党派と一切の関係を絶つ」、あるいは「無産階級のみ利益を擁護し、その他の党派とはいかなる相互関係をも持たない」という言葉が綱領と決議に盛られることとなった。この「綱領」、「決議」が形式的にも、また文字のうえでも、前年一二月に機関誌『共産党』に記載された「アメリカ共産党綱領」を参考にしていることは明白ではあるが、いくつかの点では中国の情況を踏まえた修正が加えられていることからわかるように、それはかれらなりのマルクス主義理解を反映させたものであった。党創立時期のマルクス主義の研究情況を物語るエピソードとして、大会において積極的に発言し、綱領の起草にも加わった劉仁静⁽¹⁰⁾の挙動が興味深いので、かれを例にとってマルクス主義の知識が党大会の論議の中でどのような意味を持ったかを検討してみることしよう。

当時、マルクス主義にかんして博識で知られた李漢俊と激論を戦わせた劉仁静は、北京の代表としてこの大会に参加した時、わずか一九歳であり、参加者の中では最年少だったが、皆に「小マルクス（小馬克思⁽¹¹⁾）」とあだなされるほどにマルクス主義関係の書籍を渉獵していた。かれはのちに一大大会に自分が北京の代表として選ばれた理由を次のように語っている。

今、子細に振り返ってみると、わたしが党の「第一回大会」の代表に選ばれたのは、偶然の要因……を除けば、結局わたし自身も一定の条件を備えていたからであると言わねばならない。わたしは歳も人より若かったし、人をまとめる能力も人より劣っていたので、自分の長所というのとはただわりと注意して理論をやっていたことだけだった。張国燾は回想録の中で、わたしのことを「本の虫」と呼び、わたしが人に会うたびに滔々としてプロレタリア独裁を宣伝した、と書いているが、これはある程度当時のわたしの姿を言い当てている。マルクス主義を学び始めたばかりのころ、当時の人はよく、マルクス主義を弁じられることを水準の高いことの証とした。当時、わたしはマルクス・レーニンの言葉を引用したりする以外、とりたてて人にまさったところがなかったのだから、たまたま「第一回大会」の代表に選ばれたという事実は、当時の党内の理解の水準のほどを何よりよく表しているし、同時に、マルクス学説研究会の研究水準もその程度がわかうというものである。

る。⁽¹²⁾

同じく一全大会の出席者である包惠僧が「私達の多くの同志はほとんどが、まず共産黨員になってからマルクス・レーニン主義を勉強した⁽¹³⁾」と評する党創立当時の理論水準からして、劉仁静が本で読んだばかりのマルクス主義の理論をそのまま党大会で繰り返したとしても、マルクス主義そのものが十分に伝播されていない以上、教条主義という批判はまったく当たらないだろう。むしろ考えるべきは、劉仁静がそのマルクス主義の知識により、最年少にもかかわらず大会においてめだつて多く発言し、綱領の起草に加わることになったということのほうである。マルクス主義の用語、概念を知っているかどうか、つまりまず「教条」を知っていることが求められるという知的状況が共産党発足当時には広範に見られた、ということなのである。

劉仁静は、自らが一全大会で「人に会うたびに滔々と宣伝した⁽¹⁴⁾」ところのプロレタリア独裁の概念をどのようにして大会以前に知ることになったのか、ということについても回想を残している。かれの言によれば、かれは北京大学に在学していた時にマルクスの『ゴータ綱領批判』を読み、その中で資本主義から共産主義へ到る過渡時期にはプロレタリア独裁をやるしかない、と述べているところに注目し、それをそのまま一全大会で発言したのであった。⁽¹⁵⁾『ゴータ綱領批判』が、一全大会以前には一部の引用を除いて、まだ中国で紹介されておらず、⁽¹⁶⁾多くの出席者が『ゴータ綱領批判』のなんたるかを知らないのだから、マルクス主義の正統理論として劉仁静がプロレタリア独裁を「滔々と宣伝し」、また共産黨員が他党との関係を一切絶つことを主張したならば、それが党の綱領に反映されたとしても何の不思議もなかった。劉仁静は仕入れたばかりのマルクス主義文献の知識を披瀝することにより、党大会に影響を与えうる力を持ったのである。

2 党内理論家の登場——李漢俊、李達から蔡和森、瞿秋白へ

上海において連日どこかの雑誌、新聞で社会主義に関する翻訳記事が発表されていた一九二〇年九月に、李漢俊は訳書『馬格斯資本論入門』を世に問うにあたり、その序において当時のマルクス主義研究の状況を「中国の現在の知識階級の程度では、資

本論の中国語訳はしばらくは出ることはないだろう⁽¹⁷⁾と断じた。なぜなら、『資本論』は内容、理論とも複雑で、頭の鈍い人にはわかるはずはない⁽¹⁸⁾し、その『資本論』の注釈書であるカウツキーの『マルクス資本論解説』（先述の陳溥賢、戴季陶が翻訳したものであり、当時陳溥賢訳本がちょうど刊行されたところであった）さえも「通常の経済学の知識のない者や青年の学生に簡単に理解できる代物ではな⁽¹⁸⁾く、今かれが翻訳、刊行せんとする書は『資本論』を読むための「解説のそのまた解説書である」ような状況だからだった。

マルクス主義研究を取り巻く困難な状況がその後しばらく続いたことは容易に想像される。実際、マルクス主義研究の先駆者であった李漢俊は一九二二年六月になっても「わが中国では現在マルクス学説に関する書は少ない⁽¹⁹⁾」と述べていた。くだって一九二四年、中国社会主义青年団の機関誌であった『中国青年』第二四期（一九二四年三月二九日）に掲載された冰冰（袁玉冰）の「一個馬克思学説的書目」の次の言葉は悲壮感さえ漂っていた。

多くの青年が私に、マルクス学説を研究するには中国の出版界ではどういふ本を読めばよいか、と尋ねてくるが、これは非常に答えにくいことである。なぜなら、中国の出版界の中でマルクス学説を研究するのはほとんど不可能だからである。大著『資本論』はいうに及ばず、マルクスの小冊子、たとえば『経済学批判』の類も見るべき訳本がないのである。マルクスの学説を解説したり、批評したりする著述においてはさらにいうまでもない。

このような状況の下、留学先で最新のマルクス主義、あるいはレーニン主義の知識を得て帰国した知識人が党内で持った優位性は容易に想像がつく。さきの一大大会での劉仁静の役割はその先駆をなすものだった。そして、それが度を加えていけば、陳翰笙（一八九七年—、中国共産党のマルクス経済学者、歴史学者）が体験した「きみは『資本論』を読んだことがあるのか⁽²⁰⁾」という文句が幅をきかす、教条主義的風潮になるう。

当然のことながら、いたずらにこむずかしい理論が横行することに対しては、のちに、学説研究よりも実践こそが青年のつとめである、とする反発が生じた。陳独秀は「むしろマルクスの学説研究を少なくするも、マルクス革命の運動を多くせざるべか

らず⁽²¹⁾と主張していたし、惲代英も「社会科学はいかに研究するかについては、わたしは理論的な書籍から手をつけるよりも、具体的な事実から手をつける方がよいと思う⁽²²⁾」と述べて、理論書よりも新聞、雑誌によって現実を知ることがを青年に求めている。しかし、それでもなお多くの青年から、最新の社会主義学説を学ぶにはどうしたらよいのか、あるいはどういう本を読めばよいのかわからない、といった投書があいついでいたように、社会主義の「知」にたいする渴望は党創設から数年を経てもいささかも衰えなかったし、また組織の中での実践、活動を標榜するのにも、理論の位相は異なるとはいえ、それ自体がソ連・コミンテルンを頂上とするひとつの「理論」に他ならなかった。

そしてそれら最新の理論を学びとって帰国した若き理論家が、共産党の活動の中枢にはいつていった。李立三は一九三〇年に行つた「党史報告」の中で「当時の党内の状況をいうと、第一回大会の時は主な指導者は陳独秀であつた。第二回大会に蔡和森が帰つてきた。第三回大会には瞿秋白が帰つてきて、指導において主要な役割を果たした、……第四回大会の時には彭述之が帰つてきた⁽²³⁾」と述べて、留学先から帰つてきた蔡和森、瞿秋白、彭述之らが理論家としてそれぞれの党大会で指導的役割を果たしたことを認めている。フランスでマルクス・レーニンの著作をむさぼり読み、「まったくのマルクス派⁽²⁴⁾」として、「わたしはまったくもってプロレタリア独裁を主張します。わたしの主張は主観ではなく、客観であり必然であります⁽²⁴⁾」と自負した蔡和森、そしてモスクワで入党した瞿秋白、かれらこそ新しい理論をもつて帰国した革命家にはかならない。コミンテルン及びソ連は、中国の共産主義運動の組織的、資金的支えとなつたのみならず、マルクス主義の「知」の源泉、權威となつたのである。

中国共産党をとりまく知的状況は、中国共産主義運動がそのマルクス主義摂取、受容の段階より外来知に巻き込まれることを不可避にした。マルクス主義の準拠となつた国が、当初の日本から、後に、革命を達成し、諸列強の反革命干渉をはねのけて自力の社会主義化を強力に進めるソ連に移つていっても、その外来知に対する接触、理解が中国マルクス主義研究、ひいては共産主義運動のなかでの力となつていったという構造に基本的変化はなかった。むしろその傾向は強まつていくことさえ可能である。

日本の社会主義研究に対してはいち早く反応し、新時代の確信とともにそれを紹介した李大釗も共産党の誕生以降、コミンテルン経由のマルクス・レーニン主義を紹介することにおいて、陳独秀、蔡和森、瞿秋白にはるかに及ばなかった。李大釗は、北方での実際の活動に比重を移していくのと重なるように、理論的な仕事から次第に遠ざかるとともに著述も減り、マルクス主義研究の系譜はやがて陳独秀、蔡和森、施存統、瞿秋白らへと引き継がれていく。これら党内における「理論家」の登場は、コミンテルンの理論的指導を直接に受け入れる素地が中国において形成されたことを示す指標でもあった。

結 語

李大釗のマルクス主義受容及び、陳独秀を中心とする上海共産主義グループのマルクス主義受容の過程を通して見てきたように、中国におけるマルクス主義の受容は、単に共産主義運動から共産党の誕生へとつながる革命運動に帰結していったのみでなく、まさに「知の革命」とも呼ぶべき波動を中国に及ぼした。そして、その「知の革命」は二重の意味で現れたということができる。

まず第一に、マルクス主義は、五四時期の混沌とした思想界に対して、ひとつの包括的思想として現れ、新文化運動以来のさまざまな問題、たとえば「人を食う礼教」に代表される中国の伝統思想の問題、婦女解放問題、科学的 세계観、文学革命、東西文明比較、実業振興問題等々の錯綜した諸問題に、唯物史観、階級闘争論、そして革命完成後の共産主義社会出現の予言によって一挙に根本的指針と未来の方向についての確信を与えたという意味で、まさしく「全能の知」による「知の革命」であった。マルクス主義の持つ包括的体系がいかなくその威力を発揮したのである。旧来の価値の一切が批判にさらされながら、それに代わる新しい基軸が現れない、つまり混沌の極致ともいうべき五四時期の思想状況は、マルクス主義の登場によって、まがりなりにも座標軸を得て極めて平明になったのである。とりわけ思想界においては、マルクス主義に代表される社会主義を肯定する

か否定するにかかわらず、社会主義を口にすることを抜きにしては中国内外の諸問題を論ずることは難しくなっていた。一九二三年時点で行われた北京大学のアンケートで学生のほぼ半数が信じる主義を「社会主義」と答える時勢が到来していたのである。⁽¹⁾また、梁啓超や張東蓀をはじめとする改良主義的論客や、区声白らのアナーキストも一九二〇年後半よりマルクス主義に対する論戦⁽²⁾を展開しているということは、むしろマルクス主義が中国の知的状況の中で次第に無視できない地位と權威を獲得しつつあったことの裏返し⁽³⁾の証明なのである。

そして、そもそも新文化運動の旗手として旧思想に対する呵責なき攻撃の先頭に立ち、五四時期の中国において青年の間に絶大無比の威信を確立していた陳独秀がデュイー、ラッセルを排してマルクス主義に転じた時、それは中国知識界の最先端と目された部分が、みずからがかつて発した問いへの答えをマルクス主義の中に見出したことを中国の青年に向かって宣言したことにほかならなかった。当時の陳独秀の影響力の大きさを考えるならば、多くの急進的青年がそのあとに従ったのは当然だった。

そして「知の革命」とここで呼びまひとつの意味は、本論の中で繰り返し述べたように、マルクス主義受容が、マルクス主義という「知識」の体系によって指導される新しい形態の革命運動を中国にもたらしたという点にある。つとにE・H・カー(E. H. Carr)は、ロシア革命以降の共産主義運動、社会主義革命の持つ特徴を「目的意識性」あるいは「自己意識性」と呼び、それ以前のブルジョア革命との重要な相違点である、と指摘している。⁽³⁾つまり「ロシア革命は、意図をもって計画され遂行された歴史上最初の大革命であった」という言葉に見えるように、一九世紀後半からの社会主義革命運動とは、革命を行う以前に予め研究され、その研究に基づいてプログラムが設定され、それに依拠して発動されたものであるという点で、歴史上においてそれ以前の革命とは著しく異なるのである。革命の発動に先だって理解すべき思想、主義という知識がある以上、ロシア革命以降の革命においてはその知識の重みは革命運動の中で無視しがたいのである。革命の領袖は同時に思想家でもあるという各国に共通する社会主義革命の伝統は、マルクス主義以降の革命が知識の獲得、その応用と無縁ではあり得ない⁽⁴⁾ということのなによりのかかしである。当然中国も例外ではない。中国における共産主義運動の発もこれまで見てきたように、まぎれもなく「単に過

去を繰り返しただけでなく未来をも計画した知識人、単に革命をやろうとしただけでなく革命をなしうる諸条件を分析し準備しようとした知識人⁽⁵⁾」によって積極的に開始されたのだった。

しかしながら「革命のための知識」の受容は、中国が政治や経済と同様に文化の面でも置かれていた世界上の受動的位置ゆえに、複雑な経過をたどることを余儀なくされた。五四以前に科学的社会主義研究の歴史が決定的に欠如していた中国においては、マルクス主義という「知識」はまず斬新で、難解な外来知として受容されたのであった。外来知を摂取できる資格と能力を持つものが共産主義運動の中心に位置し（早くは陳独秀、李大釗、戴季陶、李漢俊、のちに蔡和森、瞿秋白、彭述之）、その知識が指導・被指導の序列を支える役目を担ったという事実は、中国の社会主義者にのしかかるマルクス主義及びレーニン主義の知識がいかに重かったかを示している。

周知のように、李達、李漢俊、陳望道ら日本語文献によってマルクス主義を理解し、日本のマルクス主義研究に依拠していた一大当時の主要メンバーは一九二二年から二三年にかけて党の中枢から離れ、まもなく離党した。一大と二大（一九二二年）では、その大会参加者を見るだけでも、中国共産党の性格が主義・学説の研究・宣伝から、組織・運動を任務とする前衛党へ変化していったことをうかがわせる。日本のマルクス主義研究を後追うこと、つまり学理研究のための知識は、ソ連を源流とする運動・組織の理論（これをレーニン主義と呼ぶことも可能であろう）にとって代わられたのである。李漢俊、李達、陳望道らの離党は従来、陳独秀の「家父長的作風」⁽⁶⁾や張国燾の「セクト的傾向」⁽⁷⁾のもたらした悪しき弊害の結果であった、という説明がなされてきたが、それはかれら理論家の知識の質からみるならば、中国共産党が、学理としてのマルクス主義研究から運動としてのマルクス主義研究に理論のあり方を変えたことを示しているとはいえないだろうか⁽⁸⁾。

しかし、理論のあり方やその担い手は変化したというものの、理論を「受容」することの重要性とその理論が組織や実践の指導の源であると信じる観念は堅く根をおろしたのである。ここに、知識面においても、主義による指導の序列がコミンテルンを頂点とする形で準拠化されることとなる。そして、ロシア革命のまばゆいばかりの栄光とともに、その知識の源泉がコミンテ

ルンやソビエトと不可分に結びつく時、コミンテルンによる中国共産主義運動の指導は資金や組織の上だけでなく、思想的にも貫徹されることになる。解放のための知識は、それが準拠化されイデオロギーとなると、一方ではその知識による抑圧を生み出す危険性をはらんでいた。

注

はじめに

- (1) 楊紀元「毛沢東不可能在北京看到陳詠本『共産党宣言』」(党史研究資料)三、四川人民出版社、一九八二年、竹内実「毛沢東」(岩波新書、一九八九年)四九―五六頁。
- (2) 南博、社会心理研究所編著『大正文化 一九〇五―一九二七』(新装版、勁草書房、一九八七年)二九九頁。
- (3) マルクス・エンゲルス著作の中国語への翻訳史にかんしては、以下のさわめて優れた研究書がある。中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編訳局馬恩室編『馬克思恩格斯著作在中国的傳播』(人民出版社、一九八三年)、北京圖書館馬列著作研究室編『馬克思恩格斯著作中訳文総録』(書目文獻出版社、一九八三年)。

第一章

- (1) 韓一徳、姚維斗『李大釗生平紀年』(黒龍江人民出版社、一九八七年)七二頁。
- (2) 小関信行『五四時期のジャーナリズム』(『五四運動の研究』第三巻、一一、同朋舎、一九八五年)一〇七頁。
- (3) 張允侯等編『五四時期的社団』(一)(生活・読書・新知三聯書店、一九七九年)六四頁。
- (4) 王炯華『李達與馬克思主義哲学在中国』(華中理工大学出版社、一九八八年)は「馬氏唯物史観概要」の訳者を李達であると推定している(一三頁)が、日本留学中の李達がほかに「晨报」に投稿している

形跡がないことからみても、その推定にはやや無理がある。

- (5) 前掲『馬克思恩格斯著作在中国的傳播』二四八頁。
- (6) 河上肇『マルクス資本論解説』(『社会問題研究』第七冊、一九一九年七月)。
- (7) 「晨报副刊」上に連載された「馬氏資本論釈義」は翌一九二〇年九月に単行本の形で刊行される。陳溥賢は刊行にあたって日本語版で伏せ字になっていた箇所をおぎなうて刊行せんとし、高島素之に伏せ字部分を中国語版のために翻訳してくれるよう手紙で要請したが、高島からは返答を得られなかった。この間の事情にかんしては、陳溥賢訳『馬克斯経済学説』(商務印書館、一九二〇年)三頁に次のようにある。「日訳原本、很有幾處省略略去的地方、我因為找不到德本原書來參考、所以写信托高島君替我補訳出来、但是到了本書付印的時候、還沒有寄到、只好等有再版的機會再補訳。」
- (8) 中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編訳局研究室編『五四時期刊介紹』第一集上冊、(生活・読書・新知三聯書店、一九七八年)九八頁。及び、『李大釗伝』(人民出版社、一九七九年)五八頁。
- (9) 前掲『李大釗伝』二八―二九頁。
- (10) 李大釗が「晨报」あるいは「晨报副刊」の編集にたずさわっていた、という俗説は成綱「李大釗同志抗日闘争史略」(『烈士伝』、大連大衆書店、一九三六年所収)が、李大釗は晨报の主任編集員だった、と誤記したことに源を発するらしい。やがてその論は広く流布し、かれが「晨报副刊」に記事を投稿したことと合わせて、「晨报」マルクス研究專欄開設に助力(張静如等編『李大釗生平史料編年』上海人民出

版社、一九八四年、七五頁）、はては「李大釗の影響の下、もともと『晨报』にいた旧派の人の中にも「近世社会主義鼻祖馬克思的奮闘生涯」のような文章を書くものも現れた」（李龍牧『五四時期思想史論』復旦大学出版社、一九九〇年、一九八頁）とする拡大解釈がうみだされることになる。

- (11) 「淵泉」が陳溥賢の筆名であることの考証は、拙稿「李大釗のマルクス主義受容」（『思想』八〇三号、一九九一年五月）参照。なお「淵泉」が李大釗の筆名でないことは楊紀元「淵泉」不是李大釗の筆名」（『党史研究資料』一九八七年一〇期）によって検証されており、梁漱溟の証言にもとづいて「淵泉」を陳溥生であるとしている。

- (12) 陳溥賢（陳溥生）の経歴については、葉明勳、黃雪邨「追憶陳溥生先生」（『傳記文学』三九卷一期、一九八一年一月）、姜亮夫撰『歷代名人年里碑伝総表』（台湾商務印書館増補排印本、一九七〇年）、支那研究会編『最新支那官紳録』（富山房、一九一八年）、外務省情報部『現代中華民国・満州帝国人名鑑』（東亜同文会、一九三七年）、橋川時雄編『中国文化界人物総鑑』（中華法令編印館、一九四〇年）等に拠った。

また、陳溥賢が五四運動の引き金となった記事（『膠州亡矣、山東亡矣』と呼びかける国民外交協合理事の林長民の一文「外交警報 国民ニ敬告ス」——『晨报』一九一九年五月二日所載）の掲載を決断したと伝えるものに、梁敬錚「我所知道的五四運動」（『傳記文学』八卷五期、一九六六年五月）がある。なお、この記事の存在については、劉永明『国民党人與五四運動』（中国社会科学出版社、一九九〇年、九三—九四頁）の教示を得た。

- (13) 李大釗と陳溥賢の関係をうかがわせる資料は管見の限りでは、唯一、梁漱溟「回憶李大釗先生」の中に、李大釗が一九二七年四月に張作霖によって逮捕、処刑された時、陳溥賢が李の遺体のある寺に赴いた、という記述があるだけである（『回憶李大釗』人民出版社、一九八〇年、八九頁）。これにより、五四以降も李大釗と陳溥賢の交遊が続い

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

たということが漠然と推測される。

- (14) 『晨报』「副刊」一九一九年一月六日。
(15) 『晨报』「副刊」一九一九年一月一八日。
(16) 両記事ともに署名はないが、記事の内容から陳溥賢の執筆であることが知れる。

- (17) 淵泉「東遊隨感録（十）」（『晨报』「副刊」一九一九年一〇月二九日）。

- (18) 淵泉「什麼叫做危險思想？」（『晨报』一九一九年六月二九日）。

- (19) 「黎明会」（一月五日東京通訊）吉野博士」（『每週評論』五号、一九一九年一月一五日）は吉野が「每週評論」同人にあてた手紙の翻訳と見られるが、そこには李大釗らが吉野に「每週評論」を送呈していたこと、また吉野が「黎明講演集」の寄贈を約束していたことが記されている。この記事の存在については、松尾尊兌「五四期における吉野作造と李大釗」（吉野作造『現代憲政の運用』（みすずりプリント一五）付録、みすず書房、一九八八年）の教示を得た。

- (20) 「李大釗の胡適宛書簡」（『李大釗文集』下、人民出版社、一九八四年、九三六頁）。

- (21) 明明「祝黎明会」（『每週評論』九号、一九一九年二月一六日）、T C生「黎明日本之曙光（東京通信）」（『每週評論』九号、一九一九年二月一六日）等は「淵泉」寄稿の記事に拠っていると思われる。とりわけ「黎明日本之曙光（東京通信）」は「李大釗文集」では李大釗の文章として収録しているが、記事の内容からしても東京で実際に黎明会講演をきいた者の筆になる文章であり、陳溥賢が書いている可能性もある。

- (22) 吉野作造と李大釗との五四時期の交流、中国教授、学生の訪日に関しては松尾尊兌「民本主義者と五四運動」（『大正デモクラシーの研究』青木書店、一九六六年所収）、及び前掲松尾「五四期における吉野作造と李大釗」参照。

- (23) この記事に関しては前掲松尾「民本主義者と五四運動」によってその存在を教示された。

- (24) 陳溥賢は一九一九年七月から八月にかけてこの年二度目の訪日をしたが、そのおりに招きを受けて吉野を再訪し、日中教授、学生交流について話し合っている(淵泉「訪問吉野作造博士記」、『晨报』一九一九年八月一六日)。
- (25) 「面通宮崎龍介先生」(『李大釗文集』下、九四五頁)。なお『李大釗文集』ではこの手紙の差出人は「陳啓修、陳傳賢、李大釗」になっているが、「陳傳賢」は「陳溥賢」の誤記と思われる。
- (26) 狭間直樹「中国社会主义の黎明」(岩波新書、一九七六年) 八八—九〇頁。
- (27) 馮自由「社会主义與中国」(社会主义研究所、一九二〇年) 一一頁。
- (28) 『時事新報』(東京) 一九一九年(大正八年) 六月九日付夕刊記事。この記事については、金原左門「昭和への胎動」(文庫版「昭和の歴史」第一巻、小学館、一九八八年)の教示を得た。
- (29) 関忠果等編著『雑誌「改造」の四十年』(光和堂、一九七七年) 四四—四八頁。
- (30) 「マルクス出版界を圧倒する」「資本論」解説」(『解放』一九二〇年一月号)。
- (31) 王光祈「工讀互助團」(『少年中国』一卷七期、一九二〇年一月)。
- (32) 「上海時事新報北京晨報共同啓事」(『晨报』一九二〇年一月二七日)によれば、それまでは、中国各紙は欧米に専門の特派員をおいていなかった、という。陳溥賢とならんで、ソ連特派員には瞿秋白の名前も見える。
- (33) 斎藤道彦訳「私のマルクス主義観(上)」(桜美林大学『中国文学論叢』第二号、一九七〇年二月)の訳注参照。なお「我的馬克思主義観」の後半部分が福田徳三「続経済学研究」に大きく依拠していることも、後藤延子「李大釗とマルクス主義経済学」(信州大学『人文科学論集』第二六号、一九九二年三月)によって明らかにされている。
- (34) 五四運動の時期の河上肇の思想は、雑誌『社会問題研究』上において、マルクス主義の紹介を行うものの、いまだマルクス主義の唯物史観に疑義を表しており、単に物質的改造だけでなく、倫理による人間の魂の解放が必要である、と考えていた。堺利彦はこの時期の河上の思想を評して「霊肉二元論」と呼び、その根強い道德主義的傾向を指摘していた(「河上肇君を評す」、『新社会』五巻七号、一九一九年三月)。
- なお李大釗、及び中国マルクス主義に関する河上肇の影響を扱った専論には、鄭学稼「河上肇與中国共産主義運動」(『中共興亡史』第一巻下、帕米爾書店、一九八四年再版所収)がある。
- (35) 李大釗「物質變動與道德變動」(『新潮』二巻二号、一九一九年二月)は、堺利彦「唯物史観の立場から」(一九一九年八月)所収の堺利彦の翻訳、論文を引用していることから見て、この時期の李大釗が堺利彦の著作を見ていたことは間違いない。
- (36) 李大釗の日本社会主义同盟加入、およびそれに丸山幸一郎が関与していることは、山辺健太郎氏が「バリ・コミュニケーション百年と日本」(『図書』一九七一年八月号)で紹介している。
- (37) 李大釗以外で中国人と見られる参加者は「呂盤石、趙文謨、張省吾」の三名である。
- (38) 北京における丸山幸一郎の活動については飯倉照平「北京週報と順天時報」(『朝日ジャーナル』一九七二年四月二二日号)、及び山下恒夫「薄幸の先駆者・丸山昏迷」(『思想の科学』一九八六年九月、一〇月、一一月、一二月号)を参照。
- (39) 清水安三「回憶魯迅——回想の中国人(1)——」(桜美林大学『中国文学論叢』第一号、一九六八年三月)。
- (40) 清水安三「李大釗の思想及び人物」(『北京週報』二五六号、一九二七年五月八日)。
- (41) 内務省警保局「本邦社会主义者・無政府主義者名簿」(社会文庫編『社会主义者・無政府主義者人物研究史料』(1)、社会文庫叢書七、柏書房、一九六四年、一七八頁)。なお丸山は同時に周作人、魯迅ら中国の文学者、作家とも積極的に交流し、『北京週報』誌上に一九二

二年頃から日本国内に先駆けて魯迅、周作人、謝冰心らの文学革命の成果を翻訳、紹介する中心となっていた。このように丸山は、当時の北京在住日本人の中では精力的に中国の新文学を支援したが、一九二四年八月、腎臓炎を発し、同九月に郷里の長野でわずか二九歳で死去している。

- (42) 後藤延子「李大釗における過渡期の思想——『物心両面の改造』について」(『日本中国学会報』第二三集、一九七〇年一〇月)、及び斎藤道彦訳「物質変動と道徳変動」(桜美林大学『中国文学論叢』第五号、一九七四年二月。同第六号、一九七六年二月)。なお、斎藤氏は李大釗の引用が、『新社会』の発禁になった号から行われていることを疑問とされているが、それら堺の文章は、のち一九一九年八月に公刊された堺の文集『唯物史観の立場から』に収録されている。李大釗は『新社会』ではなく、『唯物史観の立場から』で堺の文章を読んだと考える方が自然であろう。

- (43) 李大釗「亜細亞青年的光明運動」(『少年中国』二巻二期、一九二〇年八月)。

- (44) 李大釗「戦後之婦人問題」(『新青年』六巻二号、一九一九年四月)。この文章の掲載された『新青年』六巻二号の発行日が雑誌記載の二月一五日ではなく、四月であることが『李大釗文集』上、六四〇頁に記されているので、ここではそれに従う。

- (45) 李大釗「五一 May Day 運動史」(『新青年』七巻六号、一九二〇年五月)。

- (46) 北京大学内に設けられた「マルクス学説研究会」の設立の時期については一九二一年一月一七日付『北京大学日刊』に見える「発起馬克斯学説研究会啓事」に「昨年三月にこの研究会を発起した」の一節による。公開の研究会になったのは一九二一年一月である。

なお、李大釗はつとに一九一八年後半に「マルクス(漢字表記は馬爾格士、あるいは馬爾克斯)学説研究会」を組織し、マルクス主義の研究に従事していたという説がある(根拠は朱務善、高一涵らの回想

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

である。それぞれ朱務善「回憶北大馬克斯学説研究会」、中国社会科学院現代史研究室、中国革命博物館党史研究室選編『一大 前後中国共産党第一次代表大会前後資料選編』二、第二版、人民出版社、一九八五年、(以下「一大前後」と略称)、一一八頁、及び高一涵「回憶五四時期的李大釗同志」(『五四運動回憶錄』上、中国社会科学出版社、一九七九年、三四〇頁)が、活動内容がまったく不明であり、回想の他にその存在を裏付ける史料がまったくないので実際に存在したかどうかは極めて疑わしい。付言すれば高一涵の回想は李大釗を美化するあまり、事実と反する記述が多いので資料としての価値に疑問が残る。なお高一涵回想の解釈については、後藤延子「李大釗と日本文化」(『信州大学人文学部特定研究報告書』一九九〇年三月)を参照。

- (47) 「発起馬克斯学説研究会啓事」(『北京大学日刊』一九二一年一月一七日)。

- (48) 「馬克思学説研究会通告(四)」(『北京大学日刊』一九二二年二月六日)参照。ただし、この蔵書一覧には著者名、書名に誤記、誤植が目立ち、当時の社会主義書籍の出版状況を正確に知るには他の資料とつきあわせる作業が必要である。

- (49) 朱務善「回憶北大馬克斯学説研究会」(『一大前後』二、一一一頁)。

- (50) 五四時期前後に北京を中心に社会主義思想の紹介とロシア革命の報道に尽力したいま一人のジャーナリストに邵飄萍を挙げることができ。かれは一九二〇年から二一年にかけて、泰東圖書局や、日本の東瀛編訳社より『総合研究各国社会思潮』、『新俄国之研究』、『失業問題』を出版したが、それらにしても、かれが一九一九年暮れから『大阪朝日新聞』の顧問として日本に滞在した際に執筆した成果であってみれば、やはり日本思潮の中国への媒介者であったといえる。詳しくは、旭文編著『邵飄萍伝略』(北京師範学院出版社、一九九〇年)七四―八二頁を参照。

第二章

- (1) 陳溥賢「從北京到西貢」(『晨報』一九二〇年二月二二、二三、二四)によれば、陳溥賢は英國特派員として一九二〇年一月二〇日に北京を發ち、フランス經由でイギリスへ向かつている。なお、陳溥賢の渡英は、五四後に見られた一連のブルジョア階級の援助をうけた洋行のひとつであった、という見解もある(許德珩「五四運動六十周年」『五四運動回憶錄』続、中国社会科学出版社、一九七九年、六五頁)。特派員をおえて中国に帰国した時期については不明。

- (2) 「言論圧迫の喜劇——支那L.T.生より——」(『新社会評論』七卷四号、一九二〇年六月)。上海の李達から堺利彦に寄せられたと見られるこの手紙は、北洋政府のマルクス主義文献にたいする弾圧が上海には直接には及んでいなかったことを物語る。

- (3) おなじく国民党系である謝英伯も、五四時期以前に上海で「馬克斯派社会主義講習会」を設立したと述べ、自分こそが「中国共產派之提倡最先者」であるとしている(謝英伯致大光報函『広州民国日報』一九二四年五月一四日)。謝英伯は米國滞在中(一九一四—一九二六年)に、江亢虎の紹介でアメリカ社会党系のランド・スクール(Rand School)に入学し、帰国後は、江亢虎の帰國(一九一七年六月)を待つて、中国社会党の再建をはかる「中国社会党籌備処」の主任となった。しかし、江はその再建がならないまま、一カ月余りでアメリカにもどつてしまい、結局この前後に中国社会党は再建されずにおわった模様である。謝英伯が自伝(『人海航程』)、および『広州民国日報』でいう「社会主義講習会」とは、江亢虎社会党の垂流にはかならなかったとみられる。謝は、言論活動もおこなったというが、その内容は確認されていない。この間の事情については、謝英伯「人海航程」(『革命人物誌』第一九集、中央文物供应社、一九七八年、三五〇、三五三頁)、および「社会主義家組織政党之籌備」(『民国日報』一九一七年六月一四日)参照。

- (4) 李人傑(李漢俊)「改造要全部改造」(『建設』一卷六号、一九二〇年一月)。

- (5) たとえば、胡適、廖仲愷、胡漢民「井田制度有無之研究」(『建設』二卷一号、一九二〇年二月)。

- (6) 清末、辛亥時期の社会主義理解が、中国の伝統と深く結びついていたものであったことについては、前掲狭間直樹『中国社会主义の黎明』、一三三—一三六頁を参照。

- (7) 雑誌『建設』の編集関係者で「民意」の筆名を使ったのは、胡漢民と朱執信があげられるが、朱の死後、一九二二年に建設社編で刊行された『朱執信集』は、『建設』上に「民意」の署名で發表された文章を朱の執筆にかかるとして収録している。また、広東省哲学社会科学研究所歴史研究室編『朱執信集』(中華書局、一九七九年)も、「民意」署名の論文(『建設』一卷六号の書簡も含む)を、朱執信のものとして収録している。たしかに、胡漢民も『建設』の編集にたずさわっており、「民意」が胡漢民の筆名である可能性を完全に排除することはできないが、建設社そのものが「民意」署名の論文を朱のものとしている以上、ここでは「民意」を朱執信の筆名と考える。

- (8) 戴季陶の上海におけるマルクス主義研究、ソビエト・ロシア研究については、呂芳上『革命之再起』(中央研究院近代史研究所專刊五七、一九八九年)、および湯本國穂「五四運動状況における戴季陶——『時代』の方向と中国の進む道——」(千葉大学教養部研究報告B—一九、一九八六年一月)を参照。

- (9) 李達「中国共產党的発起和第一次、第二次代表大会經過的回憶」(『一大前後』二、七頁)、「袁振英的回憶」(『一大前後』二、四七二頁)、及び「陳公博・周佛海回憶錄合編」(春秋出版社、一九六七年)二七—二八頁。

- (10) 李大釗「都市上工読団の缺点」(『新青年』七卷五号、一九二〇年四月)。

- (11) 陳独秀「工讀互助團失敗的原因在那裏」(『新青年』七卷五号、一九

二〇〇年四月)。

- (12) 陳独秀「告北京労働界」(『晨报』一九一九年二月一日)。
- (13) 陳独秀がデュイイの「民治論」に注目し、中国に応用することを主張していたことは「実行民治の基礎」(『新青年』七卷一号、一九一九年二月)、「我的解決中国政治方針」(『時事新報』副刊「学燈」一九二〇年五月二十四日)に見える。
- (14) 張国燾「我的回憶」(1) (明報月刊出版社、一九七一年) 九七頁。
- (15) 施存統「青年応自己増加工作」(『民国日報』「覚悟」一九二〇年八月二十六日)。
- (16) 戴天仇(戴季陶)「三民主義」(『解放』一九二〇年二月号)。なお、この堺宛書簡の日付は「民国八年(一九一九年)一月七日」になっているが、文中に「星期評論」の新年号を別送する旨が記されていることから見て(『星期評論』は一九一九年六月創刊、一九二〇年六月停刊)、「民国九年(一九二〇年)一月七日」の間違いであろうと思われる。また書簡中にいう李君佩のカウツキー翻訳は雑誌「閩星」に連載されたものであるが、掲載未了におわっている。
- (17) 戴季陶「資本主義下面的中日關係」(原載は「黒潮」二卷一号、一九二〇年七月であるが、引用は「民国日報」「覚悟」一九二〇年七月一七日転載記事によった)。
- (18) 胡適「帰国雜感」(『新青年』四卷一号、一九一八年一月)。
- (19) 戴天仇「反響」(『解放』一九二〇年二月号)。
- (20) 平記念事業会編著『平貞蔵の生涯』(非売品、一九八〇年) 一〇一—一〇二頁、および宮崎龍介「新装の民国から」(『解放』一九一九年二月号)。宮崎と李漢俊とは一高帝大時代の友人であった。
- (21) 陳望道「關於上海馬克思主義研究会活動的回憶」(『復旦學報』(社会科学) 一九八〇年第三期)。
- (22) 日本語版『共産党宣言』の書誌学的検討は大島清氏によって行われている(『日本語版『共産党宣言』書誌』、榎田民蔵著 大内兵衛補修『『共産党宣言』の研究』、青木書店、一九七〇年、所収)ので、ここ

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

ではそれによりながら陳訳本のテキストを推定することとする。

- (23) 戴季陶「訪孫先生の談話」、「对付「布爾色維克」的方法」(『星期評論』三号、一九一九年六月二二日)。
- (24) Benjamin I. Schwartz, *Chinese Communism and the Rise of Mao*, (1968) [邦訳・石川忠雄、小田英郎訳「中国共産党史」慶応通信、一九六四年、三五頁]。戴季陶「孫文主義之哲學的基礎」(民智書局、一九二五年)の民生主義に関する部分。
- (25) 邵力子「党成立前後的一些情況」(『一大前後』二、六八頁)。
- (26) 李達「中国共産党成立時期的思想闘争情況」(『一大前後』二、五二頁)。
- (27) 張国燾「我的回憶」(1)、一三四頁。
- (28) 包惠僧「懷念李漢俊先生」(『党史資料叢刊』[上海] 一九八〇年第一輯)。
- (29) 李漢俊訳『馬格斯資本論入門』(社会主義研究叢書第二卷、社会主義研究社、一九二〇年) 訳者序。引用は上海の「中共一大会址紀念館」所蔵の原本を参照した。参考のために注末尾に序の全文を掲げる。
- (30) 李漢俊「研究馬克斯學說的必要及我們現在入手的方法」(『民国日報』「覚悟」一九二二年六月六日)。
- (31) 漢俊「渾朴的社会主義者底特別的労働運動意見」(『星期評論』五〇号、一九二〇年五月一六日)。
- (32) 施存統「中国共産党成立時期的幾個問題」(『一大前後』二、三四—三五頁)。陳望道に関しては鄧明以「陳望道」(『民国人物伝』第四卷、中華書局、一九八四年、二八九頁) 参照。
- (33) 茅盾「我走過的道路」上冊(生活・讀書・新知三聯書店香港分店、一九八一年) 一五二頁。
- (34) 晋青「日本社会運動家底最近傾向」(『民国日報』「覚悟」一九二一年三月一四日)の陳望道附記、及び前掲「言論压迫の喜劇——支那L T生より——」。
- (35) 『山川均全集』未収論文であることから考えて、山川が「新青年」

のために書き下ろしたものであると考えられる。また同誌は堺利彦にも原稿を依頼したが、堺が多忙のため原稿を得られなかったという。このほかにも、結成間もない共産党は、ワシントン会議（一九二一年）に對する堺、山川の見解をパンフレットにし、上海を中心にして五千部配布している（中共中央執行委員會書記陳独秀給共産國際報告、中央檔案館編『中共中央文件選集』第一卷、中共中央党校出版社、一九八九年、四七頁）。

- (36) C T（施存統）「介紹『社會主義研究』」（『民國日報』「覺悟」一九二一年九月二七日）。

- (37) 董必武「董必武談中國共產黨第一次全國代表大會和湖北共產主義小組」（『一大前後』二、三六九—三七〇頁）。

- (38) ヴォイチンスキーの來華時期には一九二〇年三月説と同年四月説とがあり、いまだ確定的な結論は出ていないが、北京の「マルクス學說研究会」の設立時期、及びヴォイチンスキーの上海到着が四月であることから推して、ここでは三月と考えておく。

- (39) 「マルクス主義研究会」設立から共産党成立までの上海の共産主義グループの活動については、中共上海市委党史資料徵集委員會主編『上海共産主義小組』（知識出版社、一九八八年）所収の陳紹康著の「総述」が参考になる。

- (40) 羅章龍は、ヴォイチンスキーが『國際（International）』、『紅旗（Rouge）』、『國際通訊（International Press Correspondence）』等の雑誌と、ジョン・リードの『世界を震撼させた十日間』等の書籍を持つてきていた、と述べている（羅章龍「亢奮回憶錄」『回憶李大釗』三七頁）が、『International』なる雑誌は存在しない。『International Press Correspondence（インプレコール）』は一九二一年創刊であるので一九二〇年にヴォイチンスキーが持つてきていたということはあり得ない。あるいは『Communist International』か『The New International』の記憶違いかも知れない。いずれにせよ、ヴォイチンスキーがかなりの社會主義關係の文献を持ち込んでいたことは確かである。

- (41) 『新青年』の性格の変化はあまりにも激しかったために、上海の陳独秀と北京の胡適ら同人の間には齟齬が生じ、胡適は陳独秀に、「今『新青年』はほとんど Soviet Russia の漢訳本となった」と書き送り、不快の念をあらわにした（『關於新青年問題的幾封信』、張靜廬編『中國現代出版史料』甲編、中華書局、一九五四年、九一—一〇頁）。また陳独秀も一九二〇年一月に胡適、高一涵にあてた書簡の中で「新青年の色彩が鮮明に過ぎ、私もこの頃良くないと思っています。陳望道君も内容を少し改めるよう主張しています」と述べ、復刊以降の『新青年』が引き起こした反響に驚いていた（『關於新青年問題的幾封信』、『中國現代出版史料』甲編、七頁）。

- (42) 茅盾『我走過的道路』上冊、一四九頁。

- (43) 茅盾『我走過的道路』上冊、一四九頁。

- (44) アメリカ社会党（Socialist Party of America）は一九〇一年結成、社會主義諸勢力を吸収し、一九一〇年代に最盛期を迎える。いくつかの地方議會や首長選挙で勝利を収め、一九二二年の大統領選挙では社会党候補デブスが米國社会主義政黨史上最高の六%の人民投票を獲得する。第一次世界大戰に際しては主流派が反戰の立場を堅持し、一部幹部が逮捕、投獄された。ロシア革命後、一九一九年に三派（社会党、共産党、共産主義労働党）に分裂し、次第に衰退する。

なお一九二二年上海の共産党周辺の人物によって創刊された「新時代叢書」の刊行物はいずれも『新青年』と同様にアメリカ社会党の党章を表紙に採用していた模様である（陳紹康、蕭斌如「紹介『新時代叢書』杜和『新時代叢書』、『党史研究資料』五、四川人民出版社、一九八五年、四五六—四五七頁）。付言すれば、日本において一九二三年ごろに秘密裏に刊行された『共産党宣言』（京都大学経済学部図書館河上文庫所蔵）の表紙もアメリカ社会党の党章を模したものであるが、これは大西洋ではなく、太平洋を挟んで二本の手が握手するものになっている。これらのことは、日本、中国ともに米國經由の社會主義文献が大きな影響力を持つていたことを表しているよう。

(45) ヴォイチンスキーの経歴についてはソ連科学アカデミー極東研究所編著、毛里和子、本庄比佐子共訳『中国革命とソ連の顧問たち』(国際問題新書四一、一九七七年)所収のB・H・グルーニン「グリゴリー・ヴォイチンスキー」参照。

(46) チャールズ・H・カー出版社は一八八六年シカゴに設立され、一九九九年より社会主義書籍の出版を開始、従来稀少で高価だった種々の社会主義書籍を安価で供給し、アメリカ社会主義運動に大きく寄与した(Charles H. Kerr, *What Socialism is*, Charles H. Kerr & Co., n.d. pp. 21)。山辺健太郎の回想(遠山茂樹等編『山辺健太郎・回想と遺文』みすず書房、一九八〇年、二三二頁)は、「社会主義の本といったって、十冊あるかないかの時代で、あとは英語の文献を読まねばならなかった。英語の文献はアメリカのシカゴにあったチャールズ「以下不明」原注」書店から。ずっと明治から大正まで日本の社会主義文献というのはみんなそこらきた」と述べて、シカゴのチャールズ・H・カー出版社が英語文献の供給元であったことを語っている。

また中国においても、一九二〇年代半ばにマルクスの著作の翻訳にあたった柯柏年(本名は李春蕃)も一九二二年前後に「マルクス主義の著作を専門に出版していたシカゴのカー書局(Charles H. Kerr & Co.)から英訳の『資本論』を含む何冊かの本を買った」と述べて、中国の社会主義者もチャールズ・H・カー出版社から文献を購入していたことを明らかにしている(柯柏年「我訳馬克思和恩格斯著作的簡單経歴」、前掲『馬克思恩格斯著作在中国的传播』一九九頁)。

(47) 出版年不明であるが、京都大学経済学部所蔵本は一九一八年に購入されており、同書は一九二七年には再版が出ている。一九二〇年前後には書物のうえでアメリカ社会党の党章を見ることが可能であった。

(48) 俾代英が陳独秀の依頼を受けて「階級争闘」の翻訳にあたった時期に関しては、かれら互助社の機関誌『互助』第一期(一九二〇年一月)の「我們的消息」欄に、「代英近来規定每日読書或作文七小時。……他所訳『階級戦争』一書、預備半月内訳完。」とある(前掲『五

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

四時期的社團」(二、二〇〇頁)ところから見て、一九二〇年の秋頃であったと考えられる。この記事の存在に関しては、湖北大学の田子渝氏の教示を受けた。

(49) 模倣しているのは、表紙の題字だけではない。五四時期の雑誌は表紙に論説を載せるということをしないが、『共産党』は「コミニニスト」に倣って、表紙に巻頭言を載せる形式を採用している。

(50) レーニンの「国家と革命」が最初に米国に紹介されるのは雑誌『クラス・ストラグル』(*The Class Struggle*)一九一九年二月号においてである(ただし、第一章のみ)。なお、この中国語訳を担当した茅盾は「私は第一章を訳しただけで、マルクス主義の經典著作に關していくつも読んでいない自分が当時「国家と革命」を翻訳し、それもうまく訳すことは難しいということがわかった。それでその困難を知って退き、続けて翻訳はしなかった。」(茅盾「我走過的道路」上冊、一五四頁)と述べている。

また『共産党』第二号(一九二〇年二月)に翻訳紹介されたアメリカ共産党の党綱領、及び宣言は「コミニニスト」(シカゴ)一九二〇年六月号を参考にしたものであると考えられるが、これは正確には「共産党」統一派と「共産主義労働党」とが合同してできた「アメリカ統一共産党」の一九二〇年五月の綱領と宣言であった。

さらに付け加えれば、『共産党』第二号(一九二〇年二月)所収の「共産党國際連盟對美国I.W.W.的懇請」(コミンテルンからI.W.W.へのアピール)の原文は「ソリタリティー」(*The Solidarity*)一九二〇年八月一日号に掲載されたものである(Theodore Draper, *The Roots of American Communism*, (1963), pp. 435) が、翻訳は「ワン・ビッグ・ユニオン・メンスリー」(*The One Big Union Monthly*)一九二〇年九月号から行われていると考えられる。いずれにせよ当時の上海共産主義グループがアメリカ共産主義党派の雑誌(それもヴォイチンスキー来華以降に刊行されているもの)を相当参考にしていたことが十分にうかがわれる。

- (51) 陳独秀「談政治」(『新青年』八卷一号、一九二〇年九月)。
- (52) 陳独秀「社会主義批評(在広州公立法政学校演講)」(『新青年』九卷三号、一九二一年七月)。講演そのものは一九二一年一月一六日におこなわれた(『広東群報』一九二一年一月一七日)。
- (53) 李達「中国共産党的發起和第一次、第二次代表大会經過的回憶」(『一大前後』二、六頁)、同「李達自伝」(『党史研究資料』二、四川人民出版社、一九八一年、一頁)。
- (54) 『上海救国日報』のカラハン宣言に対する社説(『對於俄羅斯勞農政府通告的世論』、『新青年』七卷六号、一九二〇年五月、所収)。
- (55) 「杭州学生聯合会」のカラハン宣言に対する答覆文、(『對於俄羅斯勞農政府通告的世論』、『新青年』七卷六号、一九二〇年五月、所収)。
- (56) 戴季陶「俄國勞農政府通告的真義」(『星期評論』四五号、一九二〇年四月一日)。

第三章

- (1) 肖勁光「赴蘇學習前後」(『革命史資料』三、一九八一年)六頁。
- (2) 「駐赤塔赤色職工國際代表IO・J・斯穆爾斯基的信件」(中国社会科学現代史研究室、中国革命博物館党史研究室選編『一大前後』中国共産党第一次代表大会前後資料選編』三、人民出版社、一九八四年、四七頁)。
- (3) 李達「中国共産党的發起和第一次、第二次代表大会經過的回憶」(『一大前後』二、一〇頁)。
- (4) 一全大会で採択された「綱領」と「決議」は、前掲『中共中央文件選集』第一冊、三一九頁、を参照。
- (5) 中共一全大会の参加者の回想は『一大前後』二、を参照のこと。
- (6) 前掲『我的回憶』(一)、一四二頁。
- (7) 「中国共産党第一次代表大会」(中央檔案館編『中国共産党第一次代表大会檔案資料』人民出版社、一九八二年、七頁)、包惠僧「共産党第一次全国代表会議前後的回憶」(『一大前後』二、三一七頁)、李達

- 「中国共産党的發起和第一次、第二次代表大会經過的回憶」(『一大前後』二、一一頁)、「董必武給何叔衡的信」(『中共党史資料』第三輯、中共中央党校出版社、一九八二年、一一二頁)。
- (8) 包惠僧「中国共産党第一次代表大会の幾個問題」(『一大前後』二、三七六頁)、「中国共産党第一次代表大会」(『中国共産党第一次代表大会檔案資料』七頁)、「董必武給何叔衡的信」(『中共党史資料』第三輯、一一二頁)、前掲『我的回憶』(一)、一四〇頁。
- (9) 「中国共産党第一次代表大会」(『中国共産党第一次代表大会檔案資料』八一九頁)。
- (10) 劉仁静が一全大会での綱領の起草に加わったことは張國燾、董必武の回想に見える。それぞれ、『我的回憶』(一)一四〇頁、及び「董必武談中国共産党第一次全国大会和湖北共產主義小組」(『一大前後』二、三六七頁)。
- (11) 包惠僧「共産党第一次全国代表会議前後的回憶」(『一大前後』二、三二七頁)、劉仁静「回憶我在北大馬克思學說研究會的情況」(『党史研究資料』一、六四頁)。
- (12) 劉仁静「回憶我在北大馬克思學說研究會的情況」(『党史研究資料』一、六四—六五頁)。
- (13) 包惠僧「共産党第一次全国代表会議前後的回憶」(『一大前後』二、三二—三三頁)。
- (14) 前掲『我的回憶』(一)、一三六頁。
- (15) 劉仁静「回憶党的一二」(『一大前後』二、二二三頁)。
- (16) マルクス「ゴータ綱領批判」の中国語訳が出るのは一九二二年五月で、雑誌『今日』一卷四号に熊得山訳「哥達綱領批評」が発表されるのが最初であるという(前掲「馬克思恩格斯著作在中国的傳播」三七頁)が、前述の山川均が『新青年』に寄稿した「科学の社会主義から行動の社会主義へ」が「ゴータ綱領批判」から「プロレタリア独裁」に関する部分を引用している。
- (17) 李漢俊訳「馬格斯資本論入門」訳者序。

- (18) 李漢俊訳『馬格斯資本論入門』訳者序。
- (19) 李漢俊「研究馬克思學說の必要及我們現在入手の方法」(『民国日報』「覺悟」一九二二年六月六日)。
- (20) 吳友文、田野「陳翰笙事略」(『中共党史資料』第三五輯、一九九〇年、中共党史資料出版社)。
- (21) 陳独秀「馬克思的兩大精神」(『廣東群報』一九二二年五月二三日)。
- (22) 惲代英「怎樣研究社会科学」(『中國青年』第三期、一九二四年三月二三日)。
- (23) 李立三「党史報告」一九三〇年二月一日(中央檔案館編『中共党史報告選編』中共中央黨校出版社、一九八二年、二二四頁)。
- (24) 蔡和森「馬克思學說與中國無產階級」(『新青年』九卷四号、一九二一年八月)。

結 語

- (1) 朱務善「本校二五周年紀念日之民意測量」(『北京大學日刊』一九二四年三月四—七日)。
- (2) これら論戦に関しては蔡国裕「一九二〇年代初期中国社会主义論戦」(台湾商務印書館、一九八八年)を参照。
- (3) E. H. Carr, 1917: *Before and After*, (1969) pp. 8-9. [邦訳: 南塚信吾訳『ロシア革命の考察』みすず書房、一九六九年、一六一—一七頁]。
- (4) Alvin W. Gouldner, *The Future of Intellectuals and the Rise of the New Class*, (1979) [邦訳: アルヴィン・W・グールドナー著、原田達訳『知の資本論』新曜社、一九八八年、一八四—一八五頁]。
- (5) 前掲『ロシア革命の考察』一六一—一七頁。
- (6) 宋鏡明「李達伝記」(湖北人民出版社、一九八六年)七〇—七一頁、及び鄧明以「陳望道」(中共党史人物研究会編『中共党史人物伝』第二五卷、陝西人民出版社、一九八五年)三二二—三二三頁。
- (7) 陳紹康、駱美玲、田子渝「李漢俊」(『中共党史人物伝』第一一巻、

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

- (8) 陝西人民出版社、一九八三年)一三三頁、及び包惠僧『包惠僧回憶錄』(人民出版社、一九八三年)九頁。
- (9) 李達が自己の離党の原因に関し、マルクス主義研究を深めようとしていたかれに対し、党内には「マルクスのごとき実行家が必要なのであって、マルクスのような理論家は必要ない」という「警句」が存在し、また「研究系(社会学説を研究することを指して言うもの)」というレッテルを貼られた」と述べる状況があったことは、党内で理論の質の転換があったことを如実に物語っている(前掲『李達伝記』六九頁)。

『馬格斯資本論入門』序

這書是由日本遠藤無水所訳馬格斯資本論重訳の。原著叫作『Shop Talks on Economics』係万国社会党評論連合編輯者、米里・伊・馬爾西(Mary E. Marcy)所著。內容是將馬格斯經濟學說底骨子即商品、價值、價格、剩餘價值、以及資本和勞動底關係、用很通俗的方法說明了出來的。將馬克斯經濟學說、說得這樣平易又說得這樣得要領的在西洋書籍中也要以這本書為第一。

要講馬格斯社會主義以及於要曉得馬格斯社會主義的人、都非把馬格斯社會主義三經典(馬格斯、因格爾斯合著共產黨宣言『Communist Manifesto』、因格爾斯所著空想的科學的社會主義『Socialism, Utopian to Scientific』、及馬格斯底大著資本論『Das Kapital』)の資本論拿來詳細細讀一讀不可。但是這資本論裏面的材料理論都太複雜、不是腦筋稍微鈍的人所能了解。

所以考茨基就著了一本解釋書(書名叫作 Marx' Oekonomische Lehren)、但是這個解釋書又非有普通經濟學智識者以及青年學生所能容易了解。這本馬格斯資本論入門就可以算是資本論底解釋之解釋書。

以中國現在智識階級底程度、資本論底中國訳本暫時未必就能出現；但考茨基底資本論解釋書已經有戴君季陶以馬克斯資本論解釋的題名、訳了五分之四登在建設(自第一卷第四号起)不久又要以單行本出現、想讀者諸君不久就可以看得見的。無論諸君是看外國文是看訳本、又無論諸君是先看了馬克斯資本論解釋再看資本論或直接就看資本論、諸君都非先把這本書底原本或訳本拿來讀一讀不可。

照本書原來的書名、本來應該叫作「經濟漫談」、但鄙人考其內容、審其作用、以為莫過於叫作「馬格斯資本論入門」、所以就取了這個名稱。本書內容雖然很平易、但還不免有點抽象之處、非略有經濟學常識者不能了解、所以鄙人在認為讀者諸君非費點思索不能了解的地方、又略略加了點註解。讀者諸君如能於看了此書之後、再看看馬格斯所著價值、價格及利潤(Value, Price and Profit)、那就更好了。這本書是一八六五年六月馬格斯在万国勞動者同盟作的講演、馬格斯經濟學說底全体都發露在裏面。讀者諸君如果看了這本書、諸君在本馬格斯資本論入門所得的觀念必定更要明顯起來、就是再看資本論也要少費許多困難的思索。鄙人現在着手這本書底繕訳、大約不久就可以出版。

一九二〇年九月 漢 俊 識

(奧付：一九二〇年九月出版——社會主義研究社小叢書第二種)

付録 中国社会主义関連書籍解題（一九一九—一九三三年）

本稿は、中国において一九一九年一月から一九三三年二月までに刊行された社会主義に関連する単行本（叢書の形で刊行されたものを含む）の改題である。これまで、五四時期—国民革命時期に刊行された社会主義関連の書籍に関しては、マルクス、エンゲルス、

レーニンの著作をのぞき、網羅的な解題はほとんど作られていない。

唯一、張静廬「第一次国内革命戦争時期出版物簡目——一九二一—一九二七年——」（『中国現代出版史料』甲編、中華書局、一九五四年所収）があるが、一部の書籍に関して著者、訳者、刊行時期、出版社等を記しているに過ぎず、今となつては疎漏覆い難いものといわざるを得ない。

このため往々にして、実際に刊行されていない書籍が回想録や研究論文において登場し、当時の社会主義思潮の具体的状況を考察する上で少なからぬ混乱を生じさせることがあった。本稿は出来るだけ正確に当時の出版状況を把握することを目的としている。当然、可能なかぎり中国、および日本の図書館、資料館を利用し、現物の確認に基づいて作成したが、中にはどうしても現物を確認することができなかったため、目録、図書カードに依拠したものも含まれている。その場合にも、できるだけ当時の雑誌、新聞等によりながら、確実に刊行されたことを確認した。またこの時期の社会主義

関連書籍の多くが翻訳であることに鑑み、原著、あるいは重訳の際のものとのテキストを確定することに意を注いだ。

【本稿で扱う書籍の分野について】

一口に社会主義関連書籍といっても、それに付随する労働問題、社会問題、女性問題、ロシア革命、コミンテルンといった関連書も多く、すべてにわたつて考察を加えることは現実的に不可能であるため、本稿では扱う書籍の範囲を、マルクス主義（当然にマルクス、エンゲルス以外の著書、およびそれへの反対論も含む）を中心とし、その見地から書かれた労働問題、女性問題、ロシア革命等の書籍に限定した。残念ながら、同じく当時の流行思潮の一翼を担ったギルド社会主義、協同組合（合作社）主義、無政府主義等の書籍に関しては、考察を別の機会に譲らざるを得なかった。

【本稿で扱う書籍の期間について】

考察の期間を一九一九—一九三三年と限定したのは、ひとつには個人的になしうる作業の限界による。また、一九一九年が辛亥革命前とならぶ社会主義思潮流行の年であったこと、そして一九二四年一月に国共合作の象徴ともいふべき国民党一大大会が開催され、以

後共產黨員の活動の焦点が社会主義學說の學習、紹介から、實際の政治活動に移っていく傾向が見受けられることによる。つまり、一九一九年に始まった社会主義の紹介、伝播が、一九二四年以降、国民革命を主眼とする政治運動に転化していったと考えられるからである。

【説 明】

本稿では、中国国内（香港を含む）で刊行された、あるいは刊行されたと称される書籍を、Ⅰ（実際に刊行されたことが確認できるもの）、Ⅱ（一九二三年以前に刊行されているが、刊行の詳細時期が確定できないもの）、Ⅲ（刊行されたと見なされているが、実際には刊行されていないもの）の三つに分けて記述した。

凡例

- 1 Ⅰの実際に刊行されたものについては配列は刊行時期順である。
- 2 書名を見出し項目とし、その下に著者、訳者、出版社、刊行年月、版型、頁数、定価を該書、および関連資料等によってわかるかぎり記した。

- 3 目録本の所蔵場所を解題文頭に掲げた（近代所Ⅱ中国社会科学院近代史研究所、人文研Ⅱ京都大学人文科学研究所、歴史所Ⅱ中国社会科学院歴史研究所、等の略称を用いている）。

- 4 参考文献として頻繁に利用するものに関しては文中において、

- 5 《》にくくって略称を用い、文末に参考文献略称一覧を付した。原著がロシア語の場合は英語をもちいて表記した。

Ⅰ 実際に刊行されたことが確認できるもの

『社会主義平議』 南海譚荔恒、香港劉鑄伯合著 東興毛澄宇、南海潘孔言同校 香港華商總會報社 一九一九年八月 三二開本 二六頁

近代所所蔵。著者譚荔恒、劉鑄伯の経歴は未詳であるが、孔教の立場よりする社会主義糾弾の姿勢が貫かれている。「平議」と銘打っているが、社会主義の特色を「共產妻、殺人」とし、「社会主義之流毒且千万倍於楊墨仏老」としてこれを攻撃する内容である。世界思潮としての社会主義というイメージとはまったく別の、儒教的観点に支えられた社会主義イメージがこの時期の中国に同時に存在しており、華商總會という商会によって反社会主義宣伝がとくに開始されていることは興味深い。

『総合研究各国社会思潮』 邵飄萍主編 泰東圖書局 一九二〇年四月

《邵伝略》一七五頁によれば、商務印書館から刊行されているといい、また胡培兆、林圃『《資本論》在中国的伝播』（山東人民

出版社、一九八五年）一〇六頁でも、一九一九年に商務印書館より刊行されたと記されている。しかし、雑誌『評論之評論』創刊号（一九二〇月二月）の広告によれば、泰東圖書局の発行になつており、『商務圖書目録』にも刊行されたい記載はまったくなく、発行元は商務印書館ではなく泰東圖書局とみられる。刊行時期については、『邵伝略』に従う。邵飄萍は五四運動当時、北京の新聞『京報』の主幹であつたが、一九一九年八月に過激言論をもつて発行停止処分を受けたため、北京を逃れ、同年冬より『大阪朝日新聞』の招請をうけて嘱託として日本に滞在していた。『民国人物伝』第一巻、三三七頁によれば、『新俄国之研究』（泰東圖書局）とともに一九二〇年の脱稿というから、日本滞在中に執筆したものと考えられる。後述の『新俄国之研究』と同様に、日本滞在中に広く渉獵した海外思潮の動向、とりわけ社会主義運動、労働運動の状況を翻訳、紹介したものであろう。『邵伝略』七四―八二頁によれば、ロシア革命およびその指導者（レーニン、スターリン）に関する記述があるという。

『社会主義與中国』 馮自由著 社会主義研究所 一九二〇年四月
一四開本 六七頁 二角五分

近代所所蔵。本書は、第一章 中国社会主義之過去及将来、第二章 従社会主義解決中国之政治問題、第三章 中国社会主義宣伝方法、の三章からなる。中国における社会主義思想（民生主義を

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

含む）の伝播史を振り返つたものであるが、社会主義学説の簡単な紹介もなされている。発行元の「社会主義研究所」については未詳。

『労働政府與中国』 張冥飛輯訳 漢口新文化共進社 一九二〇年
六月 三二開本 一七二頁 五角

京大法学部図書館所蔵（一九二一年一月再版の第四刷、一九二七年三月）。『北図目録』一一四頁では、一九二〇年六月に漢口新文化共進社刊とあり。『民国日報』一九二〇年九月一〇日の広告によれば、泰東圖書局の発行で五角とあり、泰東圖書局からも同じものが刊行されていたらしい。著訳者である張冥飛は、『中国晚報』の一九二三年時点での主筆。『中国晚報』は上海で発行され、国民党に多少関係があると言われている（小関信行「五四時期のジャーナリズム」、『五四運動の研究』第三函一一、同朋舎、一九八五年、八八頁）。ロシア革命関係の文書（法令、布告）の翻訳を多数収録しており、この時期にまとまつた形で出されたソビエト政権に関する資料集としては出色のものである。『文化書社取扱い書籍』にはいつており、八〇部の引き合いがあつた。

『労働問題概論』 馮飛訳述 華星印書社 一九二〇年七月 三二
開本 七八頁 三角

近代所所蔵。「世界改造叢書」として刊行されている。本書の

「世界改造叢書」広告によれば、該叢書は「馮飛、鄭摩漢、何海鳴」の三人が編集していたものだが、訳者馮飛の経歴等は未詳である。原著は、高島素之一派の出した実務指導のパンフレット、売文社編「労働問題叢書」のうちの『現時の労働問題概論』（一九一九年二月頃）であり、その直訳である。本書は労働組合運動をしていく活動家のためのハンドブックといったものである。

『貧乏論』 河上肇著 止止（李鳳亭）訳述 泰東図書局 一九二〇年七月 五四頁 二角

『新人』一卷六号（一九二〇年九月）の広告に「新人叢書」の第一冊として七月二〇日に出版されたとの記載あり。一海知義「河上肇と中国の革命家たち」（『中国研究』一〇一号、一九七七年五月）にも、「新人叢書」の第一種として一九二〇年七月に刊行されたとある。原著は日本のベストセラー、河上肇『貧乏物語』（一九一七年三月）であるが、『新人』一卷六号の「新人杜消息」によれば、訳者「止止君」によって削除された部分が多くあるというから抄訳であろう。《叢書目録》八七四頁によれば、第三版が李鳳亭訳とあり、止止君とは李鳳亭のことであると推測できる。李鳳亭の名前は、新人月刊社に批評の書簡を送ってきた人物の中に見える（「新人月刊社消息」「新人」一卷二期）が、経歴等は未詳。《文化書社取扱い書籍》にも「非叢書」扱いで掲載されている。

『新俄国之研究』 邵飄萍著 日本・東瀛編訳社（大阪南区） 一九二〇年八月 三二開本 九四頁＋付録四六頁 四角

歴史所蔵。大阪南区の東瀛編訳社の詳細は不明であるが、巻末には泰東図書局の広告を付していること、『評論之評論』創刊号（一九二〇月二月）の広告でも、泰東図書局の発行とあること、および《全国総書目》でも泰東図書局刊とあることからして、泰東が販売を担当したものと考えられる。『民国日報』一九二〇年九月一〇日の近著広告の書名は「俄国之研究」になっている。

呂芳上『革命之再起』（中央研究院近代史研究所專刊 五七、一九八九年）二七五頁によれば、前掲の『労働政府與中国』とともに、一九二〇年九月に泰東図書局より出版されたというが、根拠は不明。邵飄萍の経歴に関しては、『総合研究各国社会思想』の項を参照。《民国人物伝》一卷、三三七頁によれば、一九二〇年の脱稿とあり、邵飄萍の日本滞在時期の執筆であろうと考えられる。主に邵が日本で収集したロシア革命に関する記事の翻訳からなるが、巻末に「列寧與紐約世界報特派員林康阿耶談話」と「美国派使勃烈脱（William C. Bullitt）之報告」を付録としてつけている。付録部分は「嘉定吳定九」が翻訳している。《文化書社取扱い書籍》であり、八〇部の引き合いがあったという。

『共産党宣言』 馬格斯、安格爾斯著 陳望道訳 社会主義研究社 一九二〇年八月 三二開本 五六頁 一角

北京図書館所蔵。伍仕豪「陳望道翻訳的『共産党宣言』初版時間略考」(『党史資料叢刊』[上海]一九八一年第一輯)の考証では、初版は一九二〇年八月である。原著はMarx & Engels, *Communist Manifesto*であり、中国史上最初のマルクス、エンゲルス著作の完訳書である。翻訳に際しては、戴季陶の提供した日本語版と、陳独秀が北京大学から取り寄せた英語版とを参照しながら翻訳したとされる(『馬恩著作伝播』一四頁)が、翻訳者の陳望道自身は「關於上海馬克思主義研究会活動的回憶」(『復旦學報(社会科学)』一九八〇年三期)で、日本語版から翻訳し、その本は戴季陶が提供したと語っている。陳望道が翻訳するにあたって依拠した日本語版テキストの考証は本稿三七八頁参照。一九二一年に人民出版社の「馬克思全書」の第一種として重印された時には、「陳佛突訳」になっているという(『馬恩著作伝播』二六二頁)。「中国青年」二四号の「一個馬克思學說的書目」でも参考図書として挙げられており、北京大学の《マルクス學說研究会蔵書》目録にはいっている。

『科学的社会主義』 恩格児著 鄭次川編訳 王岫廬校訂 群益書社 一九二〇年八月 三二開本 六〇頁 二角

《綜録》三二九頁によれば、「公民叢書」として刊行され、「エンゲルス伝」を付録として収録しているという。原著はEngels, *Socialism: Utopian and Scientific*であるが、『馬恩著作伝播』二六

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

九頁によれば、同書第三節(第三章)のみの訳で誤訳が甚だ多い、という。翻訳は、書名が酷似していること、「エンゲルス伝」を附していること、そして第三章のみの翻訳であることからして、遠藤無水訳『科学的社会主義』(カウツキーの「エンゲルス伝」を付す、一九二〇年一月——これも原著の第三章のみの抄訳)を参考に行っていることはまちがいない。エンゲルス『空想より科学へ——社会主義の發展』はこれ以前にも、衡石重訳「科学的社会主義」(『民国日報』「觉悟」一九二〇年一月五日―八日、同じく第三章のみ)が出ていたが、こちらは堺利彦訳「科学的社会主義」(『社会主義研究』四号、一九〇六年七月)からの翻訳であり、本書とは直接の関係はないとみられる。

『馬克斯經濟學說』 柯祖基著 陳溥賢訳 商務印書館 一九二〇年九月 三二開本 三九八頁 九角

近代所蔵。「共学社叢書／馬克思研究叢書」として刊行されている。訳者の陳溥賢については本稿第一章参照。原著はKautsky, *Karl Marx' Oekonomische Lehren*であるが、翻訳は高島素之訳『マルクス資本論解説』(一九一九年五月)からの重訳である。同書は当時、マルクス『資本論』第一巻のもっとも的確な紹介書と呼ばれた名著であった。中国語訳は、もともと『晨报』の副刊に一九一九年六月二日から十一月一日まで連載された(題名は「馬氏資本論釈義」、淵泉訳)ものに手を加えて単行本

として刊行されたものである。陳溥賢は刊行に際して、日本語版で削除された箇所を補うべく、高島に該当箇所の日本語訳を送ってくれるよう依頼したというが、返事はなかったらしい。『東方雜誌』一七卷一四号（一九二〇年七月）の近刊広告に拠れば共学社より馬克思主義研究叢書として、淵泉訳注の『資本論解説』が近日刊行とある。当初は日本語題名を踏襲した『資本論解説』として刊行予定であつたらしい。カウツキーの同書は、戴季陶によつても『建設』誌上に「馬克斯資本論解説」として連載（一九一九年一月より、ただし未完）されているが、それも高島訳からの重訳である（『資本論解説』の項参照）。《文化書社取扱い書籍》にあげられており、『中国青年』二四号の「一個馬克思學說的書目」でも参考図書として挙げられている。《李漢俊推薦本》でもあるところから見ると相当に読まれたものらしい。また、李達訳の同名書があるとされているが、誤りである（Ⅲの『馬克思經濟學說』の項参照）。

『馬格斯資本論入門』 馬爾西著 李漢俊訳 社会主義研究社 一九二〇年九月 三三開本 五四頁 一角

中共一大会址紀念館所蔵。「社会主義研究小叢書」の第二冊として刊行されている。原著はMary E. Marcy, *Shop Talks on Economics* であるが、翻訳は遠藤無水訳『通俗マルクス資本論 附マルクス傳』（欧米社会主義研究叢書第一編、一九一九年一月）

からの重訳である。同書は、日本では遠藤訳のほかに岡野辰之介訳（『マルクス主義と労働者』）と島田保太郎訳（『社会主義經濟學入門』）がほぼ同時に出版されるほどではやされたものだった。原著は正確に言えば『資本論』の解説書ではなく、社会主義の平易な入門書である。中国でもこの本は広く読まれたようである。包惠僧や（回想録では「資本論浅説」と記す。《一大前後二》三一二頁）、張国燾（回想録では「馬克思資本論入門」と記す。張国燾『我的回憶』第一卷、明報月刊出版社、一九七一年、八五頁）、劉弄潮（一九二二年の時点で既に読んでいたという。『革命史資料』八、文史資料出版社、一九八二年、二〇八頁）らが読んだことを記している。また、『文化書社取扱い書籍』で最もよく売れた（二〇〇部）本の一つであつたし、『マルクス學說研究会藏書』でもあつた。後年、『中国青年』二四号の「一個馬克思學說的書目」でも参考図書として挙げられている。『北京大学日刊』一九二二年二月六日の出版部代售書籍目錄に見える『馬格斯資本論』や《人民出版廣告》に見える李漱石（漢俊）訳『資本論』とは、みなこれを指すと思われる。また同書は、北京の共產主義小組が『經濟學談話』という題で頒布したこともあると言われている（『北京共產主義組織的報告』、中共中央党史資料征集委員會編『共產主義小組』上、中共党史資料出版社、一九八七年、二二三頁）。《李漢俊推薦本》であつた。

『近世経済思想史論』 河上肇著 李培天訳 泰東図書館 一九二〇年九月 三三開本 二五八頁 五角

北京図書館所蔵。「學術研究会叢書」の第一冊として刊行されている。原著は、河上肇『近代経済思想史論』（一九二〇年三月）であり、アダムスミスからマルクス、エンゲルスに至る西洋経済学思想を解説したものであるが、『中国青年』二六号の施存統「略談研究社会科学」では、訳文が「理解できないほどひどい」と酷評されている。訳者の李培天は字子厚、雲南省賓川人、一八九五年生まれ、早年より日本に留学し、明治大学に学ぶ。『新人』一卷六号の広告によれば、かれは同じく「學術研究会叢書」として、エンゲルス『科学社会主義』の翻訳出版を予定していたが、そこらには実際には刊行されなかったと見られる。『近世経済思想史論』の広告が『新人』に掲載されているところからすると、「學術研究会」とは『新人』同人の研究会と思われる。李培天も同会の会員か。のち、『李漢俊推薦本』や、『中国青年』二四号の「一個馬克思学說的書目」で参考図書として挙げられることになる。

『社会主義史』上下 克卡樸著 李季訳 新青年社 一九二〇年一月 三三開本 六五〇頁 布面一元 紙面八角

人文研所蔵（影印本）。「新青年叢書」の第一種として刊行されている。《叢書目録》九一七頁によれば、一九二〇年一月に広州で出版されたことになっている。原著はT. Kirkup, *History of*

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

Socialismである。同書は空想的社会主義からマルクス主義に至る社会主義運動の歴史を概観したもので、日本でも堺利彦が雑誌『社会主義研究』第三号（一九〇六年五月）のなかで、この本によりながら欧州の社会主義を紹介している。訳者である李季は、上海共産主義小組のメンバー、一九二〇年前後には陳独秀との関係が密接で、主に英書から社会主義関係の著作の翻訳に従事していた。経歴は陳紹康編著『上海共産主義小組』（知識出版社、一九八八年）四八頁参照。自伝に『我的生平』（亜東図書館、一九三二年）がある。毛沢東が共産主義者となるにあたって影響を受けた三冊の本のひとつである。《文化書社取扱い書籍》でも、よく売れた本（一〇〇部）の一つであり、包惠僧もこの本を読んだと回想している（《一大前後》二二三頁）。《マルクス学說研究会藏書》でもあり、のちに『中国青年』二四号の「一個馬克思学說的書目」で参考図書として挙げられるにいたる。

『経済史観』 塞利格曼著 陳石孚訳 陶孟和校 商務印書館 一九二〇年一〇月 三三開本 一六七頁 五角

北京図書館所蔵。「世界叢書」として刊行されている。同書の注記によれば、原著はSeligman, *The Economic Interpretation of History*である。同書は歴史を経済の視点で解釈する点でマルクス主義に近いものであるが、「唯物史観」という呼称を嫌って「経済史観」なる見方を提示しているように、決してマルクス主

義の解説ではない。『中国青年』二六号の「略談研究社会科学」で、施存統が「多くの誤解曲解がある」と批判するように、ほぼ経済一元主義であった。中国語訳は一九二二年版の原書からの翻訳であり、その注記には各国（日、露、西、仏）での翻訳状況を記している。日本では、河上肇により『歴史の経済的説明 新史観』（一九〇五年）として刊行されている。『中国青年』二四号の「一個馬克思学說的書目」で参考図書として挙げられ、『李漢俊推薦本』でもある。

『社会主義總論』 鄭摩漢著 北京 又新日報社 一九二〇年一月 三三開本 九八頁

『北図目録』一三二頁によれば、又新日報社より「世界改造叢書」の第一巻第二冊として刊行されている。著者鄭摩漢は、本名鄭振翎、元同盟会会員で、当時外国留学からもどった直後であった（橋川時雄主編『中国文化界人物総鑑』）。北京で雑誌『今日』を中心に活動し、『時事新報』『学燈』欄に河上肇の論文を翻訳したりしている。本書の内容は未詳だが、「世界改造叢書」が訳書中心の叢書であることからみて、「著」とはいいながら実質的に訳書である可能性もある。世界改造叢書は「馮飛、鄭摩漢、何海鳴」の三人が編集していた叢書であり、華星印書社が刊行していたものだが、同叢書の馮飛訳述『労働問題概論』の巻末広告では『社会主義總論』も華星印書社の刊行となっている。又新日報社

と華星印書社の関係は不明。

『社会問題概観』上下 生田長江、本間久雄共著 周佛海訳 中華書局 一九二〇年二月 八角

『叢書目録』八九七頁によれば、「新文化叢書」として刊行されている。原著は生田長江、本間久雄著『社会問題十二講』（一九二〇年）である。内容は、フランス革命、産業革命と資本主義の形成、社会主義諸学説、労働組合、普通選挙、婦人問題を平易に概説したもの。周佛海は日本留学中に本書を翻訳し、原稿料一二〇元を得たという。『マルクス学説研究会蔵書』の周佛海訳『社会問題概説』とは、恐らくこれの誤記。また、包惠僧の回想にいう周佛海訳『社会問題概論』（『一大前後』三一九頁）も同様の誤記である。『文化書社取扱い書籍』で、よく売れた本（四〇部）の一つにあげられている。

『救貧叢談』 河上肇著 楊山木訳 商務印書館 一九二〇年二月 九六頁 二角五分

北京図書館所蔵。原著は日本のベストセラー、河上肇『貧乏物語』（一九一七年三月）であるが、一海知義『五四』時期の河上肇（『中国研究』一一〇号、一九八〇年三月）によれば、雑誌『学藝』二巻一号（一九二〇年四月）から二巻八号（一九二〇年十一月）にかけて連載された楊山木訳『救貧叢談』（抄訳）をま

とめて出版したものと見られる。『貧乏物語』の翻訳は、これより先、七月に李鳳亭訳『貧乏論』が出ている。〔『貧乏論』の項参照〕

『階級争闘』 柯祖基著 惲代英訳 新青年社 一九二一年一月

三二開本 一九八頁 五角

中共一大会址紀念館所蔵。「新青年叢書」の第八種として刊行されている。一九二〇年に、尚志学会叢書之一として翻訳されたという説もある（《出版史料》甲 七五頁）が、《叢書目録》の「尚志学会叢書」の項には出版されたという記述はなく、恐らくは誤り。原著は Kautsky, *Class Struggle [Erfurt Program]* であり、翻訳は英語版からなされていると見られる。惲代英が翻訳にあたった時期については、本稿第二章注四八参照。《マルクス学説研究会蔵書》であり、《李漢俊推薦本》でもある。毛沢東が共產主義者となるにあたって、影響をうけた三冊の本のひとつ。『中国青年』二四号の「一個馬克思學說的书目」でも参考図書として挙げられているし、劉弄潮も二一年春の時点で既に読んでいたという（前掲『革命史資料』八、二〇八頁）ことからして、当時相当広範に読まれたらしい。

『工団主義』 J・H・哈列著 李季訳 新青年社 一九二一年一

月 三二開本 一〇一頁 三角

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

中共一大会址紀念館所蔵。「新青年叢書」の第七種として刊行されている。原著は J. H. Harley, *Syndicalism* であり、翻訳は英語版からであろう。サンディカリスムに関する平明な入門書である。《マルクス学説研究会蔵書》でもあり、《文化書社取扱い書籍》では、六〇部の引き合いがあった。訳者の李季については、『社会主義史』の項参照。

『過激党真相』 孫範訳 泰東図書局 一九二二年三月 三二開本

八六頁 三角

近代所所蔵。『民国日報』（一九二二年六月一〇日）、『申報』（一九二二年二月二日）の広告に、「新人叢書」として既刊とある。原著は、雑誌 *The Round Table* に掲載された記事をまとめた The Macmillan Company, ed., *Bolshevik Aims and Ideals and Russia's Revolt against Bolshevism* であるが、日本語版の中目尚義訳述『過激派の本領』（一九二〇年五月）も参考になっているとみられる。訳者孫範の経歴等は未詳。本書は「ボルシェヴィキの運動」と「反ボルシェヴィキ運動」の二篇からなり、ボルシェヴィキの解説をなす一方、ボルシェヴィキを「革命的暴君政治とも言うべき一種の暴君政治であって、民主主義をまったく拒否し、思想と行動の一切の自由を拒否したもの」と断じている。また、コルチャックらの反革命運動に対しては、「かれらは国家を再び騒乱への道に陥らせることのないよう熱望している」としている。

反ボルシェヴィキ色の濃厚な解説書である。

『社会問題総覧』全三巻 高畠素之著 李達訳 中華書局 一九二一年四月 一元二角

『叢書目録』八九七頁によれば、「新文化叢書」として刊行されている。原著は、高畠素之編『社会問題総覧』（一九二〇年二月）である。当初は原著の章だてにしたがつて、劉正江訳『社会政策』、李達訳『社会主義』、正樹訳『労働組合』、正格訳『婦人問題』の四冊にわけて出版される予定であつたらしい（『解放與改造』二卷一三三号の広告）が、結局は李達ひとり訳となつた。本書は表題のとおり、社会問題に関する諸項目（社会政策、社会主義、労働組合、婦人問題）について、概論と各国の状況を通観したものである。とりわけ原著の「第二篇 社会主義」は平易な社会主義解説として、ほかにも抄訳されることが多かった。同書は商務印書館からも、盟西訳『社会問題詳解』という書名で出版されている。『中国青年』九号、一〇号の惲代英「研究社会問題発端」、「研究社会政策」によれば、翻訳の面では盟西訳の方がやや正確であるという。

『社会問題詳解』全三巻 高畠素之著 盟西訳 商務印書館 一九二一年四月 一元五角

『叢書目録』四一五頁によれば、「共学社叢書／社会叢書」と

して刊行されている。原著は高畠素之編『社会問題総覧』（一九二〇年二月）である。『中国青年』九号、一〇号の惲代英「研究社会問題発端」、「研究社会政策」によれば、前項の李達訳『社会問題総覧』にくらべて、翻訳の面では盟西訳の方がやや正確であるという。《マルクス学説研究会蔵書》に、李季訳『社会問題詳解』という書名が見えるが、盟西訳の誤記と思われる。原著については『社会問題総覧』の項を参照。

『労働総同盟（之）研究』 山川均著 鄒敬芳（錦芳）訳述 泰東図書局 一九二一年五月 三二開本 一一八頁 四角

近代所蔵。「新人叢書」として刊行されている。原著は山川均「フランス労働総同盟（CGT）の研究」、『改造』一九二〇年四月号、五月号）である。内容はフランスの労働総同盟（CGT）の歴史、組織、現勢の研究からなるが、山川は、Pouget, Pawlowsky, Levine, Louis, Cole, Pelloutier, Esteyら諸者を参考にしてゐる。毛沢東らの文化書社では、一九二二年五月に取扱い書目に掲載されており、価格は三角二分（『新民学会資料』二六六頁）。『新人』一卷七、八号（一九二二年一月）の新人社消息によれば、『労働同盟研究』を新人叢書として泰東図書局より出版したとあるが、実際の刊行がそれ以前であつたか、『新人』の発行がおくれていたと考えられる。『民国日報』（一九二二年六月一〇日）の広告によれば「鄒錦芳訳」であるという。

『唯物史観解説』 郭泰著 李達訳 中華書局 一九二一年五月

三二開本 一四二頁 四角

人文研所蔵(影印本)。「新文化叢書」として刊行されている。

原著は H. Gorter, *Historischer Materialismus* であるが、翻訳は日本語版の堺利彦訳『唯物史観解説』(一九二〇年一月)から行われている。当時におけるマルクス主義の数少ない体系的解説書で、堺利彦の序文によれば「数年前まで類書中に殆んど唯一の通俗書と目されてゐた」ものであった。李達の訳者自序によれば、翻訳には日本語版のほかに、李漢俊の協力を得て独語版も参考にしたという。またカウツキーの『倫理與唯物史観』(堺利彦の日本語版あり)とあわせて読むよう勧めている。《李漢俊推薦本》であり、『中国青年』二四号の「一個馬克思學說的書目」でも参考図書として挙げられている。同名書の近刊予告が『東方雜誌』一七卷一四号(一九二〇年七月)に掲載されている(郭泰著、淵泉訳『唯物史観解説』)が、こちらの方は広告だけで、実際には刊行されなかったと見られる。(Ⅲの『唯物史観釈義』の項参照)

『布爾什維主義底心理』 J・施罷戈著 陳国渠訳 商務印書館
一九二一年五月 一四九頁 四角五分

《叢書目錄》四一四頁によれば、「共学社叢書／時代叢書」として刊行されている。原著は J. Spargo, *The Psychology of Bolshevism* であるが、翻訳は日本語版の浅野護訳『過激主義の心

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

理』(一九二〇年五月)からなされていると思われる。訳者陳国渠は、広東省東莞人、北京大学の学生で『国民』雑誌社の同人。同誌に山川均の論文を翻訳紹介している。原著者のスパーゴは基本的にマルクス主義の立場に立ち、社会の社会主義化を高唱しながらも、ボルシェヴィキを「マルクスの真髄を去勢した幽霊」にして、「病的精神の所有者、理性の伴わない一種のヒステリーである」と批判している。

『共産主義與智識階級』 田誠著 一九二一年六月 漢口 一〇頁
三二開本 銅元一枚

中共一大会址紀念館所蔵。出版社、発行元は記されていない。表紙に記されている英語表題は *The Communism and Intellectual Class* であるが、翻訳ではなく、中国の知識人にたいしロシア知識人のように科学的社会主義への信念を強め、社会主義運動へ参加するよう呼びかけるパンフレットである。上海革命歴史博物館編『上海革命史研究資料』(上海三聯書店、一九九一年)に翻刻掲載されている。同書に収められている任武雄「介紹建党時期的《共産主義與知識階級》」は、田誠を陳独秀の別名と推定している。

『婦女之過去與将来』 山川菊栄著 李漢俊編訳 商務印書館 一
九二一年七月 三二開本 二〇六頁 六角

四二一

『婦女雜誌』七卷一〇号（一九二一年一〇月）の「介紹新書」欄に「新智識叢書」の第二三種として既刊とあり、同七卷一一号（一九二一年一月）の商務印書館新書目録にも記載がある。新書目録に掲載されているほかの書籍と照らし合わせると、奥付は一九二二年七月刊行であるが、実際の刊行が一九二二年一〇月頃にずれ込んだものと見られる。『叢書目録』九二五頁に、一九二二年四月に再版とあり。原著は、山川菊栄『婦人の勝利』（一九一九年六月）である。全五章（一章 緒論、二章 原始社会の男女関係、三章 文明社会の男女関係を論ず、四章 近代女子運動を論ず、五章 結論）からなり、ほぼ完訳であろうと思われる。原著の自序によれば、山川菊栄はこの書を執筆するにあたって、堺利彦『男女関係の進化』、ペーベル『過去、現在、及将来の婦人』、ゴリカン『原始社会に於ける婦人の地位』、シルマツヘル『近代女権運動論』を多く参照したという。

『蘇維埃研究』 山川均著 王文俊訳 北京知新書社 一九二二年八月 六六頁

『叢書目録』八九八頁によれば、「新文化運動叢書」として刊行されている。訳者王文俊は経歴等未詳。原著が山川均、山川菊栄共著『労農露西亞の研究』（一九二二年九月）だとすると時期的にも、分量的にも合わない。恐らくは、山川の雑誌掲載論文（例えば、山川均『ソヴェエトの研究』『改造』一九二一年五月

号——のち『労農露西亞の研究』に収録）からの翻訳と見られる。山川の論文は、革命後のロシア事情についての正確な研究としては、日本ではほとんど唯一のものであった。山川均のソビエト研究は、李達によっても翻訳されている。（『労農俄国研究』の項参照）

『工錢労働與資本』 馬克思著 袁讓訳 人民出版社 一九二一年二月 三二開本 五四頁 一角八分

中共一大会址紀念館所蔵。「馬克思全書」として刊行されている。人民出版社は実際は上海におかれたが、官憲の目をあざむくために広州発行を掲げたという（『一大前後』一四頁）。訳者の袁讓は経歴等未詳。原著は Marx, *Lohnarbeit und Kapital* である。中国語訳は一八九一年のドイツ語版、および一九〇二年の英語版をもとにしているという（『綜録』一五九頁）。『王凌雲』では王湘訳（初版年月は同じ）になっており、『人民出版社廣告』によれば袁湘訳になっているが、ともに同一人物の別名であると思われる。『陳独秀のコミンテルン宛報告』では、人民出版社の刊行物は各々三千部発行されたという。馬馥塘の回想に、済南の「マルクス学説研究会」で『工錢労働與価値』を読んだとある（『一大前後』四〇〇—四〇一頁）が、本書のことを指すと見られる。また、夏之栩は一九二二年夏頃、武漢で李漢俊の指導のもとでこの本を読んだが、よく理解できなかったと語っている（『革命史

資料』一四、文史資料出版社、一九八五年、一七八頁）。《マルクス学説研究会蔵書》にもはいつており、『中国青年』二四号の「一個馬克思学説的書目」で参考図書として挙げられているところからみると、相当広範に読まれたものと見られる。《李漢俊推薦本》でもある。

『労働会之建設』 列寧著 李立訳 人民出版社 一九二二年二月 三三開本 一角六分

中共一大会址紀念館所蔵。「列寧全書」として刊行されている。原著は Lenin, *The Immediate Problems of the Soviet Government* (*Soviet at Work*) (「ソビエト政権の当面の問題」)「蘇維埃政權の当前任務」であるが、翻訳は日本語版である山川均、山川菊栄共訳『労働革命の建設的方面』(一九二一年九月)と何らかの關係を有する可能性がある。《陳独秀のコミンテルン宛報告》では *Soviet at Work* という題になっている。訳者李立は未詳だが、人民出版社の主編である李達の名ではないかと思われる。《マルクス学説研究会蔵書》である。なお *Soviet at Work* はこれより先一九二〇年三月に『解放與改造』二卷六号誌上で、金侶琴訳(金侶琴は金国宝の筆名、当時復旦大学学生)「建設中的蘇維埃」として翻訳されている。

『討論進行計画書』 列寧著 成則人訳 人民出版社 一九二二年

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

二月 三三開本 三三頁 一角

北京図書館所蔵。「列寧全書」として刊行されている。《北図目錄》三〇頁によれば、レーニンの「論策略書」「論無産階級在这次革命中的任務」(Lenin, *Letters on Tactics, Towards Soviet, idem On the Task of the Proletariat in the Revolution*)を翻訳したものであるという。《人民出版社廣告》によれば、一九二一年九月の時点で既刊ということになるが、人民出版社刊行の書籍は実際には一九二一年年末から刊行されているので、『新青年』の発行が遅れていたであろう。訳者成則人とは沈沢民(沈雁冰)茅盾の実弟)である。《マルクス学説研究会蔵書》となっている。

『共産党底計画』 布哈林著 太柳訳 人民出版社 一九二一年二月 三三開本 一一八頁 三角

《叢書目錄》八五三頁によれば、「康民尼斯特叢書」の第一種として刊行されている。原著は、Bukharin, *The Program of the Communists* (*Bolsheviks*) であろう。訳者太柳は張太雷の別名か(待考)。『広東群報』一九二二年三月二日の「人民出版社通告」欄に、目次が掲げられており、それによれば資本主義の弊害、共産主義社会への道、およびその青写真を示す内容からなる。《マルクス学説研究会蔵書》では『共産党底計画』、政治理想、社会結構学(太柳訳)という書名になっており、『人民出版社廣告』および『王凌雲』によれば、張空明訳『共産党計画』という訳者、書

名になっている。さまざまな形で刊行されていたことがうかがわれる。また、『中国青年』二四号の「一個馬克思學說的書目」でも参考図書として挙げられている。

『李ト克内西紀念』 李特等編訳 パンフレット 人民出版社 一九二二年一月 三二開本 四四頁

《北図目録》五〇九頁に刊行の記載あり。《陳独秀のコミンテルン宛報告》によれば、一九二二年一月一五日に、全国のカール・リープクネヒト記念会で「リープクネヒト伝、ルクセンブルグ伝、スバルタクス団宣言」を掲載するパンフレット五千部を配布したとあり、おそらくこのパンフレットを指すものだろう。李特は李達の筆名。『先駆』も一九二二年一月一五日の創刊号に「里布克奈西特紀念号」副刊をつけており、また同日の『民国日報』「覚悟」も、李特「李ト克内西伝」を掲載しており、このパンフレットと類似のものとみられる。山川菊栄『リープクネヒトとルクセンブルグ』（水曜会パンフレット、一九二一年一月）を参考にしたものではないかと想像される。

『社会経済叢刊』 施存統編訳 泰東図書局 一九二二年一月 三二開本 頁数不連 三角

上海図書館所蔵。「黎明学会叢書」として刊行されている。日本語の社会主義関連論文の翻訳、合編であり、北沢新次郎「労働

者問題」、河上肇「社会主義の進化」、「共産党宣言に見はれたる唯物史観」、売文社編「労働経済論」、山川均「カウツキーの労働政治反対論」を収める。『中国青年』二四号の「一個馬克思學說的書目」で参考図書として挙げられている。

『馬克思主義和達爾文主義』 派納柯克著 施存統訳 商務印書館 一九二二年一月 三二開本 七六頁 二角半

《叢書目録》九一三頁によれば、「新時代叢書」の第三として刊行されている。原著はA. Pannekoek, *Marxism and Darwinism* であるが、施存統訳は日本語版の堺利彦抄訳「マルクス説とダービン説」（『社会主義研究』一卷一六号、一九一九年四月一〇月、後に堺利彦「恐怖・闘争・歓喜」、一九二〇年四月、に収録）からの重訳である（『申報』一九二二年五月九日の広告参照）。新時代叢書とは、上海で戴季陶を中心とし、陳独秀、李大釗らを結集して編集されたものである（『広東群報』一九二一年七月四日に「新時代叢書」の記事あり）。詳しくは、陳紹康、蕭斌如「介紹『新時代叢書』社和『新時代叢書』（『党史研究資料』五、四川人民出版社、一九八五年）参照。『東方雜誌』一九卷一〇号（一九二二年五月）に既刊の広告が出ているが、そこでは原著者は「班納柯克」と記載されている。一九二二年一月一二日から『晨报副鐫』に、班納哥克（Pannekoek）著、雁汀訳「達爾文主義與馬克斯主義」が連載されるが、本書との関係は不明。《李漢俊

推薦本』である。

『俄国革命紀実』 托洛次基著 周詮訳 人民出版社 一九二二年
一月 三二開本 一三四頁 三角五分

『北図目録』四五五頁、および『陸米強』に刊行の記載があり、
『広東群報』一九二二年三月一七日に「新書出版」として広告が
載る。原著は、Trotsky, *From October to Brest-Litovsk* であるが、
トロツキーの同著は、日本語訳が茅原退二郎訳『露西亜革命実
記』（一九二〇年四月）として刊行されており、中国語版の書名
から推して日本語訳の重訳であろうと見られる。訳者周詮の経歴
等は未詳。

『共産党礼拝六』 列寧著 王崇訳 人民出版社 一九二二年一月
一角二分

『王凌雲』によれば、「列寧全書」として刊行されている。原
著は Lenin, *Great Initiative (including the Story of "Communist
Saturday")* (『偉大的創拳』) である。「偉大的創拳」(含「共産党
礼拝六」)(レーニン)は、中国語よりさらに日本語版が山川均、
山川菊栄共訳「共産党土曜日」(『社会主義研究』四巻四号、一九
二二年十一月)として発表されているが、中国語版がそれによっ
ているかどうかは未詳。訳者王崇の経歴等も未詳。

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

『女性中心説』 堺利彦著 李達訳 商務印書館 一九二二年一月
一三四頁 四角

陳紹康、蕭斌如「介紹『新時代叢書』社和『新時代叢書』」
(『党史研究資料』五、四川人民出版社、一九八五年)によれば、
「新時代叢書」の第一として出版されている。堺著となっている
が、もとのテキストはレスター・ワード(烏徳)、エドワード・
カーペンター著、堺利彦、山川菊栄共訳『女性中心と同性愛』
(一九一九年十一月)である(原著は、Lester Ward, *Pure
Sociology*, Cap. 1 および E. Carpenter, *The Intermediate Sex*)。
中国語版の書名からして、同書の堺訳部分のみの重訳であろう。
『社会科学』二、一三三頁に、一九二二年七月の初版とあるが、
「訳者序」の日付「一九二一年七月六日」を刊行時期と誤解した
ものだろう。なお堺の「女性中心説」は、これよりさき、『民国
日報』副刊「婦女評論」に一九二一年八月から、夏丐尊訳、日本
堺利彦達指、美国瓦特原著「女性中心説」として訳出されており、
のちに民智出版社より単行本として刊行された(一九二五年に第
二版)ように、中国においてよく流布していた。なお陳望道も、
同書を亜東図書館の「社会経済叢書」として一九二〇年に出版す
る予定で(『李雲漢』八五頁)、『少年中国』一卷二期から二巻
二期にかけて、広告まで出した(一九二〇年二月刊行予定、書
名は『女性中心與同性愛』)が、これは実際には訳者の多忙によ
り出版に到らなかった(『回憶亞東』四二頁)。

『**俄国共产党綱**』 張西望訳 人民出版社 一九二二年一月 三
二開本 四〇頁 一角

《陸米強》によれば、「康民尼斯特叢書」の第二種として刊行されている。書名どおりロシア共產党の綱領を翻訳したものである。訳者張西望は張西曼の別名。『広東群報』一九二二年三月二日の「人民出版社通告」に出版広告とその目次あり。広告では希曼訳となっている。『人民出版広告』によれば、一九二二年九月時点で既刊のほすであるが、『新青年』の発行が奥付より遅れていたことによる。『青年週刊』（『広東群報』付録）一九二二年三月七日の広告では、布哈林（ブハーリン）著になっているが、真偽は不明。『中国青年』二四号の「一個馬克思學說的書目」で参考図書として挙げられている。

『**國際勞動運動中之重要時事問題**』 季諾維埃夫著 李墨耕訳 人
民出版社 一九二二年一月 三三開本 一二頁 一角

《北図目録》一三八頁によれば、「康民尼斯特叢書」の第三種として刊行されている。李墨耕は李梅羹の筆名であるという（楊東純「關於五四運動和鄧中夏同志幾點回憶」『五四運動回憶錄』上、中国社会科学出版社、一九七九年、三七九頁）。李梅羹の経歴については、吳家林、謝蔭明『北京黨組織的創建活動』（中国人民大学出版社、一九九一年）一六三—一六四頁参照。原著は未詳であるが、ジノビエフがコミンテルンの大会を中心に行った

報告、演説であると思われる。『広東群報』一九二二年三月二日の「人民出版社通告」に出版広告と目次あり。『人民出版広告』によれば、一九二二年九月時点で既刊のほすであるが、『新青年』の発行が奥付より遅れていたことによる。

『**列寧伝**』 山川均著 張亮訳 人民出版社 一九二二年一月 三
二開本 七二頁 二角

近代所蔵。『列寧全書』として刊行されている。原著は、山川均「レーニンの生涯と事業」（『社会主義研究』三卷三号、一九二二年四月、のち一九二一年六月にトロツキー伝を付して、『レーニンとトロツキー』として刊行）である。ジノビエフのレーニンについての演説（一九一八年）をもとにして書かれた伝記であり、中国語訳は山川著をほぼ忠実に翻訳している。訳者張亮の経歴等は未詳。

『**労働政府之成功與困難**』 列寧著 李墨耕訳 人民出版社 一九
二二年二月 三三開本 六二頁

中共一大会址紀念館所蔵。「列寧全書」として刊行されている。原著は、Lenin, *The Achievements and Difficulties of the Soviet Government*（「ソビエト政権の成功と困難」）「蘇維埃政權的成就和困難」であるが、『陳独秀のコミンテルン宛報告』では、*Erfolge und Schwierigkeiten der Sowjetmacht*と記されていること

からみて、ドイツ語版からの翻訳と想像される。《人民出版廣告》の広告、および《王凌雲》によれば、『勞農政府之效果與困難』という書名であるが、誤記であらう。訳者李墨耕については『國際勞動運動中之重要時事問題』の項参照。

『社會主義與進化論』 高畠素之著 夏丏尊、李繼楨訳 商務印書館 一九二二年三月 三二開本 一五一頁 四角五分

上海圖書館所藏。「新時代叢書」として刊行されている。原著は、高畠素之『社會主義と進化論』（一九一九年三月）であるが、高畠本自身がアーサー・リユイスとカウツキーを大幅に参考にしているものであり、訳書に近いものであった。進化論の代表的論者と唯物史觀の關係を紹介してもので、マルクス主義とダーウィニズムの親近性を前提として書かれており、マルクス主義唯物史觀が進化論と不可分とされた当時の状況を物語る。高畠の同書は、夏丏尊と李繼楨により、これより先、一九二二年三月一〇日から『民国日報』「覚悟」に「社會主義與進化論」と題して連載されており、それを刊行したものと見られる。《李漢俊推薦本》である。

『馬克斯學說概要』 高畠素之著 施存統訳 商務印書館 一九二二年四月 三二開本 一〇〇頁 三角

上海圖書館所藏。「新時代叢書」の第四として刊行されている。

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

「新時代叢書」に関しては、前掲『馬克思主義和達爾文主義』の項を参照。原著は、高畠素之『社會主義的諸研究』（一九二〇年一月）であるが、中国語訳はその第一編「マルクスに関する諸研究」のみの抄訳である。「マルクスに関する諸研究」は高畠が種々の雑誌に發表した論説をまとめたもので、唯物史觀、マルクス経済學の基礎、資本主義の歴史的発展を手短に解説したものであった。『東方雜誌』一九卷一〇号（一九二二年五月）に既刊の広告が、また『申報』（一九二二年六月二日）に中訳本の各章見出し紹介が載っている。『中国青年』二四号の「一個馬克思學說的書目」では、参考圖書の第一として挙げられている。

『第三國際議案及宣言』 成則人編 人民出版社 一九二二年四月 三二開本 二一〇頁 四角

北京圖書館所藏。「康民尼斯特叢書」の第四として刊行されている。訳者成則人とは沈沢民のこと。原著は未詳だが、アメリカの *Soviet Russia* や *The Communist* に掲載されたコミンテルン關係の資料を翻訳、編集したものであると見られる。『中国青年』二四号の「一個馬克思學說的書目」で参考圖書として挙げられている。

『社會主義與社會改良』 R・伊利著 何飛雄訳 陶孟和校 商務印書館 一九二二年五月 三二開本 三五二頁 一元

四二七

北京図書館所蔵。「世界叢書」として刊行されている。初版は、北京図書館所蔵本の奥付では一九二二年五月であるが、『申報』（一九二二年九月一七日）の商務印書館新刊広告によれば、一九二二年八月の刊行となっている。実際の刊行が奥付通りではなかったことを示すと思われる。原著は、R. T. Ely, *Socialism and Social Reform* である。これより先、『時事新報』の副刊「学燈」に一九二〇年五月一二日から訳載されたもの（何飛雄訳「社会主義與社会改良」）を、刊行したものであろう。イリーの同著は日本においては、幸徳秋水『社会主義神髓』に引用され、安部磯雄訳『社会主義と社会改良』（『社会政策二論』所収、一九〇九年一月、大日本文明協会）として翻訳されているが、中国語訳がそれを参考にした形跡はない。

『馬克思紀念冊』 中国労働組合書記部編印 バンフレット 一九二二年五月 三五頁 三二開本

《北図目録》九五頁に記載があり、『出版資料』甲に口絵写真あり。王美娣「一九二二年印発的《馬克思紀念冊》」（『党的生活』一九八三年二期）によれば、マルクス生誕一〇四周年を記念して刊行されたもので、『馬克思誕生一〇四周年（年）紀念日敬告工人與学生』、W・リーブクネヒト「馬克思伝」（戴季陶訳「馬克思伝」『星期評論』三二号、一九二〇年一月、と同じもの）、『馬克思学説』（陳独秀「馬克思学説」、『民国日報』「觉悟」一九二二年

五月五日、および『新青年』九卷六号、一九二二年七月、と同じもの）の三つの文章からなっていた。《陳独秀のコミンテルン宛報告》によれば、共産党が全国の共産党所在地で合計二万部を配布したという。

『勞農俄国研究』 山川均、山川菊栄共著 李達編訳 商務印書館 一九二二年八月 三二開本 三七七頁 一元

歴史所所蔵。原著は山川均、山川菊栄共著『勞農露西亜の研究』（一九二二年九月）である。ロシア革命の史実や経過よりも、革命後の建設にかんして、プロレタリア独裁、ソビエト組織、労働組合、農民、教育制度、婦女解放等の解説に重点をおいたものである。当時、まとまった形でソビエト紹介の書としてはほとんど唯一のものだった。山川均のロシア革命研究を中国語に翻訳したものとしては、これより先、一九二一年八月に、王文俊訳『蘇維埃研究』が出ている。『中国青年』二三号「怎樣研究社会科学」、同二六号「略談研究社会科学」の目録では良書として紹介されている。

『馬克斯派社会主義』 W・P・拉爾金著 李鳳亭訳 商務印書館 一九二二年八月 一三九頁 四角

『申報』（一九二二年九月一七日）の商務印書館八月新刊書欄に記載あり。《叢書目録》四一四頁によれば、「共学社／馬克思研

一六期―十一月一六日、第二二期―二月二八日）に連載されていたものをまとめて刊行したものである。堺得意のユーモアあふれる啓蒙書であったが、堺の女性論はこのほかに、李達訳『女性中心説』も翻訳されており、かれが当時の中国で、山川菊栄と並び女性問題の大家としてみなされていたことを物語っている。訳者唐伯焜は、当時『民国日報』副刊「婦女評論」に投稿していたこと以外、経歴等未詳。

『価値価格及利潤』 馬克斯著 李季訳 陶孟和校 商務印書館

一九二二年一〇月 三二開本 九九頁 三角半

『叢書目録』三二〇頁によれば、「世界叢書」として刊行されている。原著は Marx, *Value, Price and Profit* である。同書にかんしては、『綜録』一四二―一四四頁に詳細な歴代中訳本の解説があり、網羅的である。『中国青年』二四号の「一個馬克思学説的書目」では参考図書として挙げられているが、そこでは「価値価格與利潤」という書名になっている。董必武の回憶録（『一大前後二』三六七頁）に言う李季訳『価値利潤』とはこの書を指すとみられる。

『人生哲学與唯物史観』 柯祖基著 郭夢良、徐六幾、黄卓共訳

商務印書館 一九二二年一〇月 三二開本 一七二頁 五角

北京図書館所蔵。「共学社叢書／時代叢書」として刊行されて

いる。『東方雜誌』一九卷二四号（一九二二年二月）に既刊の広告あり。原著は Kautsky, *Ethics and Materialistic Conception of History* であり、英語版からの翻訳であるが、日本語版の堺利彦訳『社会主義倫理学』（一九一三年一月）を参考になっている可能性がある。本書は、ギリシャ哲学、キリスト教倫理学からカント哲学にいたる倫理学説を唯物史観の立場より解説し、同時にマルクス唯物史観も説明したものである。李達は『唯物史観解説』のあとがきで、「倫理與唯物史観」、つまり本書を併せて読むことを勧めている。『中国青年』二六号の「略談研究社会科学」では参考書目の一つにあげられている。同書は、国民党系の李君佩によっても『社会主義倫理学』という書名で刊行予定があつたが、結局は刊行されずに終わっている（Ⅲの『社会主義倫理学』の項参照）。

『資本主義與社会主義』 塞里格門、尼林著 岑德彰訳 商務印書館

一九二三年一月 四八開本 四六頁 一角

近代所蔵。「百科小叢書」として刊行されている。原著は、P. Seligman & P. Nearing, *Debate on Capitalism vs. Socialism* である。本書はセリグマンとニーリングの社会主義をめぐる論戦を収録したものである。訳者岑德彰は広西省西林の人、一八九九年生まれ、アメリカのコロンビア大学で修士課程を修了ののち帰国している（橋川時雄主編『中国文化界人物総鑑』）。経歴からみて

アメリカで手にいれた英語版から翻訳したものらしい。『民国日報』（一九二三年五月一日）に既刊の広告あり。ちなみに同書は、日本においても、河上肇によって翻訳（「一経済学者と一社会主義者との立合演説」『社会問題研究』第二八冊、一九二一年十二月）されている。

『社会主義之意義』 格雷西著 劉建陽訳 商務印書館 一九二三年一月 三二開本 一八七頁 五角

武漢大学図書館所蔵。同書には一九二一年二月付の訳者序があるだけで、奥付がないが、『叢書目録』四一五頁によれば、一九二三年一月に「共学社叢書／社会叢書」として刊行されている。原著は B. Glaser, *The Meaning of Socialism* である。内容は、社会主義諸学説の解説からなる。『梁啓超民国政治』一六二頁によれば、一九二二年の出版であるというが、おそらくは訳者序が一九二一年暮れに書かれたことからの推測であろう。訳者劉建陽の経歴等は未詳。

『新俄遊記』 江亢虎著 商務印書館 一九二三年二月 二四開本 一一三頁十付録六二頁 七角

近代所蔵。江亢虎は一九二一年四月から一九二二年にかけてソ連を訪問し、コミンテルンの第三回大会に参加したが、本書はそれらソ連での体験を綴った旅行記である。全体的にソ連を攻撃

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

する内容になっている。

『馬克斯経済学原理』 恩脱門著 周佛海訳 商務印書館 一九二三年四月 三二開本 三一八頁 九角

上海図書館所蔵。「新智識叢書」として刊行されている。原著は E. Untermann, *Marian Economics* であるが、翻訳は日本語版の山川均訳『マルクス経済学』（一九二一年五月刊——『社会主義研究』一卷一号（一九一九年四月）から二卷一〇号（一九二〇年十二月）まで、一七回にわたって訳載されたものを刊行したもの）から行われている。本書はマルクス『資本論』全三巻の概説書であり、全編の三分の二を唯物史観による歴史的記述に割いており、唯物史観による資本主義発達史ということもできる。周佛海「介紹馬克思経済学説」（『民国日報』「覚悟」一九二二年六月一三日）によれば、かれがすでに翻訳を終え、近く出版するマルクス主義の格好の入門書として、ウンターマン著『馬克斯経済学説』をあげているが、本書を指すとみられる。なお、このほかにもマルクス主義入門書として、アーピリングの *The Students Marx* が挙げられているが、それも山川均が一九一九年一月に『マルクス資本論大綱』として出版しているものであった。周佛海は一連の山川均の訳書を中国語に重訳する計画を持っていたらしい。『中国青年』二四号の「一個馬克思学説的書目」では参考図書として挙げられている。またウンターマンの同書は人民出版社

社からも楊壽訳で刊行予定があった(《人民出版社廣告》)が実際には出版には至らなかった。(Ⅲの『馬克思経済学』の項参照)

『唯物史観浅訳』 劉宜之著 向警予校 上海書店 一九二三年四月 三二開本 六四頁 二角

《北図目録》一二二頁に記載あり。『中国青年』二四号の「一個馬克思学説的書目」によれば、唯物史観の意味についての簡単な説明と階級闘争の概要を記したもので、初学者の研究に便なる内容であつたらしい。同記事は、ゴルテル著 李達訳『唯物史観解説』巻末の付録「馬克思唯物史観概要」を併せて読むように勧めており、ゴルテルか、Labriola, *Essays on the Materialistic Conception of History* あたりを参考に行っていることも推測される。上海書店は一九二三年一月に設立されている中共系の書店だから《王凌雲》、一九二三年四月の初版とすれば、それ以前に他の出版社から出版されていたことになる。訳者の劉宜之の経歴等は未詳。

『社会主義浅説』 梅生編著 星五校 教育研究会 一九二三年四月 三二開本 八八頁 三二開本 一角二分

近代所、および中共一大会址紀念館所蔵。奥付はないが、例言に一九二三年二月四日脱稿の記載あり。また『民国日報』(一九二三年五月一日)「覚悟」に既刊の広告があり、一九二三年四月

頃の刊行と見られる。一九二三年一〇月に第三版(《北図目録》一三二頁)。原著は、高島素之『社会問題総覧』(一九二〇年二月)であるが、「第一編 社会主義」だけの抜粋訳である。社会主義の定義、共産主義と集産主義の相違、社会主義理論の解説、各国社会主義政党的動向、からなる。高島素之『社会問題総覧』はこれより先、李達訳と盟西訳とが刊行されていた。訳者の梅生、校訂者の星五ともに経歴等未詳。

『社会主義與近世科学』 安鋭戈佛黎著 費覺天訳 商務印書館 一九二三年五月 三二開本 一三一頁 三角半

上海図書館所蔵であるが、未見。「共学社叢書／社会叢書」として刊行されている。『婦女雜誌』九卷二〇号(一九二三年一〇月)の「商務印書館出版新書」欄に既刊とある。広告に掲載されているほかの出版物の刊行時期を考え合わせると、一九二三年五月刊行の奥付がついていると考えられる。実際の刊行が一〇月前後にずれ込んだのであろう。《叢書目録》四一五頁によれば、一九二六年一〇月再版。《梁啓超民国政治》一六二頁によれば、一九二二年一月の出版であるというが、根拠は不明。原著は、Enrico Ferri, *Socialism and Modern Science* であるが、『商務圖書目録』四八頁によれば、日本語から翻訳されたとある。日本語からの重訳ならば、藤田三郎訳『近世科学と社会主義』(一九二一年一月)からということになる。訳者の費覺天は本名費秉鐸、湖

北省黄梅人。北京大学在学中に「国民」雜誌社の同人であった。一九二〇年二月に結成された北京大学社会主義研究会（のちに北京共產主義小組となる「馬克斯學說研究会」とは別組織）の會員になつてゐる（『北京大学日刊』一九二〇年二月四日）。

『資本的利潤及資本的發生』 彭守樸訳 馬克思主義研究会 一九三三年五月 三二開本 二八頁

《北図目録》二六〇頁に記載あり。原著は未詳であるが、『今日』二巻四号と三巻一号に彭守樸訳で掲載された「資本的利潤」「資本的產生」を單行本の形で刊行したものだらう。發行元である北京の馬克思主義研究会は、のちに北京共產主義小組に發展する北京大学マルクス學說研究会とは別組織で、雑誌『今日』に結集した青年たちが一九二二年五月に結成した組織である（中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編訳局研究室編『五四時期期刊介紹』第三集上、生活・讀書・新知三聯書店、一九七八年、四三五頁）。訳者の彭守樸の経歴は未詳だが、『今日』にしばしば執筆している。

『近世社会主義論』 伊黎著 黄尊三訳 商務印書館 一九二三年六月 一九六頁

《叢書目録》九二六頁によれば、「新智識叢書」として刊行されている。原著は、R. T. Ely, *French and German Socialism* である。

マルクス主義の伝播と中国共產党の結成

るという（《商務圖書目録》四八頁）が、正式の書名は *French and German Socialism in Modern Times* である。中国語版は、書名からしても、訳者からしても、田島錦治編著（實際は翻訳）『近世社会主義論』（一九一九年五月復刻再版）を翻訳したものである。日本語版は、初版が一九九七年であり、一九二三年に翻訳されるにはやや時代遅れの感があつたが、この手の旧書ですから黄尊三によって翻訳紹介されようところに、むしろ当時の社会主義の流行ぶりがしのばれる。

『陳独秀先生講演録』 中国社会主义青年团広東区執行委員會編 広州丁卜圖書社 一九二三年九月 三二開本 四四頁 一角

《北図目録》一三二頁に記載あり。内容は未詳だが、書名から察するに、各新聞に發表された陳独秀の講演をまとめたものである。『中国青年』二四号の「一個馬克思學說的書目」によれば、内容は「一、我們為什麼相信社会主義？」、「二、我們相信何種社会主義？」、「三、社会主義如何在中国開始進行？」の三篇と付録「社会之歴史的進化」からなり（原載は「社会主義批評——在広東公立法政学校演詞」「広東群報」（一九二二年一月一九日）等である）、青年に対し、マルクス主義に代表される社会主義の道が必然であり、中国においてはまず国民革命の実行をすべきであると説く。

『社会主義神髓』 幸徳秋水著 高勞訳 商務印書館 一九二三年
一月 六四開本 七三頁

『北図目録』一三二頁によれば、「東方文庫」の第二六として刊行されている。「東方文庫」とは『東方雜誌』に掲載された論説等を文庫本として刊行されたものである。原著は幸徳秋水『社会主義神髓』（一九〇三年）。明治時期の日本における社会主義研究の最高水準を示す著作であったが、大正デモクラシー期には後学の堺、高島、山川均らによつてより水準の高い研究が進んでいた。清末において中国に盛んに紹介された幸徳秋水の人氣がこの時期にあつてもなおある程度保たれていたことを示していよう。同書はこれより先、一九〇七年に、蜀魂遥訳『社会主義神髓』が刊行されていた。蜀魂遥訳本と高勞訳本の関係は未詳。

『婦人和社会主義』 山川菊栄著 祁森煥訳 商務印書館 一九二三年 一月 三二開本 一二七頁

『叢書目録』九一三頁によれば、「新時代叢書」として刊行されている。原著は、山川菊栄の評論「社会主義と婦人」が収録されている山川菊栄『女性の反逆』（一九二二年五月）であり、中国語版は節訳と推定される。原著が Bebel, *Die Frau und der Socialismus*（山川菊栄訳『婦人論—婦人の過去・現在・将来』一九二三年三月）である可能性があるが、『商務圖書目録』四八頁でも「山川菊栄著」となっており、ベーベルの名はない。また、中

訳本の分量（日本語版『婦人論—婦人の過去・現在・将来』は七五二頁、祁森煥訳本は一二七頁）からしても、ベーベルの翻訳とは考えにくい。山川菊栄『女性の反逆』は山川菊栄の評論集。祁森煥はこのほかにも山川菊栄の文章を中国語に翻訳している（例えば、『回教國的婦女問題』『晨报副鐫』一九二二年一月一日）が、経歴等未詳。

『社会主義之思潮及運動』上下 列德萊著 李季訳 陶履恭校 商務印書館 一九二三年 一月 三二開本 三一七頁十三六一頁

近代所蔵。「世界叢書」として刊行されている。巻末に一五頁にわたつて、英文社会主義書籍解題を付す。原著は Harry W. Laidler, *Socialism in Thought and Action* である。第一部「社会主義之思潮」（社会主義諸学説、資本主義に対する社会主義の批判）と第二部「社会主義之運動」（国際主義の起源、各国社会党の第一次大戦に対する態度、一九一四年から一九一九年に至る各国の社会主義運動の概要）からなる。李季は『社会主義史』の続編の予定で翻訳し、一九二二年三月に脱稿、刊行予告も出していた（『新青年』九卷一号、一九二二年五月）。

『社会主義初步』 刻爾卡普著 孫百剛訳 中華書局 一九二三年 一月 三二開本 一〇八頁

人文研所蔵（影印本）。『新文化叢書』として刊行されている。

原著は、Thomas Kirkup, *A Primer of Socialism* であるが、翻訳は町野並樹訳『社会思想の変革』（一九二一年九月）か、島中雄三訳『社会主義とは何ぞや』（一九二一年）から行われている可能性がある。カーカップ『社会主義史』のダイジェスト版に、当時の社会主義思潮をつけ加えたもので、古代経済から社会主義学説の起源、社会主義諸派の概説（ボルシェビキを含む）を簡便にまとめたものである。訳者孫百剛は、日本文学関係の翻訳家で倉田百三著『出家とその弟子』等を翻訳している。

『馬克思主義與唯物史観』 范寿康、施存統等訳述 商務印書館 一九二三年二月 六四開本 七三頁 一角

『叢書目録』三四一頁によれば、「東方文庫」として刊行されている。『民国日報』一九二四年一月一八日の広告にも既刊とあり。「東方文庫」は『東方雜誌』に掲載された論文を文庫本として編集したもの。『東方雜誌』一八巻一号（一九二一年一月）には、范寿康「馬克思的唯物史観」（原著は河上肇「マルクスの社会主義の理論的体系 其三」、「社会問題研究」第三冊所収、一九一九年三月）が、また一九巻一一号（一九二二年六月）に、施存統「唯物史観在馬克思学上底位置」（原著は櫛田民蔵「マルクス学に於ける唯物史観の地位」、「我等」一九二〇年一〇月号所収）があるので、それらをあらためて刊行したものと見られる。

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

『勞農俄国之考察』 東方雜誌社編 商務印書館 一九二三年二月 六四開本 一〇三頁 一角

近代所蔵。「東方文庫」第九種として刊行されている。「東方文庫」は『東方雜誌』に掲載された論文を編集したもの。内容は、朱枕新「蘇維埃俄羅斯的過去與現在」（原載『東方雜誌』一九卷一一号）、林可彝「俄国為什麼改行新經濟政策」（『東方雜誌』一九卷一五号）、羅羅、錫琛合編「勞農俄国之面面觀」（原載未詳）の三篇からなる。

『俄国革命史』 朱枕新編訳 商務印書館 一九二三年一月 三二開本 一〇九頁 三角五分

『叢書目録』四一五頁によれば、「共学社叢書／時代叢書」として刊行されている。また『民国日報』一九二四年一月一八日も既刊の広告あり。原著は未詳であるが、広告によればロシア革命の原因、結果を余すことなく詳述したものだという。朱枕新は『勞農俄国之考察』にも文章「蘇維埃俄羅斯的過去與現在」を寄せており、本書の内容に関連すると思われる。（『勞農俄国之考察』の項参照）

〈参考〉『資本論解説』 考茨基著 戴季陶訳 胡漢民補訳 民智書局 一九二七年一〇月 二四開本 三〇八頁 一元

武漢大学図書館所蔵。原著は Kautsky, *Karl Marx' Oekonomi-*

sche Lehren であるが、日本語版の高島素之訳『マルクス資本論解説』（一九一九年）からの重訳である。本書の序によれば翻訳は朱執信、李漢俊と共同で行ったものであり、刊行までに七年の歳月を要しているという。李漢俊訳『馬格斯資本論入門』の序に、戴季陶が本書を翻訳中とあるように、戴季陶は一九一九年一月より『建設』に「馬克斯資本論解説」と題して翻訳を行っていた（『建設』誌上の訳載は未完のまま中断）。また、一九二〇年時点では亜東図書館から社会経済叢書の一冊として出版予定があった（『李雲漢』八五頁）というが、実際には著訳者の多忙により出版にはいたらなかったらしい（『回憶亜東』四二頁）。『少年中国』一卷二期から二卷二期にかけて、亜東図書館の「社会経済叢書」として一九二〇年一月出版予定の広告が載るが、それによれば、戴季陶訳の同書にはW・リーブクネヒトの「マルクス伝」、陳望道訳の「共産党宣言」、同「空想から科学へ」、戴季陶訳「資本論用語釈義」を付録として付ける豪華版の予定であった。一九二七年のものはその時の原稿を利用したものと推測される。カウツキーの同書は、これより先、陳溥賢によって翻訳されていた。（『馬克斯経済学説』の項参照）

Ⅱ 一九二三年以前に刊行されてはいるが、刊行の詳細時期が確定できないもの

『失業問題』 飄萍、吉人訳 泰東図書館 三二開本 六二頁 一角五分

上海図書館所蔵であるが、未見。訳者飄萍とは邵飄萍のこと。吉人は未詳である。『民国日報』（一九二一年三月二六日）の広告に『失業問題』があることからみて、それ以前の出版であることはまちがいない。『叢書目録』五六六頁によれば、一九二一年九月に「社会小叢書」として再版という。『民国日報』（一九二二年六月一〇日）の広告によれば「邵飄萍訳」であるという。原著は未詳だが、翻訳だとすると、売文社編集部編纂『失業問題』（一九一九年）から翻訳された可能性がある。文化書社の一九二一年五月の取扱い書目には「非叢書」扱いで掲載されている（『新民学会資料』二六六頁）。

『兩個工人談話』 安利科馬賓特斯太著 李少穆訳 人民出版社 三二開本 一角

中共一大会址紀念館所蔵、奥付なし。『新青年』九卷六号（一九二二年七月）の広告によれば、人民出版社の出版で既刊とある。文化書社の一九二一年五月の取扱い書目に「非叢書」扱いで掲載されている（『新民学会資料』二六六頁）ことから見て、一九二

一年五月以前に刊行されたことはまちがいない。また、天津の「馬氏通信図書館」の蔵書にも見える（前掲『馬克思主義在天津早期伝播』一〇五頁）。原著は Enrico Malatesta, *A Talk about Anarchist Communism between Two Workers* であると見られる。問答形式をとった啓蒙書で、無政府主義的傾向は持つものの、反資本主義という観点で貫かれている。訳者の李少穆に関しては経歴等未詳。

『労働運動史』 施光亮（施存統）編 人民出版社（中国労働組合書記部） 一〇〇余頁 一角

『新青年』九卷六号（一九二二年七月）に「労働学校教科用書」として既刊の広告があり、一九二二年以前に刊行されたと考えられる。各国の労働運動のたどった道、その中で得られた教訓を記した労働者教育用パンフレットらしい。日本語書の翻訳の多い施存統のことであるから、高島素之一派の出した実務指導のパンフレットである売文社編「労働問題叢書」のうちの『労働運動史』（一九二〇年五月頃）あたりを参考にしていることが想像される。『出版史料』甲 六九頁では新青年社の出版になっている。

Ⅲ 刊行されたと見なされているが、
実際には刊行されていないもの

『馬格斯資本論』 馬格斯著

一九二一年二月二十四日の『北京大学日刊』の出版部代售書籍目録に掲げられているが、この時期、中国では『資本論』の翻訳はなされていない。マルクスの音訳に「馬格斯」が用いられていることから見て、恐らくは李漢俊訳の『馬格斯資本論入門』のことであろう。

『科学社会主義』 エンゲルス著 李培天訳

『新人』一卷六号に「學術研究会叢書」の第五冊として刊行されるという広告あり。しかし、『叢書目録』の「學術研究会叢書」の項に同書はなく、おそらく予告のみで終わったものと思われる。李培天は、河上肇『近世経済思想史論』の訳者である（Ⅰの『近世経済思想史論』の項を参照）。『新人』の広告には室伏高信「民本主義と社会主義」も出版予定にあがっている。

『空想的和科学的社会主義』 エンゲルス著 陳望道訳

鄧明以「五四時期的陳望道同志」（『五四運動回憶録』続 中国社会科学出版社、一九七九年、二七七頁）では一九一九年―一九二一年の間に陳望道が訳したとされており、『社会科学家』第三

卷の陳望道著作年譜によっても、一九二一年に人民出版社から刊行されたことになっている。しかし、『馬恩著作伝播』、『綜録』、『全国総書目』にも出版されたという記載はない。また、『人民出版社廣告』によれば、人民出版社の刊行予定には入っているが、それらはいずれも未刊行に終わっている。亜東図書館では、戴季陶訳『資本論解説』の付録として、陳望道訳『烏他邦社会主義與科学社会主義』を出版する計画があったが、著訳者が多忙となったため結局出版されなかった（『回憶亜東』四二頁）というのが真相だろう。また、『東方雜誌』一七卷一四号には「空想的與科学的社会主义」（燕格士著、一湖訳）の予告広告が載っているが、出版されたかは不明。恐らくは陳訳本と同様に計画だけに終わったと思われる。一湖とは彭蠡の別名である。

『唯物史観釈』 郭泰著 陳溥賢訳

『馬克思伝播史』七一頁によれば一九二一年に「共学社叢書／馬克思主義研究叢書」として商務印書館から出版されたという。しかし、『梁啓超民国政治』の共学社叢書一覧、および『叢書目錄』、『商務図書目錄』、『全国総書目』には、いずれも出版の記載なし。『東方雜誌』一七卷一四号（一九二〇年七月）には、郭泰著、淵泉（陳溥賢）訳『唯物史観解説』の予告広告があるのでそれに基づく誤解であろう。翻訳は、恐らく堺利彦訳『唯物史観解説』（一九二〇年一月）にもとづいて計画されたものと推定され

る。なお、淵泉は「晨報副刊」上に「馬氏資本論釈義」を記載し終えたあと、続けて郭泰爾『唯物史観釈義』を記載する旨予告している（一九一九年一月一日）が、結局は発表されないままに終わった。（Ⅰの『唯物史観解説』の項を参照）

『馬克思経済学説』 柯祖基著 李達訳

『社会科学』第二巻の李達著作年譜によれば、一九二一年に李達訳が中華書局より出版とあり。また、王炯華『李達與馬克思主義哲学在中国』（華中理工大学出版社、一九八八年）の著訳年表でも一九二一年四月に刊行とあり。恐らくは、『マルクス学説研究会蔵書』にその名があがっているので、それに基づいたものだろう。しかし、中華書局の雑誌（例えば『解放與改造』）の広告を見るかぎり、刊行された形跡はなく、『中華總目』、『全国総書目』いずれにも刊行されたとの記載はない。また、「李達自伝」（『党史研究資料』二、四川人民出版社、一九八一年）においても、李達自身が『社会問題総覧』、『唯物史観解説』の翻訳は記述しているが、『馬克思経済学説』には何も触れていない。『マルクス学説研究会蔵書』に同書が見えるのは、陳溥賢訳の同名書があることによる誤記であろう。（Ⅰの『馬克斯経済学説』の項を参照）

『革命與反革命』 エンゲルス著 李漱石訳

陸米強によれば、『人民出版社』に掲載されている李漱石（李漢俊）訳『革命與反革命』は一九二〇年五月に出版されているというが、陸氏の誤記である。エンゲルスの「ドイツの革命と反革命」は一九三〇年に劉鏡園（劉仁静）訳『革命與反革命——一八四八年的德国』（新生命書局、一九三〇年五月）という形で刊行されている。

『社会問題詳解』 高島素之著 李季訳

《マルクス学説研究会蔵書》に李季訳『社会問題詳解』がある。しかし、『社会問題詳解』（高島著、盟西訳、商務印書館、一九二一年四月）と『社会問題総覧』（高島著、李達訳、中華書局、一九二一年四月）はあるが、李季訳は刊行されていない。恐らく訳者が混同されて『北京大学日刊』に記載されたものであろう。包惠僧の回想でも李達訳の『社会問題詳解』があったという（《一大前後》三一九頁）が、これも恐らくは記憶違いで、李達訳『社会問題総覧』のことを指しているものと考えられる。

『社会主義倫理学』 考茨基著 李君佩訳

鄭学稼『中共興亡史』第一卷上（再版本、帕米爾書店、一九八四年）四七〇頁によれば、上海亜東図書館が「社会経済叢書」として、出版を予定していたとあり、『少年中国』一卷一二期から二卷二期にかけて、亜東図書館の「社会経済叢書」として一九二〇年一

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

〇月出版予定の広告が載る。また、戴季陶から堺利彦への書簡によれば、確かに一九二〇年初頭の時点で、李君佩が翻訳にあたっており（戴天仇「三民主義」『解放』一九二〇年二月号）、その一部は一九一九年二月から伯陽訳「倫理與唯物史観」として『閩星』に翻訳、紹介されている（未了と思われる）から、これが戴季陶書簡にいう李君佩の中国語訳であろう。翻訳は堺利彦訳『社会主義倫理学』を元本にしている。伯陽は李君佩の別名であろう。李君佩は、本名李文範、一八八四年生まれ、政法大学に学ぶ。胡漢民に近い人物と考えられる（『革命人物誌』第一卷）。しかし、単行本に関しては、『回憶亜東』四二頁によれば、一九二〇年に広告が出したが、著訳者が多忙となり結局出版されなかったという。原著は「Kautsky, Ethik und materialistische Geschichtsauffassung」であつたろう。カウツキーの同著は『人生哲学與唯物史観』（郭夢良、徐六幾、黄卓共訳、一九二二年）として公刊されている。（Iの『人生哲学與唯物史観』の項参照）

『馬克斯の一生及其事業』 ジョンスパーゴ著 陳公博訳

一九二〇年暮れから一九二一年五月にかけて、陳公博は『広東群報』の「黎明」欄に「馬克斯の一生及其事業」を記載しており、単行本として出版する予定であつた（『広東群報』一九二二年五月二日、「本報啓事」欄）が、刊行には至らなかったと見られる。原著は John Spargo, Karl Marx, His Life and Work である。

同書の翻訳には日本語版『カールマルクス伝』『同、続』（村上正雄訳、一九一九年六月、九月）があるが、陳訳はだいたい日本語訳からは離れている。

『社会主義運動』 マクドナルド著 沈沢民、沈雁冰訳

『解放與改造』二卷一三号の広告によれば、「新文化叢書」のひとつとして刊行予定とあり。また、瞿秋白は一九二一年に「社会主義運動在中国」（瞿秋白文集 政治理論編 第一卷、人民出版社、一九八七年、二九四頁）で、麥克唐納「社会主義運動」が翻訳、出版されたと述べている。しかし、新文化叢書の発行ものである中華書局の雑誌には既刊の広告がなく、『叢書目録』の新文化叢書の項や『中華總目』には刊行の記載なし。マクドナルド著、嚴春椿訳『社会主義運動』が、商務印書館からのちに刊行されている（『商務圖書目録』四八頁）が、刊行年や沈兄弟訳本との関係は未詳である。原著は J. Ramsay MacDonald, *The Socialist Movement* である。

『偉大的創挙』 列寧著 王静訳

『北図目録』二五頁によると、一九二二年一月に人民出版社から出版されたとあるが、実際には所蔵されていない。『新青年』九卷六号（一九二二年七月）等の人民出版社広告には『共产党礼拝六』があがっており、恐らくはこの別題をあげたものだろう。

（Iの『共产党礼拝六』の項参照）。訳者王静は『共产党礼拝六』の訳者王崇と同一人物であると見られる。

『震撼世界的十日』 ジョン・リード著

羅章龍の回想（『一大前後二』一九六頁）ではヴォイチンスキーが、英語で書かれた英国人著（？）の『震撼世界的十日』を持ってきた。北京のマルクス学説研究会ではドイツ語版から中国語訳を作って学習の資料にし、その後、人民出版社におくつたが、原稿が散逸してしまったという（『一大前後二』一九三頁）。原稿はできていたが、実際の刊行にまでは至らなかったと見られる。原著は、John Reed, *Ten Days that Shook the World* である。

*以上のほかに以下の七点が刊行予定はありながら、未刊行に終わったと見られる。いずれも、『人民出版社廣告』に見えるものだが、『王凌雲』、『陸米強』のいずれも記載がない。煩をさけるため、広告での書名、著者、訳者、原著、および日本での翻訳状況のみを並記する。

『馬克斯学説理論的体系』 布丹著 李立訳

原著は、Boudin, *The Theoretical System of Karl Marx* 山川均訳『マルクス学説体系』（一九二二年一月）。

『倫理與唯物史觀』 柯祖基著 張世福訳

原著は、Kautsky, *Ethik und materialistische Geschichtsauffassung*

堺利彦訳『社会主義倫理学』（一九一三年一月）。

『簡易経済学』 阿卜列特著 張空明訳

著者、原著ともに不明。

『多数党底理論』 波斯格特著 康明烈訳

著者、原著ともに不明。

『多数党與世界和平』 托洛茲基著 周詮訳

原著は、Trotzky, *Bolsheviki and World Peace* 室伏高信訳『過

激派と世界平和』（一九一八年）。

『馬克思経済学』 温特曼著 楊壽訳

原著は、Untermann, *Marian Economics* 山川均訳『マルクス経

济学』（一九一二年五月）

『家庭之起源』 伯伯爾著 張空明訳

原著は、Bebel, *Die Frau und der Sozialismus* か（待考）。

【参考文献略称一覧】

- ・邵伝略Ⅱ 旭文編著『邵飄萍伝略』（北京師範学院出版社、一九九〇年）
- ・商務図書目録Ⅱ『商務印書館図書目録（一八九七―一九四九）』（商務印書館、一九八一年）

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成

- ・民国人物伝Ⅱ 李新等編『民国人物伝』一―六卷（中華書局、一九七八―一九八七年）

・北図目録Ⅱ 北京図書館善本組編『北京図書館館藏革命歴史文献簡目』（書目文獻出版社、一九八四年）

・文化書社取扱い書籍Ⅱ 張允侯等編『五四時期的社團』一（生活・讀書・新知三聯書店、一九七九年、六二頁）

・叢書目録Ⅱ 上海図書館編『中国近代現代叢書目録』（商務印書館香港分館排印本、一九八〇年）

・全国総書目Ⅱ 平心編『生活全国総書目』（上海生活書店、一九三五年）

・馬恩著作伝播Ⅱ 中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編訳局馬恩室編『馬克思恩格斯著作在中国的伝播』（人民出版社、一九八三年）

・綜録Ⅱ 北京図書館馬列著作研究室編『馬克思恩格斯著作中訳文総録』（書目文獻出版社、一九八三年）

・李漢俊推薦本Ⅱ 李漢俊「研究馬克思學說的必要及我們現在入手的方法」（『民国日報』「覚悟」一九三二年六月六日）

・一大前後ⅡⅡ 中国社会科学院現代史研究室、中国革命博物館党史研究室編『一大「前後」』（二）、第二版（人民出版社、一九八五年）

・マルクス学説研究会蔵書Ⅱ「馬克斯学説研究会通告（四）」（『北京大学日刊』一九三二年二月六日）

- ・人民出版社廣告Ⅱ「人民出版社通告」『新青年』九卷五号（一九二一年九月の奥付）
- ・出版史料Ⅱ張靜廬編注『中国現代出版史料』全四冊（中華書局、一九五四年）
- ・新民学会資料Ⅱ中国革命博物館、湖南省博物館編『新民学会資料』（人民出版社、一九八〇年）
- ・王凌雲Ⅱ王凌雲「我党在大革命時期的幾個出版發行機關」（『党史研究資料』二、四川人民出版社、一九八一年）
- ・陳独秀のコミンテルン宛報告Ⅱ「中共中央執行委員會書記陳独秀給共產國際的報告」（『中共中央文件選集』第一卷、一九八九年、四七頁）
- ・陸米強Ⅱ陸米強「建党初期人民出版社全書和叢書發行考略」（上海革命歷史博物館（籌）編『上海革命史研究資料——紀念建党七〇周年』、上海三聯書店、一九九一年）
- ・社会科学家Ⅱ北京圖書館文獻叢刊編集部、吉林省圖書館学会會刊編集部共編『中国当代社会科学家』一一九（書目文獻出版社、一九八二—一九八六年）
- ・李雲漢Ⅱ李雲漢『從容共到清党』中国學術著作獎助委員會叢書之十五、一九六六年）
- ・回憶亞東Ⅱ汪原放『回憶亞東圖書館』学林出版社、一九八三年）
- ・梁啓超民国政治Ⅱ張朋園『梁啓超與民国政治』（食貨出版社、一九七八年）
- ・馬克思傳播史Ⅱ庄福齡主編『中国馬克思主義哲學傳播史』（中国人民大学出版社、一九八八年）
- ・中華總目Ⅱ『中華書局圖書總目一九二二—一九四九』（中華書局、一九八七年）

付録 日中社会主義文献翻訳対照表

【説明】 本表は1919年より1922年までに、中国国内で発表された雑誌論文、新聞記事の社会主義関連論文のうち、日本語より翻訳（必ずしも完訳であるとは限らない）された、あるいは日本語文献を多く引用して書かれたものを、日本語文献の原著者ごとにまとめて示したものである。翻訳、引用される頻度の高い河上肇、堺利彦、高島素之、山川菊栄、山川均に関しては、それぞれ項をたてて、発表時期順に論文名、書名を配列した。また、そのほかの日本人に関しては、その他として、これも発表時期順に配列してある。本対照表を作成するにあたっては、でき得る限りの雑誌、新聞を参照したが、実際には五四時期に出された膨大な雑誌すべてに目を通すことは不可能であったため、主に同時代の日本における代表的社会主義研究者であった上記五人の著作の翻訳状況を中心にした。したがって、その他の項に含まれている者の翻訳状況に関しては、決して完全かつ網羅的なものではないことを承知されたい。本表作成には、中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編訳局研究室編『五四時期期刊紹介』1—3集（生活・読書・新知三聯書店、1979年）を参照した。

中国語訳の中には、複数の日本語文献をまとめて収めたものもあるので、そのような中国語著作、論文には*印を付した。また新聞、雑誌、単行本の巻号、刊行時期の表示については、次のような原則にのっとっている。新聞、および新聞の副刊：発行年・月・日で表示。雑誌：巻-号（あるいは、刊行年-月）で表示。単行本：刊行年・（場合によって月も）で表示。

【河上肇】

『歴史の経済的説明 新史観』（翻訳、原著者：セリグマン、1905.6）

陳石孚訳『経済史観』（商務印書館、1920.10）

『貧乏物語』（1917.3）

楊山木訳「救貧叢談」（学藝 2-1、1920.4）

止止（李鳳亭）訳『貧乏論』（泰東図書局、1920.7）

楊山木訳『救貧叢談』（商務印書館、1920.12）

「マルクスの『資本論』」（『社会問題管見』1918.9 所収）

淵泉（陳溥賢）訳「近世社会主義鼻祖馬克思之奮闘生涯」（農報副刊 1919.4.1）

「共同生活と寄生生活」（『社会問題管見』1918.9 所収）

髯客訳「共同生活和寄生生活」（農報副刊 1919.7.6）

「婦女問題漫談」（『社会問題管見』1918.9 所収）

- 陳望道訳「婦女労働問題底一瞥」(星期評論 48, 1920.5)
- 「マルクスの社会主義の理論的体系」(社会問題研究 1, 1919・1)
- 淵泉(陳溥賢)訳「馬克思的唯物史観」(晨報副刊 1919.5.5) *
- 羅琢章訳「馬克思社会主義之理論的体系」(学燈 1919.8.5)
- 李大釗「我的馬克思主義観(上)」(新青年 6-5, 1919.9)
- 范寿康訳「馬克思的唯物史観」(東方雜誌 18-1, 1921.1)
- 「思索の必要と研究の態度」(社会問題研究 1, 1919.1)
- 無署名「思索之必要與研究之態度」(学燈 1919.12.25)
- 「マルクスの唯物史観」(社会及国体研究録 1-1, 1919.3)
- 淵泉(陳溥賢)訳「馬克思的唯物史観」(晨報副刊 1919.5.5) *
- 陳望道訳「馬克斯底唯物史観」(覚悟 1920.6.17)
- 「労働と資本」(翻訳, 原著者: マルクス, 社会問題研究 4, 1919.4)
- 食力訳「労働與資本」(晨報副刊 1919.5.9)
- 「社会主義の進化」(社会問題研究 5, 1919.5)
- 鄭摩漢訳「社会主義之進化」(学燈, 1919.6.11)
- 施存統訳「社会主義底進化」(覚悟, 1921.2.27)
- 施存統編訳『社会經濟叢刊』(泰東図書局, 1922.1) *
- 「利己主義と利他主義」(社会問題研究 6, 1919.6)
- 東里訳「利己主義與利他主義」(学燈 1919.12.9)
- 「資本家的思想の一例」(社会問題研究 9, 1919.10)
- 黄七五訳「資本家思想底一例」(学燈 1920.7.7)
- 「マルクスの唯物史観に関する一考察」(經濟論叢 9-4, 1919.10)
- 安体誠訳「河上肇博士關於馬可思之唯物史観の一考察」(学燈 1919.12.6)
- 「同盟怠業の道德的批判に就て」(經濟論叢 9-5, 1919.11)
- 戴季陶「『薩波達舉』的研究」(星期評論 34, 1920.1) *
- 「資本論に見はれたる唯物史観」(經濟論叢 10-2, 1920.2)
- 徐蘇中訳「見於資本論的唯物史観」(建設 2-6, 1920.8)
- 『近世經濟思想史論』(1920.3)
- 李培天訳『近世經濟思想史論』(泰東図書局, 1920.9)
- 「脳味噌の問題」(翻訳, 原著者: カークパトリック, 社会問題研究 15, 1920.5)
- 于樹德訳「脳筋問題」(覚悟 1920.6.12)
- 「共產者宣言に見はれたる唯物史観」(社会問題研究 16, 1920.6)
- 施存統訳「見於共產党宣言中の唯物史観」(覚悟 1921.5.15)
- 施存統編訳『社会經濟叢刊』(泰東図書局, 1922.1) *

「科学的社会主義と唯物史観」(翻訳, 原著者: エンゲルス, 社会問題研究 17, 1920.7)

徐蘇中重訳「科学的社会主義與唯物史観」(建設 3-1, 1920.12)

「社会主義の未来国」(翻訳, 原著者: ブルクハルト, 社会問題研究 21, 1921.3)

熊得山訳「社会主義的未来国」(今日 1-2, 1922.3)

「労働収益全部に対する権利に就ての考察」(社会問題研究 22, 1921.4)

C. T. (施存統) 訳「馬克思主義和労働全収権」(覚悟 1921.7.19)

「断片」(改造 1921-4)

李茂齋訳「断片 (見日本改造雑誌)」(曙光 2-3, 1921.6)

「マルクスの理想及び其の実現の過程」(社会問題研究 27, 1921.11)

施存統訳「馬克思主義底理想及其現底過程」(東方雑誌 19-6, 1922.3)

「マルクス主義に謂ふ所の過渡期について」(経済論叢 13-6, 1921.12)

光亮(施存統) 訳「馬克斯主義上所謂“過渡期”」(覚悟 1921.12.18)

「唯物史観問答—唯物史観と露西亜革命」(我等 1922-1)

C. T. (施存統) 訳「俄羅斯革命和唯物史観」(覚悟 1922.1.19)

《河上からの翻訳であるが, 出典が不明であるもの》

施存統「馬克思底共產主義」(新青年 9-4, 1921.8)

【堺利彦】

「共産党宣言」(翻訳, 原著者: マルクス・エンゲルス, 社会主義研究 1, 1906.3)

陳望道訳『共産党宣言』(社会主義研究社, 1920.8)

「科学的社会主義」(翻訳, 原著者: エンゲルス, 社会主義研究 4, 1906.7)

衡石訳「科学的社会主義」(覚悟 1920.1.5)

『男女関係の進化』(1908.5)

郭須静訳「男女関係の進化」(新潮 1-5, 1919.5)

『社会主義倫理学』(翻訳, 原著者: カウツキー, 1913.1)

伯陽(李文範) 訳「倫理與唯物的歴史観」(閩星 1-4, 1919.12)

秋明訳「倫理與唯物史観」(学燈 7.7, 1921.7)

董亦湘訳「倫理與唯物史観」(覚悟 1922.9.7)

『自由社会の男女関係』(翻訳, 原著者: カーペンター, 1915)

哲父訳「自由社会的男女関係」(星期評論 28, 1919.12)

『自由社会の自由恋愛』(翻訳, 原著者: カーペンター, 1916)

厚庵訳「男女関係論」(晨报副刊 1919.6.29)

「ポリシエキの建設的施設」(新社会 5-6, 1919.2)

- 寿凡訳「広義派之建設」(解放與改造 1-4, 1919.10)
- 「唯物史観概要」(翻訳, 原著者: ブディン, 社会主義研究 1-1, 1919.4)
- 無署名(陳溥賢)「馬氏唯物史観概要」(晨報副刊 1919.7.18)
- 「マルクス説とダアキン説」(翻訳, 原著者: パンネクック, 社会主義研究 1-1, 1919.4)
- 施存統訳『馬克思主義和達爾文主義』(商務印書館, 1922.1)
- 「フーリエーの社会主義」(社会主義研究 1-3, 1919.7)
- 祝枕江訳「福利耶之社会主義」(解放與改造 1-3, 1919.10)
- 「道德の動物的起源及び其の歴史的変遷」(『唯物史観の立場から』所収, 1919.8)
- 李大釗「物質變動與道德變動」(新潮 2-2, 1919.12) *
- 「宗教及哲学の物質的基礎」(『唯物史観の立場から』所収, 1919.8)
- 李大釗「物質變動與道德變動」(新潮 2-2, 1919.12) *
- 「欧州戦争の経済的原因」(『唯物史観の立場から』所収, 1919.8)
- 李大釗「物質變動與道德變動」(新潮 2-2, 1919.12) *
- 「マルクス主義の分化」(翻訳, 原著者: ラーキン, 社会主義研究 1-5, 1919.9)
- 戴季陶編訳「英国的労働組合」(星期評論 双十節記念号, 1919.10) *
- 『労働者の天下』(『新社会』パンフレット, 1919.10)
- 晋青(謝晋青)訳「労働者底天下」(覚悟 1921.12.16)
- 『女性中心と同性愛』(山川菊栄と共訳, 原著者: ウォード, カーペンター, 1919.11)
- 巧尊(夏巧尊)訳「女性中心説」(婦女評論 1921.8.3)
- 李達訳『女性中心説』(商務印書館, 1922.1)
- 『唯物史観解説』(翻訳, 原著者: ゴルテル, 新版, 1920.1)
- 李達訳「唯物史的宗教観」(少年中国 2-11, 1921.5)
- 李達訳『唯物史観解説』(中華書局, 1921.5)
- 「社会主義の淵源及び其発達」(『恐怖・闘争・歓喜』1920.4 所収)
- 丹卿訳「社会主義發達の経過」(東方雑誌 17-24, 1920.12)
- 「女の演説」(改造 1921-6)
- 曉風(陳望道)訳「女性底演説」(覚悟 1921.5.29)
- 『婦人問題』(無産社パンフレット, 1921.10)
- 伯焜(唐伯焜)訳「恋愛自由説」(婦女評論 1921.10.19)
- 伯焜訳「婦女底天職」(婦女評論 1921.11.2)
- 伯焜訳「我們的家庭主義」(婦女評論 1921.11.16)
- 伯焜訳「女子国有麼?」(婦女評論 1921.11.30)
- 伯焜訳「男女結合底目的」(婦女評論 1921.12.7)
- 伯焜訳「婦女與經濟の平等」(婦女評論 1921.12.14)

伯焜訳「婦女問題概観」(婦女評論 1921.12.28)

唐伯焜訳『婦女問題』(民智書局, 1922.9)

「『女天下』の社会学的解説」(新小説 1922-7)

丐尊訳「『女天下』底社会学的解説」(婦女評論 1922.8.2)

以上のほかに中国語のために書き下ろしたものに次のものがある。

訳者無署名「太平洋会議」(新青年 9-5, 1921.9)

【高島素之】

「個人主義と社会主義」(新社会 2-5, 1916・1)

曉風(陳望道)訳「個人主義與社会主義」(覚悟 1921.8.26)

『社会主義と進化論』(1919.3)

張光煥訳「社会主義與進化論」(新中国 2-7, 1920.7)

夏丐尊, 李繼楨訳「社会主義與進化論」(覚悟 1921.3.10)

夏丐尊, 李繼楨訳『社会主義與進化論』(商務印書館, 1922.3)

『マルクス資本論解説』(翻訳, 原著者: カウツキー, 1919.5)

淵泉(陳溥賢)訳「馬氏資本論釈義」(晨报副刊 1919.6.2)

戴季陶訳「商品生産の性質」(覚悟 1919.11.2)

戴季陶訳「馬克斯資本論解説」(建設 1-4, 1919.11)

陳溥賢訳『馬克斯経済学説』(商務印書館, 1920.9)

『社会問題総覧』(1919.2)

李達訳『社会問題総覧』(中華書局, 1921.4)

盟西訳『社会問題詳解』(商務印書館, 1921.4)

陳望道訳「社会主義底意義及其類別」(東方雜誌 18-11, 1921.6)

施存統訳『馬克思学説概要』(商務印書館, 1922.4)

「マルサス人口論の盛衰と資本主義」(『社会主義諸研究』1920.11 所収)

陳昭彦訳「馬爾塞斯人口論之盛衰與資本主義」(学藝 3-1, 1921.5)

【山川菊栄】

「一九一八年と世界の婦人」(中外 1919-2)

李大釗「戦後之婦人問題」(新青年 6-2, 1919.2)

「社会主義の婦人観」(翻訳, 原著者: ラッパポート, 社会主義研究 1-1, 1919.4)

衡訳「社会主義的婦人観」(覚悟 1919.6.20)

- 鶴鳴（李達）訳「社会主義底婦女観」（婦女評論 1921.10.5）
- 「五月祭と八時間労働の話」（解放 1919-6）
- 李大釗「“五一” May Day 運動史」（新青年 7-6, 1920.5）
- 『婦人の勝利』（1919.6）
- 藹廬訳「欧美近代婦女解放運動」（解放與改造 1-4, 1919.10）
- K 訳「山川菊栄女士婦女解放の意見」（北京大学学生週刊 5, 1920.3）
- Y. D. 訳「日本婦女状況」（婦女雑誌 7-1, 1921.1）
- 李漢俊訳『婦女之過去與将来』（商務印書館, 1921.7）
- 黄芬訳「原始社会的男女関係」（学燈 1921.9.21）
- 嬰彦訳「男女争闘之過去現在及将来」（婦女雑誌 8-2, 1922.2）
- 「世界思潮の方向」（解放 1919-8）
- 金剛, 李漢俊訳「世界思潮之方向」（覚悟 1919.9.5）
- 「婦人論に序す」（ベーベル著, 村上正雄訳『社会主義と婦人』, 1919.8 序文）
- 戴季陶訳「現代女子問題的意義」（星期評論 23, 1919.11）
- 「婦人労働運動の大勢」（『労働年鑑（大正九年版）』1919.5 所収）
- 呉文庵訳「各国婦女労働運動の大勢」（労働界 1, 1920.8）
- 「労農露国の結婚制度」（解放 1920-10）
- 李達訳「労農俄国底結婚制度」（新青年 8-6, 1921.4）
- 「労農露西亜に於ける婦女の解放」（社会主義研究 3-1, 1921.2）
- 徐增明訳「労農俄国底婦人解放」（学燈 1921.5.26）
- 李達訳「労農俄国底婦女解放」（新青年 9-3, 1921.7）
- 「労農露国の代表的三婦人」（社会主義研究 3-1, 1921.2）
- 徐逸樵訳「労農露国代表的三婦人」（学燈 1921.3.2）
- 「労農露国婚姻法」（社会主義研究 3-1, 1921.2）
- 働生訳「俄国婚姻律全文」（覚悟 1921.6.17）
- 「レニンの婦人解放論」（社会主義研究 3-1, 1921.2）
- 李達訳「列寧底婦人解放論」（新青年 9-2, 1921.6）
- 「紳士閥と婦人解放」（解放 1921-3）
- 李達訳「紳士閥與婦女解放」（婦女雑誌 7-6, 1921.6）
- 「産児制限論と社会主義」（社会主義研究 3-5, 1921.6）
- 味辛訳「産児制限與社会主義」（婦女雑誌 8-2, 1922.6）
- 「労働婦人の解放」（堺為子編『無産社リーフレット』1921.9 所収）
- Y. D. 訳「労働婦女底解放」（婦女評論 1921.12.21）
- 『リープクネヒトとルクセンブルグ』（水曜会パンフレット, 1921.11）

李特（李達）訳「李ト克内西伝」（覚悟 1922.1.15）

李達訳編『李ト克内西紀念冊』（パンフレット，1922.1）

「回教国の婦人問題」（女性改造 1922-11）

祁森煥訳「回教国的婦女問題」（晨报副鐫 1922.11.14）

以上のほかに、次のものがある

鄭伯奇「訪問日本婦女問題女論客山川菊栄女士之談話」（少年世界 1-8, 1920.8）

黄芬訳「山川菊栄特集（12篇）」（学燈 1921.10.3-11.19）

【山川均】

「労働運動戦術のサボターヂュ」（改造 1919-9）

戴季陶「『薩波達舉』的研究」（星期評論 34, 1920.1）＊

「現代文明の経済的基礎」（『社会主義者の社会観』1919.11 所収）

施存統訳「現代文明底経済的基礎」（覚悟 1921.2.23）

「フランス労働総同盟の研究」（改造 1920-4）

鄒敬芳訳『労働総同盟研究』（泰東図書局，1921.5）

「労農露国の経済組織」（社会主義研究 2-7, 1920.9）

陳国渠訳「蘇維埃俄国底経済組織」（国民 2-4, 1921.5）

「産児調節と新マルサス主義」（改造 1920-10）

平沙（陳望道）訳「生育節制和新馬爾塞斯主義」（婦女評論 1922.5.17）

「労農露国の労働組合」（解放 1920-10）

陳望道訳「労農俄国底労働聯合」（新青年 8-5, 1921.1）

「ソヴィエット露国の農業制度」（社会主義研究 2-9, 1920.11）

周佛海訳「労農俄国的農業制度」（新青年 8-5, 1921.1）

陳国渠訳「蘇維埃俄国底新農制度」（国民 2-4, 1921.5）

「カウツキーの労農政治反对論」（社会主義研究 3-2, 1921.3）

施存統訳「考茨基労農政治反对論」（覚悟 1921.4.1）

施存統編訳『社会経済叢刊』（泰東図書局，1922.1）＊

「労農治下のクロボトキン」（社会主義研究 3-2, 1921.3）

鳴田抄訳「由英婦俄後的克魯泡特金」（覚悟 1921.4.7）

「労働組合運動と社会主義」（日本労働新聞 45, 1921.3）

光亮（施存統）訳「労働組合運動和階級闘争」（覚悟 1921.8.19）

「社会主義国家と労働組合」（改造 1921-4）

周佛海訳「社会主義国家與労働組合」（新青年 9-2, 1921.6）

- 「労農口国無政府主義の人々」(社会主義研究 3-4, 1921.5)
 施存統訳「労農俄国底安那其主義者」(覚悟 1921.6.1)
 「ソヴィエトの研究」(改造 1921-5)
 均(李漢俊)「労農制度研究」(共産党 5, 1921.6)
 王文俊訳『蘇維埃研究』(北京知新書社, 1921.8)
 『レーニンとトロツキー』(1921.6)
 張亮訳『列寧伝』(人民出版社, 1922.1)
 「梅雨時期の日本」(改造 1921-7)
 羅豁訳「梅雨節的の日本」(覚悟 1921.7.12)
 『労農露西亜の研究』(山川菊栄と共著, 1921.9)
 李達編訳『労農俄国研究』(商務印書館, 1922.8)
 『労農革命の建設的方面』(山川菊栄と共訳, 原著者:レーニン, 1921.9)
 象予訳「労農俄国底建設事業」(晨報副鐫 1922.2.15)
 『農村問題』(堺利彦と共著, 無産社パンフレット, 1921.10)
 Y. D. 訳「農民為什麼苦呢?」(覚悟 1921.12.6)
 『タンクの水』(1921.11)
 晋青(謝晋青)訳「奴隸和鉄鎖」(覚悟 1921.11.14)
 長庚訳「水槽底水」(覚悟 1922.5.1)
 「インタナショナルの歴史」(社会主義研究 1922-9)
 熊得山訳「國際労働同盟の歴史」(今日 2-3, 1922.10)

以上のほかに、中国語の為に書き下ろしたものとして次のものがある。

- 李達訳「從科学的社会主义到行動的社会主义」(新青年 9-1, 1921.5)
 訳者無署名「對於太平洋會議的我見」(新青年 9-5, 1921.9)

【その他】

- 志津野又郎訳「マルクス伝」(原著者:W. リープクネヒト, 社会主義研究 1, 1906.3)
 戴季陶訳「馬克斯伝」(星期評論 31, 1920.1)
 福田徳三『統經濟学研究』(1913.11)
 李大釗「我的馬克思主義觀(下)」(新青年 6-6, 1919.11)
 北沢新次郎『労働者問題』(1919.1)
 李漢俊訳「I WW概要」(星期評論 33, 1920.1)
 施存統訳「労働問題」(覚悟 1921.1.6)
 施存統編訳『社会經濟叢刊』(泰東圖書局 1922.1) *

- 米田庄太郎「デモクラシーと我国—社会学的考察—」(大阪朝日新聞 1919. 2. 23)
 微訳「民主主義與社会主義」(晨報 1919. 4. 2)
 米田庄太郎『晩近社会思想の研究』(1919. 4)
 劉震訳「法的社会主義之研究」(法政學報 2-5, 1920. 5)
 吉野作造「民本主義・社会主義・過激主義」(中央公論 1919-6)
 晨曦訳「民主主義—社会主義—布爾塞維克主義」(晨報副刊 1919. 7. 1)
 尾崎士郎, 茂木久平『西洋社会運動者評伝』(1919. 6)
 筑山醉翁(陳光燾)訳「西洋之社会運動者」(晨報副刊 1919. 8. 1)
 賀川豊彦「唯心的經濟史觀の意義」(改造 1919-7)
 無署名「馬氏唯物史觀的批評」(晨報副刊 1919. 7. 25)
 佐野学「労働者運動の指導倫理」(解放 1919-8)
 寿凡訳「労働運動之倫理的指導」(解放與改造 1-2, 1919. 9)
 「露国の片面 レーニン語る」(大阪毎日新聞 1919. 9. 7)
 戴季陶訳「李寧的談話」(星期評論 16, 1919. 9)
 室伏高信「ギルドソーシアリズム及び其の批判」(批評 7, 1919. 9)
 戴季陶編訳「英国的労働組合」(星期評論 双十節記念号, 1919. 10) *
 遠藤無水訳『通俗マルクス資本論 附マルクス伝』(原著者: マーシー, 1919. 11)
 李漢俊重訳『馬格斯資本論入門』(社会主義研究社, 1920. 9)
 中目尚義訳『マルクス派社会主義』(原著者: ラーキン, 1919. 11)
 李達「馬克思派社会主義」(新青年 9-2, 1921. 6)
 李鳳亭訳『馬克斯派社会主義』(商務印書館, 1922. 8)
 室伏高信『社会主義批判』(1919. 11)
 紹虞訳「布爾塞維克的批判」(解放與改造 2-16, 1920. 8)
 李培天訳「社会主義批評」(学燈 1921. 1. 6)
 小泉信三「学問芸術と社会主義」(三田学会雑誌 13-11, 1919. 11)
 劉步青訳「科学芸術與社会主義」(学燈 1920. 2. 5)
 壳文社編『労働經濟論』(1919. 12)
 施存統訳「労働經濟論」(覚悟 1921. 3. 27)
 壳文社編『現時の労働問題概論』(1919. 12)
 馮飛訳述『労働問題概論』(華星印書社, 1920. 7)
 吉野作造「唯物史觀の解釈」(中央公論 34-13, 1919. 12)
 陳望道, 張維祺訳「唯物史觀底解釈」(浙江省立第一師範学校校友会十日刊 10, 1920. 1)
 遠藤無水訳『科学的社会主義 附エンゲルス伝』(原著者: エンゲルス, 1920. 1)

- 鄭次川訳『科学的社会主義』（群益書社，1920.8）
- 森戸辰男「クロボキンの社会思想の研究」（経済学研究 1，1920.1）
- 于樹徳訳「克魯泡特金社会主義思想研究」（建設 2-3，1920.4）
- 枕江（祝枕江）訳「克魯泡特金之社会思想研究」（解放與改造 2-9，1920.5）
- 村上正雄「社会主義と個人主義」（社会主義研究 2-3，1919.4）
- 明権訳「社会主義與個人主義」（学燈 1920.8.16）
- 茅原退二郎訳『露西亞革命実記』（原著者：トロツキー，1920.4）
- 周詮訳『俄国革命紀実』（人民出版社，1922.1）
- 浅野護訳『過激主義の心理』（原著者：スパーゴ，1920.5）
- 陳国渠訳『布爾什維主義底心理』（商務印書館，1921.5）
- 中目尚義訳述『過激派の本領』（1920.5）
- 孫範訳『過激党真相』（泰東圖書局，1921.3）
- 櫛田民蔵「マルクス学に於ける唯物史観の地位」（我等 1920-10）
- 施存統訳「唯物史観在馬克思学上底位置」（東方雜誌 19-11，1922.6）
- 横田千元『労農露西亞問答』（水曜会パンフレット，1921.11）
- 光亮（施存統）訳「労農俄国問答」（先驅 13，1922.11）